



Title	現場力から世直しへ : 世直し研究会エッセイ集
Author(s)	岡野, 彩子; 池田, 光穂; 池宮, 輝哉 他
Citation	Co*Design 特別号. 2022, 5, p. 1-251
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現場力から世直しへ

世直し研究会エッセイ集

編著

岡野 彩子

大阪大学COデザインセンター 世直し研究会

はじめに

本書は大阪大学 CO デザインセンターにおいて 2018 年 4 月 25 日にスタートした世直し研究会に分野を越えて集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとにじっくり考えて綴ったエッセイ集です。世直し研究会は 2006 年 4 月から 2016 年 3 月まで大阪大学コミュニケーションデザイン・センターで開催された現場力研究会の後継として生まれました。月 1 回のペースで開かれ、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく〈世〉のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、〈世直し〉へと繋げていくことが目指されています。

第 1 章では、通算 215 回を数える世直し研究会へのあゆみを時系列に記しています。第 2 章では、前身の現場力研究会が送り出した著作物である「現場力」研究術語集および「現場力」ノオトから 30 選のエッセイと 1 編のコラムをご紹介します。最後の第 3 章では、「世直し」ノオトとして書き継がれた 68 編のエッセイすべてを掲載いたしました。

今日うち続くコロナ禍によって人びとの社会生活や暮らしの現場は困窮を深めています。一方で人ととの接触にリモートが普及し、仮想の人間関係も増殖しています。しかしこのことを単純に〈進歩・改革〉として受け入れることには注意が必要でしょう。本書に収められた 99 編のテクストを読み進めるごとに、生身の人間が息づき、真の人間関係が結ばれる現場の力に依拠してこそ、本ものの進歩や改革つまり世直しが見えくるであろうことに気づかされる思いがします。立ちどまり、いろんな分野の人びとと対話を重ね、とまどいためらいながら、一緒に世直しを考えていきませんか。

目次

はじめに.....	i
第1章 世直し研究会へのあゆみ.....	1
～ 現場力研究会から世直し研究会へ～	
開催研究会（全215回）.....	2
◆現場力研究会（第1回～第170回）.....	2
◆世直し研究会（第171回～第215回）.....	15
第2章 現場力研究会.....	21
「現場力」研究術語集.....	22
「現場力」ノオト30選.....	25
1. 声の記述 西川勝.....	26
2. 後知恵 西川勝.....	28
3. 障害を笑う（其の一） 高橋綾.....	30
4. 障害を笑う（其の二） 高橋綾.....	32
5. 障害を笑う（其の三） 高橋綾.....	34
6. 協働実践の組み換え 西村ユミ.....	36
7. 技術の答え 安田伸行.....	38
8. 木村敏の＜あいだごと絶対の他 小林恭.....	40
9. <生命／人間的生／いのち>と生命論的差異 小林恭.....	42
10. 下語・著語・付け句—コミュニケーションにおける非連続の連続 小林恭.....	44
11. シンプルな言葉 安田伸行.....	46
12. 痛みの経験 岡野彩子.....	48
13. アンドロイドは現場力を發揮することができるか？ 池田光穂.....	50
14. 私はいつも彼をカメラ越しに ほんまなほ.....	52
15. おもしろい会議 西川勝.....	54
16. 場を担う 上條美代子.....	56
17. 人それぞれ 横本直樹.....	58
18. 現場力はケータイの細部に宿る 池田光穂.....	60
19. 尊厳する 上條美代子.....	62
20. 月のもとにいる 西村ユミ.....	64
21. 常に新たに現れる場 野島那津子.....	66
22. ダイアローグ1 相槌の音 ほんまなほ.....	68

23. ダイアローグ2 表現 ほんなまほ	70
24. ホッキスは左45度? 岡野彩子	72
25. ごはん 安田伸行	74
26. ひとすくい 上條美代子	76
27. ためらいの現場力 西川勝	78
28. 伽藍の知・バザールの知 宮本友介	80
29. 現場に臨む記号論 山森裕毅	82
30. 大学生が考える現場力 山本彩加・池田光穂	84
Column ポケットルーム探訪記・異聞譚 池宮輝哉(てるくん)	86
 第3章 「世直し」ノオト	89
第1集 「世直し」ノオト (2018年度・夏)	91
1. 世直し研究の「思想」について考える 池田光穂	92
2. よりみち日暮らしがいい 井上こう	94
3. 「面倒くさい飼い主」、この言葉に心がざわつく 今井泉	96
4. 世直し人一ルターの場合一 岡野彩子	98
5. 世直しのために —何者でもなくなつてからも話をしよう— 上條美代子	100
6. オウム真理教事件で考える「いのちと宗教」 —一世直し研究会レビューの「序」として一 北村敏泰	102
7. 音楽というきしみ 滝奈々子	104
8. いのちをぼうにふらせるな! —反・生命的の物象化— 林田雅至	106
9. 「なおす」と「しまう」 宮本友介	108
10. 質問をデザインする 山森裕毅	110
 第2集 「世直し」ノオト (2018年度・冬)	113
1. 歓待の共同体としての大学の〈理想〉と〈現実〉 池田光穂	114
2. 『飼い主』ではなく『ご家族』と呼ぶこと 今井泉	116
3. 「ネコの権利」と「ヒトの権利」 海野隆	118
4. 「仕方がなかったなどというてはいかんのです」 岡野彩子	120
5. 責任 上條美代子	122
6. 支援の「立場性」と世直し 北村敏泰	124
7. 真の男女共同参画のために必要なこと 熊野以素	126
8. 「世直し」は日常の細部から —日々の生活に潜む「生命」の危機— 林田雅至	128
9. 永野三智『みな、やっとの思いで坂をのぼる』 出版記念トークショーを企画して 牧口誠司	130
10. マジョリティ・ブルー 山森裕毅	132

第3集 「世直し」ノオト (2019年度・夏).....	135
1. 乳児のいのちと「水の洗礼」 池田光穂.....	136
2. カヨックを踊る、「いのち」の意味を想像する 井上こう	138
3. 被害者家族サイドに立った死刑制度の見直しを 海野隆	140
4. 「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」 岡野彩子	142
5. 居場所を得る 上條美代子	144
6. ゲゲゲの過ちーあるいはアトムなる憂鬱 北村敏泰	146
7. 自宅で最期を迎える 熊野以素	148
8. ハーブが奏でる「いのち」と靈 滝奈々子	150
9. 長期滞在外国人の生命を巡る外国語双方向運用能力 (interactive competence) の不可欠性 林田雅至	152
10. 「これでいいのだ」 山森裕毅	154
第4集 「世直し」ノオト (2019年度・冬).....	157
1. ピー・ピー・エル (PBL) としての世直し研究会 池田光穂	158
2. 「晒す」という贈与 井上こう	160
3. 食品添加物や農薬は本当に怖いのか? 海野 隆	162
4. 一隅を照らす人 岡野彩子	164
5. 私のヒーロー 夜廻り猫の達藤平蔵と母 上條美代子	166
6. 「普通」「フツー」って何? 北村敏泰	168
7. 介護保険の改悪を許さない! 熊野以素	170
8. 民族音楽学者としてのうしろめたさ 滝奈々子	172
9. 「外国人労働力」ではなく異国で働く普通の労働者の存在を認めよう 林田雅至	174
10. MINAMATA obscura 宮本友介	176
11. ことばの選択、あるいは洗濯 山森裕毅	178
～第4集 「世直し」ノオト (2019年度・冬) 編集後記～	180
第5集 「世直し」ノオト (2020年度・夏).....	181
1. 新型コロナ流行下のこども食堂への影響について 池田光穂	182
2. はじめてのオンライン授業 岡野彩子	184
3. 平熱か三度確かめいざ出陣ケア現場の「三密」越えて 上條美代子	186
4. 「コロナで新時代」だってえ?! 北村敏泰	188
5. 命の価値(後期高齢者のつぶやき) 熊野以素	190
6. 柔らかく耐えること～コロナウィルスと祈りと音楽～ 滝奈々子	192
7. アマビエは笑う 日高悠登	194
第6集 「世直し」ノオト (2020年度・冬).....	199
1. 前編：コレラの時代の愛 池田光穂	200

2. 後編：コロナの時代の愛 池田光穂	202
3. 飼れとは面白きものなり 井上こう	204
4. 誰も置き去りにしない授業 岡野彩子	206
5. 「新しい生活様式」 上條美代子	208
6. コロナで揺らぐいのちー「命の選別」にどう向き合うか 北村敏泰	210
7. 言葉の力 熊野以素	212
8. 抱きしめる—コロナのなかで看取るということ 滝奈々子	214
9. コロナ時代にコスタリカの「世直し人」を想う 額田有美	216
10. 記憶を繼ぐ者の責務 日高悠登	218
 第7集 「世直し」ノオト（2021年度・夏）	221
1. 世直しのコミュニケーションデザイン 池田光穂	224
2. この「崩壊」は恐ろしい 井上こう	226
3. 小さな共同体 岡野彩子	228
4. 死なれっちまった 上條美代子	230
5. まず「聴く」ことから—寄り添うとは 北村敏泰	232
6. 「しかたなかったと言うてはいかんのです」 ～九州大学生体解剖事件～ 熊野以素	234
7. わたしと世直しと音楽と 滝奈々子	236
8. 翻弄するケア 日高悠登	238
9. 「世」を問う—世間とソーシャル 宮本友介	240
10. 「助かる文化」を考える 山森裕毅	242
～第7集 「世直し」ノオト（2021年度・夏）編集後記～	244
 あとがき	246
現場力研究会と世直し研究会による著作物	248
◆現場力研究会	248
◆世直し研究会	249
◆研究会ホームページ	250
 著者紹介	251

第1章

世直し研究会へのあゆみ

～現場力研究会から世直し研究会へ～

2018年4月25日に誕生した「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザイン・センターにおいて開催された「現場力研究会」の後継として組織されました。現場力研究会として170回、世直し研究会として45回、通算して215回の研究会を開催してきました。下記に各回の内容を時系列に示します。

開催研究会（全215回）

【凡 例】

特別な行事を除き定例研究会に関しては、回次（開催年月日）発表者「主題（読書会の場合は取り上げる図書の情報）」の順に記載。

例：第〇〇回（2020年XX月XX日）大阪花子「私にとっての〈世直し〉とは」

第△△回（2021年XX月XX日）大阪太郎「永野三智著『みな、やつとの思いで坂をのぼる：水俣病患者相談のいま』ころから株式会社、2018」

◆現場力研究会（第1回～第170回）

2006年度（平成18年度）

第1回（2006年4月12日）参加者全員「学習会の目的の確認、今後の進め方、抄読する本・資料の検討」

第2回（2006年4月19日）池田光穂「田辺繁治『生き方の人類学』（第1章）」

第3回（2006年4月26日）西村ユミ「田辺繁治『生き方の人類学』（第2章）」

第4回（2006年5月10日）西川勝「田辺繁治『生き方の人類学』（第3章）」

- 第5回（2006年5月17日）参加者全員「全体討論 フリーディスカッション；実践コミュニティと「学習」について」
- 第6回（2006年5月24日）鳥海直美「田辺繁治『生き方の人類学』（第4章）」
- 第7回（2006年5月31日）中西淑美「田辺繁治『生き方の人類学』（第5章）」
- 第8回（2006年6月7日）ほんまなほ「田辺繁治『生き方の人類学』（第6章）」
- 第9回（2006年6月14日）参加者全員「全体討論：今後の進め方、現場とは何か」
- 第10回（2006年6月21日）《拡大研究会》コミュニケーションデザイン研究会との合同研究会（発表：渥美公秀、シンポジウム：西村ユミ+志賀玲子+要真理子+久保田テツ、司会：ほんまなほ）渥美「共同的実践と現場力」+現場力に関するシンポジウム
- 第11回（2006年6月28日）工藤直志「ジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』（序、第1、2章）」
- 第12回（2006年7月5日）仲谷美江「ジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』（第3章）」
- 第13回（2006年7月12日）参加者全員「全体討論（フリーディスカッション）」
- 第14回（2006年7月19日）久保田テツ「後藤武、佐々木正人、深澤直人『デザインの生態学』（第1章）」
- 第15回（2006年7月26日）花村周寛「後藤武、佐々木正人、深澤直人『デザインの生態学』（第2章）」
- 第16回（2006年8月2日）参加者全員「現場力の活動報告と現場力に関連する用語集（一部）の作成」
- 第17回（2006年10月4日）《拡大研究会》島薗洋介「腎臓とはどのような

な商品か：国際臓器市場とフィリピンの移植ドナー」

第18回（2006年10月11日）平井啓「認知心理学からみた現場力：熟達化について」

第19回（2006年10月18日）池田光穂「〈現場力〉について；言葉による概念の受肉化」

第20回（2006年10月25日）西村ユミ「〈動くこと〉としての〈見ること〉」

第21回（2006年11月1日）参加者全員「全体討論：今後講読する書誌について、「現場力」研究術語集の内容確認について」

第22回（2006年11月8日）西川勝「医療現場のQCストーリー」

第23回（2006年11月15日）西川勝「医療現場でのKAIZENについて」

第24回（2006年11月29日）仲谷美江「研究所でのQC活動；M社の安全衛生管理」

第25回（2006年12月6日）池田光穂「問題に基づく学習（PBL）について」

第26回（2006年12月13日）志賀玲子「演劇のプロデュースの現場について」

第27回（2007年1月10日）参加者全員「全体討論：QC、カイゼン、PBL、ダンスのプロデュースに関する検討」

第28回（2007年1月17日）参加者全員「全体討論：今後の進め方を検討する」

第29回（2007年1月24日）ほんまなほ「ネオソクラティックダイアログ（SD）；対話ワークショップ」

第30回（2007年1月31日）ほんまなほ「ネオソクラティックダイアログ（SD）の考え方」

第31回（2007年2月7日）参加者全員「全体討論：ネオソクラティックダイアログ（SD）による「納得」に関するディスカッション」

第32回（2007年2月21日）志賀玲子「ダンスのプロデュースで経験した

説得とその企画の映画鑑賞」

第33回（2007年2月28日）池田光穂「『経済発展』の人々の語りの中で」

第34回（2007年3月7日）西村ユミ「ケアに埋め込まれた暗黙知を見出す方法論」

2007年度（平成19年度）

第35回（2007年4月11日）工藤直志「『現場力』再考（1） 現場力とはどのような概念なのか」

第36回（2007年4月18日）工藤直志「『現場力』再考（2） ベイトソンの学習理論」

第37回（2007年5月9日）西川勝「〈ケアの彈性〉について」

第38回（2007年5月16日）仲谷美江「認知心理学における〈場〉〈現場〉」

第39回（2007年5月23日）池田光穂「認知症と脳科学の現状」

第40回（2007年5月30日）参加者全員「全体討論：現場力に関するディスカッション」

第41回（2007年6月6日）藤田優一「小児看護師の職務ストレスとホープ特性、およびコーピング特性に関する研究」

第42回（2007年6月13日）重山優子「芸術活動において何が行われているか」

第43回（2007年6月27日）ほんまなほ「C.I.バーナード『経営者の役割』」

第44回（2007年7月4日）池田光穂「ルーシー・A.サッチマン『プランと状況的行為』」

第45回（2007年7月11日）山崎吾郎「Bruno Latour “Reassembling the Social”」

第46回（2007年7月18日）西川勝「上野直樹『仕事の中での学習』（序、1章）」

第47回（2007年10月3日）参加者全員「全体討論：現場力研究会術語集について」

第48回（2007年10月17日）山崎吾郎「エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』（前半）」

第49回（2007年10月24日）山崎吾郎「エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』（後半）」

第50回（2007年10月31日）西村ユミ「上野直樹『仕事の中の学習 状況論的アプローチ』（2、3章）」

第51回（2007年11月7日）仲谷美江「上野直樹『仕事中の学習 状況論的アプローチ』（4、5章）」

第52回（2007年11月21日）高橋綾「活動の拡張としての学習」

第53回（2007年11月28日）高橋綾「哲学的対話が目指すもの」

第54回（2007年12月19日）志賀玲子「甲谷さん支援と学びの会の活動報告」

第55回（2008年1月9日）藤田優一「小児看護を実践する看護師の属性および個人特性と職務ストレスおよび離職願望との関連」

第56回（2008年1月16日）池田光穂「病気から不調へ：日本における〈ぼけ〉のポピュラーイメージ」

第57回（2008年1月23日）西川勝「認知症について」

第58回（2008年1月30日）西川勝「つり道具」

第59回（2008年2月13日）西村ユミ「遺伝医療における医療者－市民間のコミュニケーション」

第60回（2008年2月27日）平井啓「がん患者に対する問題解決療法」

2008年度（平成20年度）

第61回（2008年4月16日）西川勝・西村ユミ「北海道医療大学大学院看

護福祉学科との合同研究会報告」

第62回（2008年4月23日）高橋綾「コミュニティ・カフェ構想—女性たちが自分の仕事を「つくる」ということ」

第63回（2008年5月7日）池田光穂「現場力研究等の将来展望について」

第64回（2008年5月21日）菅磨志保「現場力研究に向けて：災害救援・復興の事例から」

第65回（2008年6月4日）松本篤「映像カフェの現場における具体的な取り組みについて」

第66回（2008年6月18日）仲谷美江「シックハウスに関する相談への対応について」

第67回（2008年7月2日）宮本博史・西川勝「犬島時間：アーティストとして犬島でいかに活動をしているのか」

第68回（2008年7月16日）ほんまなほ「インドネシア公演の紹介」

第69回（2008年7月30日）参加者全員「全体討論：執筆に関するうち合わせ研究会」

第70回（2008年10月1日）西川勝・宮本博史「犬島時間の報告」

第71回（2008年10月15日）西村ユミ「Schon, D. の『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』の解説紹介」

第72回（2008年10月29日）池田光穂「第1部（1章、2章）：Schon, D. 『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』」

第73回（2008年11月5日）西川勝「第2部（3章、4章）：Schon, D. 『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』」

第74回（2008年11月19日）池田光穂「CBPRについて」

第75回（2008年12月3日）西村ユミ「第2部（5章）：Schon, D. 『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』」

第76回（2008年12月17日）西村ユミ「第2部（6章、7章）：Schon, D. 『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』」

第77回（2008年12月24日）志賀玲子「第2部（8章、9章）：Schon, D.

『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』』

第78回（2009年1月21日）高橋綾「第3部（10章）：Schon, D.『省察的実践とは何か？—プロフェッショナルの行為と思考』」

第79回（2009年2月4日）参加者全員「全体討論」

第80回（2009年3月4日）西村ユミ「第1章：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

第81回（2009年3月18日）池田光穂「第2章：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

2009年度（平成21年度）

第82回（2009年4月1日）西川勝「第3章：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

第83回（2009年4月15日）仲谷美江「第4章、1、2：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

第84回（2009年5月27日）志賀玲子「第4章、3：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

第85回（2009年6月3日）高橋綾・ほんまなほ「第5、6章：塚本明子著『動く知フロネーション』ゆみる出版、2008」

第86回（2009年6月17日）参加者全員「全体討論：今後の進め方、拡大現場力研究会について」

第87回（2009年7月1日）池田光穂・西村ユミ「『ケア その思想と実践1』」「『ケアという思想』」「『ケア その思想と実践4』」「『障害児の母親が職業を捨てないということ』」

第88回（2009年7月15日）高橋綾「『ケア その思想と実践1』」「『逆転の発想』」

第89回（2009年8月7日）参加者全員「全体討論《拡大現場力研究会》『動く知フロネーション』と現場力について」

第90回（2009年10月7日）安田伸行「田中かず子「感情労働としてのケ

アワーカ」『ケア その思想と実践』第2巻】

第91回（2009年10月21日）小林恭「田中かず子「感情労働としてのケアワーカ」『ケア その思想と実践』第2巻】

第92回（2009年11月4日）仲谷美江「『ケア その思想と実践』第1巻・第3巻 岩波書店、2008年】

第93回（2009年11月18日）西川勝「『ケア その思想と実践』第1巻、岩波書店、2008年、市野川容孝著『介助するとはどういうことか』】

第94回（2009年12月2日）山崎吾郎「井口高志「『人間性』の発見という希望と隘路」『ケア その思想と実践』第4巻、岩波書店、2008年】

第95回（2009年12月16日）安田伸行「看護実践における現場力】

第96回（2010年1月20日）ほんまなほ「『ケア その思想と実践』第6巻、岩波書店、2008年】

第97回（2010年2月3日）山崎吾郎「菅野盾樹『いじめ：学級の人間学』（増補版）新曜社、まえがき～第3章】

第98回（2010年2月17日）山崎吾郎「菅野盾樹『いじめ：学級の人間学』（増補版）新曜社、第4章～最後】

第99回（2010年3月3日）細川鉄平・西川勝「認知症ケアの現場から】

第100回（2010年3月17日）西村ユミ・西川勝「木村敏「臨床哲学」に対する検討】

2010年度（平成22年度）

第101回（2010年4月21日）小林恭「木村敏「臨床哲学」に関する発表へのコメント】

第102回（2010年5月19日）西川勝「鶴見俊輔「コミュニケーション、思想の科学研究会編『デューイ研究』春秋社、1952年】

第103回（2010年6月2日）上條美代子「患者さんから教わったこと】

第104回（2010年6月30日）樋本直樹「J.S.ミルの市民社会論から考える】

第105回（2010年7月7日）岡野彩子「博士論文『ポンヘッファーの人間学』（2008年）紹介」

第106回（2010年7月21日）参加者全員「全体討論：現場力研究『術語集』について」

第107回（2010年10月6日）参加者全員「現場力術語集（雑記帳）について」

第108回（2010年10月13日）参加者全員「現場力ノオト検討会」

第109回（2010年10月20日）蓮行「演劇に関わる現場について」

第110回（2010年11月17日）参加者全員「講読文献の検討会」

第111回（2010年12月15日）《拡大現場力研究会》砂連尾理（じゃれおおさむ）「老人ホームでとつとつと作った〈とつとつダンス〉のこと」

第112回（2011年1月19日）岡野彩子「痛みの経験」

第113回（2011年2月2日）参加者全員「詩について」（既存のお気に入りの詩を持ち寄る）

第114回（2011年2月16日）「詩について：個人創作発表会（その1）」

第115回（2011年3月16日）「詩について：個人創作発表会（その2）」

2011年度（平成23年度）

第116回（2011年4月6日）参加者全員「現場力ノオトについて（編集会議）」

第117回（2011年4月20日）小林恭「下語・著語・付け句—コミュニケーションにおける非連続の連続」

第118回（2011年5月18日）参加者全員「現場力ノオトについて（編集会議）」

第119回（2011年6月15日）伊黒一浩「病院の事務部門について」

第120回（2011年6月29日）ほんまなほ「心はケアの対象なんかじゃない、を考えるために：身体とともに、そこに、ケアそのものとして」

第121回（2011年9月28日）戸田弘子「教育現場に心理専門職が入って

いくとき一二つの適応指導教室の事例から—」

第122回（2011年10月19日）参加者全員「現場力ノオトについて（編集会議）」

第123回（2011年11月16日）岡野彩子・宮本友介「〈想定外〉について」

第124回（2011年11月30日）小林恭「ナイチンゲールについて言いのこしておきたいこと—“Addresses to Probationers and Nurses of the Nightingale School at St. Thomas’s Hospital” の第二書簡を中心に—」

第125回（2011年12月21日）小林恭「ナイチンゲールについて言いのこしておきたいこと—“Addresses to Probationers and Nurses of the Nightingale School at St. Thomas’s Hospital” の第二書簡を中心に—」に関する議論

第126回（2012年1月18日）大北全俊「ナイチンゲールについて」

第127回（2012年2月15日）《拡大現場力研究会》小林恭「大学の教育研究を通じて成してきた一つの事と現場力研究会について」

第128回（2012年2月29日）山森裕毅「笑っているときに何が起こっているのか？」

第129回（2012年3月21日）参加者全員「現場力ノオト（オレンジブック）投稿検討会」

2012年度（平成24年度）

第130回（2012年5月16日）西川勝「釜ヶ崎における最近の活動報告と、今後の研究会の進め方について」

第131回（2012年6月20日）岡野彩子「本田哲郎著『釜ヶ崎と福音－神は貧しく小さくされた者と共に』（岩波書店、2006年）を読む」

第132回（2012年7月18日）山森裕毅「公園とはどんな場所か—釜ヶ崎を歩いて—」

第133回（2012年9月6日）《拡大現場力研究会》釜ヶ崎カフェ（インフォショップ・カフェ ココルーム）大阪府大阪市西成区山王 1-15-11

NPO法人こえことばとこころの部屋（ココルーム）訪問

第134回（2012年10月10日）参加者全員「今後の計画打合：研究近況報告会」

第135回（2012年11月14日）西川勝「苦しみと生の可能態：生の人類学（田辺繁治）」の検討」

第136回（2012年12月12日）岡野彩子「映画『カスパー・ハウザーの謎』（原題：Jeder für sich und Gott gegen alle）から考える人間性の起源について」

第137回（2013年1月23日）参加者全員「総合討議：現場力」

第138回（2013年2月20日）西川勝「認知症介護福祉の現場から」

第139回（2013年3月13日）参加者全員「現場力ノオト（オレンジブック投稿検討会）」

2013年度（平成25年度）

第140回（2013年4月17日）西川勝「年度当初研究会：今後の研究会の活動について」

第140回（2013年5月15日）宮本友介「釜ヶ崎プロジェクト〈バザール的知の創発〉」

第141回（2013年6月19日）山森裕毅「丸山里美『女性ホームレスとして生きる 貧困と排除の社会学』の書評」

第142回（2013年7月17日）参加者全員「現場力ノオトの編集会議」

第143回（2013年9月21日）参加者全員「自主勉強会」

第144回（2013年10月16日）宮本友介・西川勝「釜ヶ崎プロジェクト〈バザール的知の創発〉中間報告」

第145回・146回（2013年11月20日・12月18日）山森裕毅「著書紹介『ジル・ドゥルーズの哲学』」

第147回（2014年1月15日）スザン・アディカリ「An Ethnography of Village Tourism: A Case Study from Sirubari Village, Nepal（村落ツーリズ

ムの民族誌：ネパール連邦民主共和国シルバリ村の事例研究)」

第148回（2014年2月19日）《拡大現場力研究会》参加者全員「認知症コミュニケーションの最終授業とのジョイント企画」

第149回（2014年3月19日）参加者全員「編集部会議」

2014年度（平成26年度）

第150回（2014年4月16日）西川勝「年度当初研究会：研究会の活動について」

第151回（2014年5月21日）上條美代子「一認定看護管理者の活動」

第152回（2014年6月18日）西川勝「〈愛のレッスン〉について」

第153回（2014年7月16日）岡野彩子「カトリック教会の歴史にみるセクシュアリティの問題」【課題図書】（1）岡田温司『処女懐胎—描かれた「奇跡」と「聖家族』』中央公論新社、2007年（2）ランケ＝ハイネマン、ウタ『カトリック教会と性の歴史』高木昌史ほか訳、三交社、1996年
《協賛企画》（2014年7月22日）【支縁のまちネットワーク2014年第1回公開学習会】山森裕毅「釜ヶ崎という場で哲学する～「アジール・呱呱の声」の会の活動」（於：金光教大阪センター会議室）

第154回（2014年9月20日）《拡大現場力研究会・イン・横浜トリエンナーレ》【特別企画】——釜ヶ崎芸術大学の協賛（於：横浜美術館）

釜ヶ崎芸術大学 in ヨコトリ | 第2話 漂流する教室にあう

講座①「芸術と生きる」

12:00～

開講宣言 於TAKIDASHI カフェ

12:30～13:15 於TAKIDASHI カフェ

講義「釜ヶ崎反失業闘争における焼き出し、野営の役割について」

講師：山田實（釜ヶ崎日雇労働組合・元委員長）

13:30～14:15 於円形フォーラム

講義「生きる哲学」

講師：西川勝（臨床哲学者・看護師）×現役釜芸大生×会場のみなさん

14:25～15:15 於円形フォーラム

映画「恃まず、恃む。釜ヶ崎」 監督：若原瑞昌

15:30～16:30 於円形フォーラム

現役釜芸大生による不定期公演

・釜ヶ崎狂言会

「宝鍋」「へそまがり」「カッパ」

・ひと花笑劇団

「人生双六」（協力：松竹新喜劇）

16:30～17:00 於円形フォーラム

ポストトーク 西川勝

第155回（2014年10月15日）参加者全員「横浜トリエンナーレでの現場力拡大研究会のふり返り」

第156回（2014年11月19日）西川勝・池田光穂「メキシコ出張報告」

第157回（2014年12月17日）宮本友介「釜ヶ崎での活動」

第158（2015年1月21日）野島那津子「診断名のパラドックス」／池田光穂「人間のレジリエンス（resilience）について：新健康論 入門」

第159回（2015年2月18日）滝奈々子「音に翻弄されるわたし（たち）」

2015年度（平成27年度）

第160回（2015年4月15日）西川勝「哲学カフェオーケストラ庄内の活動」

第161回（2015年5月20日）参加者全員「今後の活動内容についての相談」

第162回・第163回（2015年6月17日・7月15日）岡野彩子「【読書会】

課題図書：宮田光雄『ボンヘッファーとその時代』新教出版社、2007年」

番外編（2015年8月1日）大阪中学生サマーセミナー：「認知症 コミュニ

ケーションへの招待」へ協力参加

第164回（2015年9月16日）参加者全員「〈古い〉をテーマとするミニ発表会」例：古いにまつわる物語り（浦島太郎伝説や卒塔婆小町）など

第165回（2015年10月21日）西川勝「哲樂の会ほかのカツドウ（本田哲郎神父などのこと）について」

第166回（2015年11月18日）【特別企画】参加者全員「ポケットルーム訪問」

→【Column】池宮輝哉（てるくん）「ポケットルーム探訪記・異聞譚」

第167回（2015年12月16日）参加者全員「ポケットルーム訪問の体験を語りあう」

第168回（2016年1月20日）西川勝「〈伊勢迄歩講〉に参加して」

第169回（2016年2月14日）西村ユミ、カキオ・マサルほか「ダンスワークショップ：まさるとマサル」として実施

第170回（2016年3月16日）西川勝ほか「現場力研究会を振り返る」

2016-2017年度（平成28-29年度）

現場力研究会が休止してから2年間、大阪の釜ヶ崎での研究のメンバーである西川勝さんと宮本友介さんが主宰する「哲樂の会」に合流。

◆世直し研究会（第171回～第215回）

回次については、通算の回次と世直し研究会発足後の回次を／で区切って記載。

例：第171回／第1回

2018年度（平成30年度）

第171回／第1回（2018年4月25日）参加者全員「オープニング～あ

なたにとって〈世直し〉とは？～」

第172回／第2回（2018年5月30日）高橋綾「こどもとする哲学対話から考える〈世直し〉～高橋綾・ほんまなほ著『こどものでつがく：ケアと幸せのための対話』（大阪大学出版会、2018）を読む～」

第173回／第3回（2018年6月27日）岡野彩子、北村敏泰、林田雅至「Baby Box（赤ちゃんポスト）の今」

第174回／第4回（2018年7月25日）参加者全員「『世直し』ノオト（2018年度・夏）合評会」

番外編（2018年8月15日）参加者全員「もしよろしければ、釜ヶ崎夏祭りをご一緒に（三角公園に集合！）」

第175回／第5回（2018年9月26日）池田光穂「森重昭著『原爆で死んだ米兵秘史』（潮書房光人社、2016）を読む」

第176・177回／第6・7回（2018年10月24日、11月28日）山森裕毅「永野三智著『みな、やっとの思いで坂をのぼる：水俣病患者相談のいま』（ころから株式会社、2018）を読む」

第178回／第8回（2018年12月26日）熊野以素「熊野以素著『九州大学生体解剖事件：七〇年目の真実』（岩波書店、2015）を読む」

番外編（2018年12月26日）参加者全員「世直し忘年会～1年の振り返りと新年に向けて思うこと～」

第179回／第9回（2019年1月23日）参加者全員「『世直し』ノオト（2018年度・冬）合評会

第180回／第10回（2019年2月20日）熊野以素「堤未果著『日本が売られる』（幻冬舎、2018）を読む」

第181回／第11回（2019年3月27日）井上こう「カンボジア山地民クルンの音と共同体～鳴って揺れて聴こえて知る共同体 同調する・しないのはざま～」

2019年度（平成31/令和元年度）

第182回／第12回（2019年4月24日）参加者全員「2019年度研究プロジェクト会議～みんなで計画を立てましょう～」

第183回／第13回（2019年5月29日）海野隆「〈テーマーいのち〉～動物福祉愛護と動物実験～」

第184回／第14回（2019年6月26日）古川智祥「外国人労働者の受け入れとその諸問題」

第185回／第15回（2019年7月24日）参加者全員「『世直し』ノオト（2019年度・夏）合評会」

第186回／第16回（2019年9月25日）池田光穂「上坂冬子著『奄美の原爆乙女』を読む」

第187回／第17回（2019年10月30日）是枝律子（協力：斎藤潤）「マザー・テレサに出会って～私の歩んできた道 下る道は昇る道～」

第188回／第18回（2019年11月27日）上條美代子「私のヒーロー『世廻り猫』遠藤平蔵とケア」

第189回／第19回（2019年12月25日）滝奈々子「音楽するわたしってなあに？～世直しに携わることができるのか？～」

番外編（2019年12月25日）参加者全員「世直し忘年会～1年の振り返りと新年に向けて思うこと～」

第190回／第20回（2020年1月22日）参加者全員「『世直し』ノオト（2019年度・冬）合評会」

第191回／第21回（2020年2月26日）宮本友介「変わりゆく街 釜ヶ崎」

第192回／第22回（2020年3月25日）北村敏泰「東日本大震災・原発事故の今 9年目の極私的被災地報告—復興はなお遠く、原発事故は現在進行中」

2020年度（令和2年度）

番外編（2020年4月22日）参加者全員「オンライン世直し研究会リハーサル会」

サル～Zoomを使ってみよう～【オンライン開催】

第193回／第23回（2020年5月27日）参加者全員「今、コロナ禍で」【オンライン開催】

第194回／第24回（2020年6月24日）瀬口典子「〈人種優劣〉と植民地主義につながった自然人類学と遺骨返還問題」【オンライン開催】

第195回／第25回（2020年7月22日）参加者全員「『世直し』ノオト（2020年度・夏）合評会」【ハイブリッド（対面+オンライン）開催】

第196回／第26回（2020年8月26日）参加者全員「戦争と平和」【オンライン開催】

第197回／第27回（2020年9月30日）（参加者全員）「『世直し』うた会」【オンライン開催】

第198回／第28回（2020年10月28日）岡野彩子「観劇を通して世直しを考える～くるみざわしん作『同郷同年』～」

第199回／第29回（2020年11月25日）熊野以素・北村敏泰「～世直し研究会メンバーの新著紹介～（1）熊野以素著『“奇天烈”議会奮闘記—市民派女性市議の8年間—』東銀座出版社、2020年（2）北村敏泰著『揺らぐいのち一生老病死の現場に寄り添う聖たち—』晃洋書房、2020年」【オンライン開催】

第200回／第30回（2020年12月23日）参加者全員「通算開催200回記念～年忘れ〈世直し〉研究会～」【オンライン開催】

第201回／第31回（2021年1月20日）参加者全員「『世直し』ノオト（2020年度・冬）合評会」【オンライン開催】

第202回／第32回（2021年2月24日）池田光穂「読書会〔課題図書〕ガブリエル・ガルシア=マルケス著・木村榮一訳『コレラの時代の愛』新潮社、2006年」【オンライン開催】

第203回／第33回（2021年3月24日）額田有美「環境でお金を受け取る仕組み—〈生態系サービスへの支払い〉と関わるコスタリカの先住民居住区とその住民についての一考察—」【オンライン開催】

2021年度（令和3年度）

第204回／第34回（2021年4月28日）岡野彩子「読書会〔課題図書〕ナディア・ムラド著『THE LAST GIRL—イスラム国に囚われ、闘いを続ける女性の物語—』東洋館出版社、2018年」【オンライン開催】

第205回／第35回（2021年5月24日）日高悠登「読書会〔課題図書〕瀧谷智子著『ヤングケアラーわたしの語り：子どもや若者が経験した家族のケア・介護』生活書院、2020年」【オンライン開催】

第206回／第36回（2020年6月23日）山森裕毅「読書会〔課題図書1〕中井久夫著『災害がほんとうに襲った時—阪神淡路大震災50日間の記録』みすず書房、2011年〔課題図書2〕中井久夫著『復興の道なかばで—阪神淡路大震災一年の記録』みすず書房、2011年」【オンライン開催】

第207回／第37回（2021年7月21日）参加者全員「『世直し』ノオト（2021年度・夏）合評会」【オンライン開催】

第208回／第38回（2021年8月25日）宮本友介「世直しの〈世〉を問う—わたしたちにとって社会とは何か」【オンライン開催】

第209回／第39回（2021年9月22日）松浦博一「事業再編の光と影—突然の環境変化への自己防衛対策—」【オンライン開催】

第210回・第211回／第40回・第41回（2021年10月25日・11月22日）井上こう「読書会〔課題図書〕小松美彦・市野川容孝・堀江宗正編著『<反延命>主義の時代—安楽死・透析中止・トリアージ』現代書館、2021年」【オンライン開催】

第212回／第42回（2021年12月20日）上條美代子「COVID-19下（禍）の四方山話」【オンライン開催】

番外編（2021年12月20日夜）参加者全員「恒例〈世直し〉忘年会～1年の振り返りと新年に向けて思うこと～」【オンライン開催】

第213回／第43回（2022年1月26日）熊野以素「読書会〔課題図書〕上野千鶴子著『在宅ひとり死のススメ』〔文春新書1295〕文藝春秋、2021年」【オンライン開催】

第214回／第44回（2022年2月21日）池田光穂「〈退職記念講演〉私の歩んで来た道」【オンライン開催】

第215回／第45回（2022年3月23日）参加者全員「世直し研究会の歩みを振り返って」

第2章

現場力研究会

2006年4月から2016年3月まで10年に渡って開催された現場力研究会は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター紀要『Communication-Design』に「『現場力』研究術語集」および「『現場力』ノオト」として、研究会の参加者が考える現場力について記述していました。その数は合計すると87編になります。

「現場力」研究術語集

「『現場力』研究術語集」では次の26の用語を提出しています。

◆ 「現場力」研究術語集『Communication-Design』0号掲載

- (1) 学習の場としての実践現場
- (2) 参加の概念
- (3) 私の実践コミュニティ
- (4) 「わざ」の習得
- (5) アイデンティフィケーション (identification)
- (6) メティス (策略知)
- (7) 表面の経験
- (8) アクティブ・タッチ (Active touch)
- (9) 協働的実践 (collaborative practice)

◆ 「現場力」研究術語集（第2報）『Communication-Design』1号掲載

- (10) 問題にもとづく学習
- (11) 学習のコンテクストの学習
- (12) 活動の拡張としての学習
- (13) 経験の直接性に含み込まれた他者の経験
- (14) 道具を使う
- (15) エージェンシー (Agency、行為者性)
- (16) 埋め込み (Embeddedness)

(17) 改善 (KAIZEN) 活動

(18) 協働システムと組織

◆ 「現場力」研究術語集（第3報）『Communication-Design』2号掲載

(19) 反省的実践

(20) 装置(dispositifs)

(21) 状況に埋め込まれた行為

(22) インスクリプション (inscription) —協同作業を可視化するテクノロジー

(23) 芸術パフォーマンスにおける即興

(24) 当事者

(25) 復興コミュニティビジネス—被災者の暮らし再建に寄与する新たな手法として

(26) 「つたなさ」のテクノロジー

その後は『Communication-Design』4号～7号および9号に「『現場力』ノオト」として書き継がれていきます。総数61編の中から、はっと気づきを与えてくれるユニークなエッセイ30選をご紹介したいと思います。

「現場力」ノオト
30 選

1 声の記述

西川 勝

20数年間、ぼくは看護記録や介護記録を書き続けてきた。しかし、肝心なことは書き損じてきた、という気持ちが強い。なにが書けなかつたのか。ケアの証拠のために記録をしても、ケアを記述してこなかつた。ケアの現場には、さまざまな声が交錯する。その声に促され、励まされ、問い合わせられて、ケアは展開する。それなのに、記録においては、それぞれに異なる肌理をもつたあの声、この声は、どこにいったのか。ぼくに届いたはずの声の生気は、意味内容を固定する文字の羅列の隙間から蒸発してしまうのだ。

とりあえずケアをする立場としては、ケアされる人から「ありがとう」「ありがとうございました」という言葉を何度も聞く。しかし、それはほとんど記録されることはない。わずかに記録されても、読む者に何が伝わるのだろうか。諦めと気恥ずかしさが、届けられたはずの「ありがとう」をなかつたものにしてしまう。ケアを成就させる「ありがとう」の声が記述できない。

声は、身体から発せられる。伏し目がちにつぶやく「ありがとう」、喘ぐ息をのむ「ありがとう」、眼を丸めての「ありがとう」、両手を振っての「ありがとう」、柔らかな口元からこぼれる「ありがとう」、あれこれ。

声には、手ざわりがある。かすれた声、張りのある声、しめた声、硬い声、冷たい声、煮えたぎる声、柔らかな声、鋭い声、震える声、あれこれ。

声は言葉を越境する。笑い声、泣き声、呼び声、鼻声、ためいき、あくび、あれこれ。

声は、人と人の間に響く。長すぎる沈黙を破る「ありがとう」、まっす

ぐに届けられる「ありがとう」、ジグザグする「ありがとう」、行き場をなくした「ありがとう」、響き合う「ありがとう」、あれこれ。

その場限りで消えてしまう声、そのとき誰かに向けられた声は、たとえ録音しても再現できない。客観的再現を拒む本性を声は身にまとっている。それを何とかしたい。文章として容易には揺るがない形をあたえたいという欲望が、ケアする者の内側から噴き出してくる。声に呼ばれ、その声に共振した身体から、声を文字へと引きはがして、他者に提示したいという欲望である。

声を記述するというアポリアに、ケアの現場はどう応えていくのか。声の原初性としての呼びかけ、声は次の声を呼ぶばかりである。声を記述する際に失うことの大きさを自覚する道だけは開けている。身もだえする記述にこそ、声はふさわしい。

「現場力」ノオト(2010年・秋)『Communication-Design 4』掲載

2 後知恵

西川 勝

阪神電車の武庫川駅を降りるとすぐに、ハゼの釣れるポイントがある。梅田の駅で買った釣り新聞を見て、ぼくは武庫川駅を手ぶらで降りた。急に予定を変更したのだ。

しばらく、釣りの様子を眺めていたが、ぼくは無性にハゼ釣りがしたくなつた。近くの釣り道具屋で、安物の竿とハゼ釣りの仕掛けとエサを買った。生まれて初めてハゼを釣るのである。店の主人は「はじめてでも大丈夫、ハゼはようさんおります。」といって、買ったばかりの竿に仕掛けをセットしてくれた。あとは、針にエサをつけて川に投げ込むだけであった。ぼくはイシゴカイを針先に引っかけて、釣りはじめた。何かが川の中のエサを突つつくような感覚が糸と竿を伝わって、ぼくの手のひらにやってくる。「これだ」と思い、急いで竿をあげるがハゼの姿はない。胸の鼓動にあわせるように、何度も竿を引き上げるのだが、獲物はない。ハゼを針に掛けるタイミングが悪いのだろう。早くしたり遅くしたり、強くしたり弱くしたり、いろいろ工夫するが駄目だった。その日は、ハゼに惨敗であった。

数日後、ぼくは妻を同伴してハゼ釣りに再挑戦した。彼女は早速、近くにいた釣り人にハゼ釣りのコツを尋ねている。そして、ぼくに言った。「エサの長さが違うのよ。ちぎって短くしないと駄目みたい。」そうか、それでエサばかり取られていたんだ。まるで自分が秘技をひらめいたような気分になって、ぼくはエサを短くしてみた。あっという間に、小さなハゼが釣れた。嬉しかった。

これは「後知恵」に違いない。「後知恵」は、物事が終わってしまってから出てくる妙案をいう。つまり、この場合は、さんざん釣れなかつた

後で、エサが長すぎたことを、その原因として知るということである。しかし、最初から人に教えてもらって「先知恵」でハゼを釣っていたとしたら、自分の失敗について、こんなにも深く納得したであろうか。そうは思えない。愚かな者は、必要なときには知恵も出さずに、結果が出た後になつてようやく「後知恵」に気づくという。しかし、本来、万能の先知恵を持っていない人間は、生きる現場の最中では、悲しいまでの試行錯誤を強いられる。この試練を無駄にしないためにも、愚者の愚者たる自覚を促しながら、この先の豊かな実りを約束する贈り物として「後知恵」を授かるのだ。考えてみれば、人間の文明や、社会の文化伝統の実質は、この「後知恵」の集積と継承なのだ。

「現場力」ノオト(2010年・秋)『Communication-Design 4』掲載

3 障害を笑う（其の一）

高橋 純

笑芸をみてしらぬ顔をしたり、眉をひそめたりする人間の内面生活は案外に空虚なものである。私なぞ、他人と関わる際にはいかに相手を笑わすかを考えること専らであるため、ろくに相手の話を聞いていないことなどしばしばである。私のこのさもしいまでの芸人根性を、人は関西出身者のそれと一笑に付すかもしれない。しかし私にとっては—多くの関西人同様—自分のそれがローカルなエトス扱いされることなぞ心外であり、むしろ普遍化可能な主義^{イズム}と呼んでいただきたいものだと考えている。

私は常々「障害を笑う」ことを主張し、時にはそうした笑芸^{パフォーマンス}を披露することもあるが、それを見るより前に「あなたは障害の当事者ではないのに、どうしてそれをしようとするのか」と聞く人がいる。どうやらこの人が当事者でないとみなす私が、障害をネタに笑いをとろうとするることは、不可解であるばかりか不謹慎だということらしい。逆に障害の当事者が笑芸を披露する際には「障害を持つ人のことは笑えない」という頑なな反応が観客のなかに見られると聞く。障害を笑うことにもとい付く多くの障害、と韻を踏んでみたところで、それこそ、かのヴァレリイ氏も微笑すら浮かべまい。

こと障害をネタにしたものに関しては、その笑芸^{パフォーマンス}が実際に面白いかどうかという次元とは別のところで、笑えない、笑うべきではないと決されることがある。そしてその判断は、当事者であるかということに大きく関わっている。しかし、私には、障害を笑うという実践が行おうとしているのは、まさしくこの「誰が障害の当事者か」という問いを超えていくことではないかと思われる。

笑えない、笑うべきでないという人々が、戸惑い立ちすくみながらどんな風景を見ているのか私は知っている。彼らが目にしているのは、向こう岸に笑われる障害の当事者が、こちらの岸に笑われる人ではない、障害を持たない自分がおり、そしてその間にルビコンやイムジンに比せられる大河の横たわる光景である。舟を出したとて渡ることができるはずもなく、そもそもこの輩には渡る気もない。笑いの神、あるいは芸人が誘うのは、この川を渡ること、否、川に分断された二つの岸という空虚な仮象とは異なるもう一つの世界なのである。笑いとは、当事者の自嘲やへつらい、それが生み出す非当事者からの同情ではなく、それらを超えていこうとする情動の蠢きである。(続)

参考文献(ネタ元)

九鬼周造(1991)「偶然の生み出す駄洒落」『九鬼周造全集 第五卷』岩波書店。

「現場力」ノオト(2010年・秋)『Communication-Design 4』掲載

4 障害を笑う（其の二）

高橋 純

障害を笑うということはなにを意味しているのだろう？せむしのピエロや、脳性麻痺ブラザーズの笑芸や、性同一性障害を主張する、男女と白衣メガネの素人笑芸（ひし形、[Online]）の一場面のあいだに、なにか共通なものが見いだされるだろうか？どのように蒸留したら、えもいわれぬ芳香、というより、鼻をつく臭いが漂うこれらさまざまなものなかから、そのエッセンス、しかも常に同一なエッセンスを取り出すことができるのだろう？笑い一般については、アリストテレス以来最も偉大な哲学者が取り組んできたが、障害を笑う、という刺激臭を放つテーマが、哲学者の上品な鼻を引きつけることは——かなりの異臭をまき散らしているニイチエその人を除けば——なかったと言えよう。

私は無謀にもそれを扱おうとするわけだが、この年中詰まり気味の鼻がかぎ出そうとするのは、ベルクソンのような、何がおかしさを生じさせるかという笑いの認識論でも、フロイトのような笑いの力動論でもない。むしろ、笑いという情動の存在論、とでもいるべきものである。

えてして我々は、人間の口角に認められるある種の動き、腹腔から絞り出された呼気が起こす破裂音の一種を指し、笑いの定義としがちである。また、「笑いとは優越感である」（ホップズ）といった表現にも満足してはいられない。私が問題にしたいのは、人間が「笑うことを心得ている動物」と定義される時の、極めて人間的な情動としての笑いであって、口角を上げる、優越感を持つといった畜生にもできそうなことは、つまらぬことを吠え立てる警察犬にでもくれてやればよい。

ベルクソンも述べるように、笑いにはある種の「無感動」が必然的に伴う。（Bergson [1900=2001]）人間失格の我が相方に強い憐憫あるいは

は激しい軽蔑を催す者がいるとすれば、そこに笑いが到来することはあるまい。しかし、私は全ての人間的事象から感情の音楽を切り離すだけで笑いが生じるという氏の「笑い＝純粹知性」説には賛同しかねる。純粹に知性だけの人びとが笑いの夢を見ることはない。笑いとは、知性と呼ぶにはあまりにも人間的な情動なのであって、それは、憐憫と軽蔑の、また感動と知性のいずれでもなく、両者の「底が抜ける」ようなもう一つの情動、あるいは「非情」の情（小林 [2009]）なのである。もちろん、それらが相方とともに墜ちていく先は氷水のプールであるが。

（以下、次号）

引用・参考文献

- Bergson, Henri (1900) *LE RIRE*, PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE = (2001)
鈴木力衛、仲沢紀雄(訳)「笑い」、『ベルクソン全集3』、白水社、2001.
ひし形 (2008) ショートコント「僕が僕であるために」
http://www.youtube.com/watch?v=A_N6_yCsEC4
小林恭 (2009) 第91回現場力研究会配布資料.

「現場力」ノオト (2011年・春) 『Communication-Design 5』掲載

5 障害を笑う（其の三）

高橋 純

障害や不幸を笑うのは不可能なことだ。本当に笑いが生まれたとすれば、それは水の上を歩くことや病人を治すことよりも、また死者の復活よりも驚くべき奇蹟である。この世は、嘲笑や追従、自嘲の笑いなどさまざまな見せかけの笑いに満ちているが、真の笑いはそのような所には到来しない。

「笑いとは、他人の失敗をよろこぶこころであって、しかも良心の疾しさをともなわぬものをいうのである」とニイチエは非情な言葉を吐いたが、真の笑いはある意味非情なものである。人の不幸や障害を見て手助けや施しをする、同情を寄せるならまだしも、それを笑うとは何事かと人情家の善人は言う。しかし我々は、彼ら人情家が不幸な人に向けて浮かべる同情の微笑にこそ偽善の腐臭を感じるのである。彼らの薄ら笑いはこう告げている。「哀れなるかな、不幸な者、障害を持つ者、しそこなった者たちよ。君等の不幸が私のものではなくて本当に良かった！」

人情としては、失敗や障害や不幸は避けるべきものであり、それが降りかかったのが「わたしでなくてよかった」という情を持つことは自然なことだ。だから不幸や障害への蔑みを伴った、それらの存在の否定の上で成り立つ同情や憐憫はある意味、自然な人情の働きである。だが、ニイチエの言うように、そうした人情家の微笑には疾しさがつきまとう。己が手を差し伸べようとする者を、同時に蔑み、否定することしかできない者の疾しさが。

しかし我々は、同じ瞬間に、真の笑いの到来を待ち望むのだ。己や他人の障害や不幸や、しそこないを心からよろこび、高らかに笑うその瞬間を。「これでいいのだ！」「こんな腐れ男女、博士くずれでよいのだ！」

「我々がこれを望んだのだ！」と障害や不幸に心から同意するその時を。むろん障害や不幸をよろこび、同意するなど、人情の世界では不可能なことである。「不幸への同意」を意志する者は、人情の世界を超えた、メタフィジカルな情、非情の風に吹かれている。運命の差異によって無限のへだたりにある障害を持つ人とそれを笑う人とは、施しや同情の微笑においてではなく、この「同意」の爆笑においてのみ、はじめて一つになることができる。

今日も我々は、ビニール袋を着ては破りながら、とっくに廃れた昭和歌謡を口ずさみながら、この世に非情の風と真の爆笑が到来するのを待ちのぞんでいる。(完)

参考文献

- Weil,Simone (1950) *Attente de Dieu*, La Colombe = 渡部秀(訳)(1967)「神を待ちのぞむ」『シモース・ヴェイユ著作集IV』春秋社.
赤塚不二夫(2005)『天才バカボン』(赤塚不二夫傑作選), 小学館.
小林恭(2009) 第91回現場力研究会発表および配布資料

6 協働実践の組み換え

西村ユミ

どのような仕事や暮らしにも、慣れ親しんだ場所を移らざるを得ないことが、幾度かは訪れる。その変化の経験は、それまで難なくできていたことを難しくする。がその困難が、これまでどのように仕事や暮らしという実践が成り立っていたのかへと注意を向かわせ、はっきり自覚せずに行っていた実践に、ある輪郭を与えるかもしれないのだ。

例えば、看護師たちも働く場所が変わることがある。彼らの声を聴き取ってみると、病棟を異動することは、それまでの習慣や自らの実践の仕方を大きく揺さぶられる経験であることが分かる。彼らは、急いで新たな場所に慣れなければならず、その場で求められる援助の仕方を習得しなければならず、さらに、新しい人間関係を作っていくなければならない。その課題に立ちすくみ、自らの非力に落ち込んだり、これまでの病棟とのやり方の違いに戸惑ったり、時に、苛立ったりもする。それまでは、うまく動くことができたのに、それができない。その難しさは、いかに成り立っているのだろうか。

病棟を異動したばかりの頃は、実践の場に入り込めないばかりか、患者の状態をよく知らないことが彼らを戸惑わせ、場に入り込まないようにさせる。患者の移動や清拭などのごくごく簡単にできてしまいそうな、当たり前に行っていた援助でさえも、実際にやってみるとどうやっていいのかが分からぬ。いろいろめぐらしていく手がかりが見えないために、一人ひとりの患者の状態が意味を持って現われない。病棟の皆が暗黙に了解していることや状況を理解するための判断の流れを分かち持つことができない。自分が大切にしてきたことが実践できないのだ。

これらを経験して分かるのは、病棟での実践は個々の看護師の技能に

還元できるものではないことだ。自分の考え方や動きは、患者の状態に応答しつつ、その応答でもある他のメンバーの判断や動きに促されて定まる。つまり看護実践は、患者の援助を柱として、病棟のメンバーとともに作り出されているものであり、メンバーの実践を継承して次に繋げていく「協働実践」として成り立っている。各自のこだわりも、その中で生きている。さらに、病棟異動は、異動した者が新たな場の仕方を習得する機会に留まらず、病棟という現場が新しいメンバーを受け入れつつ、この「協働実践」を組み換えて新たな実践を作りだしていく機会でもある（西村〔2011〕）。「現場力」は、こうした力動性の生起そのもののとして記述され得る。

文献

西村ユミ（2011）「看護ケアの実践知——「うまくできない」実践の語りが示すもの」
『看護研究』44（1）：49－62.

「現場力」ノオト（2010年・秋）『Communication-Design 4』掲載

7 技術の答え

安田伸行

僕は介護の仕事をしている。僕の職場では、職員数人で「介護技術の勉強会」を開いており、それには外部の介護職の方も参加されている。

そこでは主に寝返り介助や立ち上がり介助、移乗介助などを教えてい るのだが、そこでよく聞かれる質問に「片麻痺で関節を痛がる人の移乗ってどうするんですか?」「立ち上がりや移乗の際、怖がる人に対してはどう介助したらいいんですか?」などといったものがある。介護される者を操作可能な対象とみなす思考に焦点化された質問だ。この質問には前提として、どんな相手をも介護する者の思い通りに出来る、どんな場面にも対処し得る「万能の技術」が想定されており、教える側の僕らはそれを「答え」として求められる。そこに含意されている老人像（介護される者）はあくまで介護する者にとって規定内の人であり、それ以外の老人像が入り込む余地は残されていない。

そんな質問に対して、僕は「こんなやり方もありますよ」といって一応の「答え」をやってはみせるのだが、その一方で「技術のやり方を身に付けたからって、それがそのまま通用するほど生身の人間って単純じゃない・・・。」といった相反する思いが実感として胸を過ぎるのも確かだ。技術の方法を「答え」として教えながら、その枠外に置かれた人のことが頭から離れず、ジレンマや矛盾に葛藤しながら、「伝えられること」と「伝えきれないこと」の狭間で、そこに潜む事柄がやけに気になる。こちらのやり方に一方的に相手をはめ込む思考では現場には留まれない、そんな思いが消えないのだ。

触るだけで「ギャーッ」と叫ぶ女性の抗う姿。願いを伝えきれない失語症男性の背中に滲むやりきれなさ。全身の痛みを訴える女性の強烈な

拒み。夫の墓前で手を合わす老女の無言の涙・・・。

相手の身体から放たれる息づかいに既存の技術では近づけない。手持ちの技術が相手のふるまいによって崩される。逆に、相手のふるまいに合わせて新たに技術を創造しようとしてもその創造がどうしても追いつかず、それとは別に、相手の様相を前に理屈抜きで突き動かされる自分がいる。僕は、「技術」が簡単に搖さ振られる経験を確かにしている。

「技術」が人ととのあいだに介在するものであるならば、介護技術は介護する者が併せ持つ「する技術」であるとともに、介護される者にとっての「される技術」でもあるはずだ。人と人がまみれるその接点で、想像が及ばない出来事のその只中で、「技術」はどのような姿を見せるのか。そしてその可能性が、現場の「外」で伝達される「方法化された技術」に囚われない覚悟から生まれ、現場の「内」で「人の生きる様」として描かれるとするならば・・・。

介護技術の勉強会に「技術の答え」は見当たらない。そして僕はそれを未だ持ち得ないままでいる。

「現場力」ノオト(2010年・秋)『Communication-Design 4』掲載

8 木村敏の＜あいだ＞と絶対の他

小林 恭

ある国際会議の合間に、ガブリエル・マルセルと芝生に寝そべって語りあった時のことを木村は次のように回顧している。木村〔2009a〕は最初＜Zwischen＞というドイツ語で自分の考えを説明しようとしていたが、マルセルは＜間柄＞という意味にうけとったのか話に乗ってこなかった。そこでふと＜Vorzwischen＞（あいだ以前）という表現に言い換えてみたらマルセルは大いに興味と共感を示してきたと。

このエピソードが示すように、木村の＜あいだ＞とは二つのものの間ではなく、それ以前の根源的「メタ・ノエシス原理」〔2009b〕として提起されたものだ。その根源的＜あいだ＞が、水平面では自己と他者（患者）との＜あいだ＞として、垂直面では自己と自己の根拠との＜あいだ＞として、ふたつの＜あいだ＞が等根源的に生起してくる。他者との関係論が脚光をあびる今日、自己論を抜きにしては「絶対に駄目」という木村の現象学的精神病理学の立場がここから生まれている。

ところで、この根源的＜あいだ＞はハタラキとしての「こと」であつて「もの」ではない。しかしそれについて語ろうとするときどうしても「もの」化せざるをえない。自己と他者との根拠として何か第三の「もの」のような扱いとなるのが宿命といってよい。そのとき根源としての根拠は「絶対の他」と呼ばれ絶対者のような位地づけになる。「長安一片の月、万里相隔てて看る」の月の役割にあたる。他方、そのような根拠は、何「もの」でもない根拠、何「もの」でもない媒介だから、この局面で言えば月は消え去り、ストレートに自己にとっての他者（患者）が「絶対の他」となり、相互に「絶対の他」同士の関係となる。木村が「絶対の他」というとき、このような二局面があり、それは西田幾多郎

の「絶対の他」にもみられる二重性で、木村はそれをうけついでいるといえる。

木村の＜あいだ＞という思想は、自己と他者とを超越する絶対者を外にたてる（キリスト教的な）宗教と、自己と他者を「唯仏与仏」として絶対の関係ともみなしうる（大乗佛教的な）宗教という、形としては一見異質な宗教のあいだに通底するそのもとを掘り起こしたもので、諸宗教間の相互理解に有意義な視点をひらいでいる。それを木村は臨床治療の現場から自覚にもたらしたものだけに、具体的な人間関係の現場と宗教的次元との連関を解きほぐすに大変示唆的なものといえるだろう。

文献

- 木村敏・杉村靖彦（2009a）「対談・臨床哲学」『文明と哲学』日独文化研究所年報第2号。
木村敏・檜垣立哉（2009b）『生命と現実－木村敏との対話一』河出書房新社。

「現場力」ノオト（2010年・秋）『Communication-Design 4』掲載

9 <生命／人間的生／いのち>と生命論的差異

小林 恭

教育の現場で悪質ないじめや自殺などの事件が発生するたびに、学校長、教育委員会のコメントには「いのちの大切さを教えることを徹底させたい」という言葉が現われる。子どもたちは、大人たちの現実の社会とひきくらべ、言葉のそらぞらしさを感じていよう。自分の子どもの自死という体験をへて高史明〔1980〕は現代を「いのちの私物化、いのちの見失い」の時代と呼ぶ。教育責任者たちのコメントはむしろ「私たちこそいのちを見失っていて相すまぬことでした」とあるべきではないか。

上田閑照〔2007〕は<生命／人間の文化的生／いのち>という区別を提案し、現代を<いのち>へのセンスを見失ったことすら見失しない、文化的生のレベルが異常肥大をきたし歯止めのきかなくなった状態と表現する。上田が<いのち>ということばで指示そうとすることを、木村敏〔2005〕は<ゾーエー>とよび、死ねばなくなるとみなされる生きものの生命<ビオス>との区別をたてる。それはケレーニーおよびヴァイツゼッカーから想を得たものという。木村は「生死の区別以前の生即死、死即生の潜勢態」〔2009〕とそれを言語化し、ビオスとゾーエーの区別を「生命論的差異」と名付けた。

彼の<あいだ>の概念の場合と同様、ここでも<ゾーエー>を語るにあたって、それが絶対的根拠なるものとして容易に「もの」化されてしまう危険がともなう。それをふせぐのは、「生命論的差異」を意識対象としてのAとBとの差異のごとく「もの」化しないことだろう。私がビオスあるいは単なる生存を<いのち>と取り違え、<いのち>を見失っていたという、身に滲みての反省的気付きのハタラキに即してのみ感得すべきもので、「差異」とはそのような動性でなければならない。上田は<

いのち>を直接対象とする学問はあり得ないと言う。

現場に関する学（看護学、教育学 etc.）は、<いのち・ゾーエー>の問題（スピリチュアルという語でそれを扱おうとする場合もある）を安易に方法化したり体系化したりすべきではないだろう。その問題をあくまで学の外部のこととしたうえで、その外部に常に開かれた用意を保持するというスタンスが望ましいと、現在の筆者は考えている。なぜなら「見失っていた」という気付きと相即してはじめて<いのち>の自覚が成り立つとすれば、人間の文化的生の一環である学の立場は、何よりも見失いの自覚をつねに踏まえなければならぬであろうから。

文献

- 高史明（1980）『深きいのちに目覚めて』彌生書房.
木村敏（2005）『関係としての自己』みすず書房.
木村敏（2009）「生命・身体・自己」『文明と哲学』日独文化研究所年報第2号.
上田閑照（2007）『哲学コレクション1・宗教』岩波書店.

「現場力」ノオト（2010年・秋）『Communication-Design 4』掲載

10 下語・著語・付け句—コミュニケーションにおける非連続の連続

小林 恭

「老師、下語ってどういう意味でしょうか。一わしがきゅうすを取り上げると、あんた湯をとりに台所にはしりなさる、それが下語や」（森本省念言行録）。下語（または著語）の通常の意味は、禪語録などで古人の言行に対し当処即席に下されたコメントのことで、多くは辛辣な野次のような形をとる。森本省念はここでは言葉によってなされるという狭義の意味をこえてその事柄の本質を直指し、その応答が同時に下語の実演となっている。

俳諧という言語表現に制約された領域のことであるが、連句の付け句にもそれと共に通の本質が見受けられる。付け句の場合、付けることによって一つの意味世界から新しい意味世界へと非連続の連続的に転じてゆく。そのとき前の句の世界から「新しくガラッと、或いはなんとなく」転じていなければならない。元禄三年に巻かれた次の歌仙の例は一つの典型である。「さびしさの底ぬけて降る雲かな（丈草第一句）、ちらちら光る糠の埋火（去来第二句）、鯨ひく沖に一浜家あけて（芭蕉第三句）」。句と句の行間が意味地平としての世界を破り超えて、絶対「無」意味空間である虚空へと通じ、「そこから翻って新しい意味世界が投企され（略）世界から世界への転調が虚空に響き匂う」（上田〔1999〕：211）。

これらに見られるのはAに対するBの何らかの呼応関係である。一般にコミュニケーションという場合、平面的な横のつながり方つまり連続面に着目されがちだが、下語や付け句によって大写しにされるその構造が示唆するのは、どこまで自己の底を突き破るか、時間をも前後際断するか、その程度に応じてコミュニケーションの質が変わってくるという

ことであろう。応するB自身における切りの深さに応じて、元のAの姿もより深い本来の姿を現してくるのである。

看護や介護の場面で、親しみを表すために乱暴な言葉を用いるのがよいか丁寧な言葉がよいかと問題にされることがある。「さびしさの底ぬけて」語る丁寧語／べらんめえ、どちらであれ要は、底ぬけの寂しさから語り出されるかどうか、相手が底なしの存在と見える処から語られるかどうかであろう。しかし、これが自己の努力の目標や功績と見なされるや否や、南面して北斗を求む如き自己矛盾となるだろう。底が抜けない半端な自分、底を塞いでばかりいる自分の半端さを徹底して自覚しつづけるに相即して期せずして拓かれゆくものではなかろうか。

引用文献

上田閑照(1999)『実存と虚存』ちくま学芸文庫.

「現場力」ノオト(2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

11 シンプルな言葉

安田伸行

「よくわからないけど、自分たちがお年寄りにとって良いと思ったことをやっていけばいいんじゃないのかなあ・・・。」

フレーズだけ見ればごくごく単純で“当たり前”、かつ、“言葉足らずな言葉”だ。しかし、そこにいた会議の参加者は二時間以上議論を重ねた最後の最後、控えめに発せられたその「シンプルな言葉」に共鳴した。

これは僕が働く介護施設で、介護職のほか、施設長や看護師など多職種が集まり開かれた会議での出来事である。それまでの仕事のあり方を反省し、自分たちの取り組みを再度見直すために「自分たちはどのような介護をしていくのか」というテーマで一度話し合おうと会議が開かれた。

「お年寄りの望むことに応えていく介護がしたい。」「じゃあ、声を出せない人みたいに望んでいることがわからない人はどうするの？」
「その人がこれまでどのように生活してきたのか、その暮らしの中から考えればいいんじゃないのかなあ？」「でもそれまでの生活が『いまの望み』を反映しているとは限らないよ。」「仮にそれがわかったとしても職員の人手が足りない中、はたして実現可能なのかなあ。」「応えられないことが起こるのは当然だし、そのことをどう考えるのかが大事なんじゃないのかなあ。」「こちらの考え方の裏側にあるマイナス面も考えないと綺麗ごとで終わってしまう気がする。」

会議は、脱線と修正、前進と後退を繰り返しながら進んでいった。そして、着地点が何処にあるのか誰もが見出せないまま時間は過ぎ、散々

議論を交わした末に辿り着いたのが、はじめに書いた「良いと思ったことをやっていく」だった。

会議では、そこにいる者同士が、その時の手持ちの論拠を拠り所に、その場で声を発し、その時に全員で議決へと向かわなければならない。そこには事前に約束された結末もそれを導く案内人もいない。何がどちらにどう転ぶかわからない曖昧さと、思考の果てで言葉が行き場を失くすような不安定さを常に背負っている。それゆえ、時として「シンプルな言葉」が、論理をあきらめた怠惰でも、知識や想像・言葉の欠如による不完全さからでもなく、むしろそれらを自覚し、それらを突き抜けるものとして、「納得」に至る可能性を帯びことがある。

「到達されたシンプルさ」とも言うべきその言葉は、互いにもがきながらも、ともに考え抜くことをやめないでいる者たちのもとで育まれ、不明な事態にとどまり続ける勇気と、混迷を決して無駄にしない真摯さが手織り寄せる希望の原石として、立場を超えて響き合う。

「現場力」ノオト(2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

12 痛みの経験

岡野彩子

いつもの喫茶店で、いつものカフェオレを注文し、いつものように本を読む。いつもの時間に帰ろうと立ちあがったその瞬間、今まで経験したことのないもの凄い痛みが左足を襲い、そして麻痺して、動かなくなってしまった。「痛い、痛い！」という絶叫の後に訪れた不気味な沈黙。しかし翌朝、痛みは再び目を覚ました。「痛い、痛い！」そしてまた沈黙。そのくり返しの日が続く。

病院で検査を受ける。痛みの原因はわかったが、痛みそれ自身は画像にも数値にもあらわれない。痛みは目に見えない。だから人に伝えるのがむずかしい。人の痛みを想像するのはなおさらだ。昔サファリで縞馬がライオンに生きたまま食べられるのを見た。悲鳴もあげず、黒くてまるい優しい目をしていたので、不思議な気持ちで眺めていた。

痛みは訪れて数日すると、私の心まで支配するようになった。そして人の痛みにたいする私のまなざしはますます見失われてしまった。誰にもわかってもらえないという孤独感と、思うように動けない苛立ちと、悲しみと、訳のわからない不安とでぐちゃぐちゃになり、どうにも心を治めることができない。こんな時、本当はひとりになりたい。でも自分では水もくみに行けない。看護してくれる人に感謝しているのに、衝動的に傷つけるような言葉を浴びせてしまう。自分が嫌いになる。大声で泣いて、泣いて、そして泣きつかれた。

その時、私の大学の先生がいつも仰っていた言葉が想い起された。「ありのまま受入れることです」。あらゆるものは移り行き、姿を変えて行く。一切は消えてなくなって当然のもので、この手に握りしめておけるようなものは何もない。何かある状態に価値があるかのように思い込

み、固執するところに苦しみがある。「そのままでよい、そのままでよい」。宇宙の果てから囁きかけるようなその声に、じっと耳を澄ましてみる。すると心がすうっと軽くなって、なぜだかわからないけれど、それまで心に重くのしかかっていた様ざまなことがあまり気にかかるなくなった。和解してくれたのか、痛みはその後私の心を支配するのをやめてくれた。

手術を受けて半年が過ぎた。あの突然の来訪者は、今はわずかな後遺症という足跡を残しているだけで、姿をあらわさない。痛みの経験は、今までとは少し違ったまなざしを持つことを教えてくれた。訪ねてくれてありがとう、と素直に思う自分と、ではまた来ていいかと聞かれると、苦笑いする自分がいる。

「現場力」ノオト(2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

13 アンドロイドは現場力を發揮することができるか？

池田光穂

標題の疑問に答えるとすれば、それは「否」である。あるいは現場力を身につけたアンドロイドは、もはや、そうだとは定義できず「新人類」なのである。この思考実験とそれに対する私の応答は「ロボットに演出をつける」という荒唐無稽なプロジェクトへの揶揄ではない。ロボット演劇チームの狙いは、この問い合わせへの技術的応答にあるのではなく、この試みを通した技術と演劇の予期せぬ創発的な展開を引き出すことであり、ここでの私の態度は偽悪漠然としているだけである。かくのごとく、現場力は人間の定義にまで及ぶ重要な属性であることを論証しようというのが私の狙いである。

私は現場力が発揮された場所において、（定義変更の前のアンドロイドを含む）行為者たちとその周囲にみられる抽象的属性を次の5つに分けた。1) 場所性・状況性、2) 意識性、3) 物理性・道具性、4) 媒介性、5) 身体性である。私は現場力を、個人や集団が「所有」できる技能や能力ではなく、場所に依存した行為者の能力の顕現であり、身体が深く関わるコミュニケーションの延長に位置づけられるために「きわめて社会的な概念」であると述べた（池田[Online]）。

私は過度の人間中心主義者ではないが、実験状況において高度に組織化された実験統制状況におかれ了一部の高等靈長類を除けば、人間は、行為や意識の中に未来の時間的因素を組み込める高度で複雑な情報処理をおこない、さらにそれを言語により外部表象化できる——つまり個体間で正確な情報伝達とその蓄積が可能な——ほとんど唯一の動物であると考える。いやいや集団で狩りをするチンパンジーも臨機応変な現場力

をもっているではないか、という反論があるかもしれない。だが、件の動物は上記の3)に属する狩猟道具を使うことができない点で失格である。近年の発掘成果によると北米最古の先史考古文化のクロービス人（紀元前1万3千～8千5百年前）は、効率的な狩猟道具の発明よって大型ほ乳類の大量虐殺と絶滅という人類の「はじめての原罪」という不名誉をほしいままにしている。現場力をはじめて身に付けたアンドロイドは、その見事なしぐさによって人間の魂を打ち震わすだけではなく、アンドロイドに仕事を押し付ける人間に反感をもち、人間にとっては都合の悪い現場力をつける可能性がある。そのためにも、この問い合わせの答えは「否」であってほしいのだ。

引用文献

池田光穂, Online, 現場力,

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/060518genba.html> (最終確認日: 2011年5月12日)

リドレー、マット (2002)『徳の起源：他人を思いやる遺伝子』翔泳社 (Ridley, Matt (1998) *The origins of virtue: Human instincts and the evolution of cooperation.* New York: Penguin.)

14 私はいつも彼をカメラ越しに

ほんまなほ

彼はそこにいた。

いつのころからだっただろうか。いや、そんなことはどうでもよい、私は、いつもなく、興味本位で手にしたビデオカメラ越しに、ダンスであるともダンスでないともいえない、彼の全身が繰り出す多彩なかたちをフレームのなかで追い続けるようになったのだ。あるときは木のように風に揺れ、あるときは枯れ葉のように坂道を転げ落ち、あるときは老婆と戯れる。彼はいつもそこにいた、それは確かだ。

私は目の前にいる彼を見ない。肉眼で見る代わりに、手にしたビデオカメラで触れている。遠隔視覚をとおして、彼の 、もう一つの皮膚を撫でるのだ。触覚が、触れているものしか感じることができないように、カメラの触覚は、彼のからだの一部分、ほんの少しにしか接することができない。触れた手がほどけ、宙ぶらりんになってフレームが空をさまようこともしばしばだ。しかしその分だけ、フレームのなかに彼が到来し、再び手応えが得られたときには、唯事ではない興奮が画面に満ち溢れ、私の手は必死にすがりつこうとする。彼の像に。

彼の像は、私の手のなかで私だけのものとなる。つまり、私と彼のあいだで、特異で、他の誰とも分かち合い難い結びつきが生まれる。にもかかわらず、それが映像として再生される瞬間には、変質し、その姿が見る者すべてにあられもなく曝け出されてしまうのだ。そこで人が見るのは、そこにあったはずの結びつきの痕跡でしかない。

それにしても、生ける身体のうみだす奇跡、ダンスを映像化することほど、ばかげた試みはない。「ダンス映像」が無数にばらまかれようと

も、ダンスは肉眼で見るべきである。肉眼こそが、重さをもった塊としての身体をありのままにとらえ、それを空間の奥行きと時間の厚みのただなかで享受する。それに比して、カメラを通してみる身体の像の救いようのない薄っぺらさときたら！それは紛れもなく虚像であり、存在を欠いた存在、非実在である。

にもかかわらず。私は追う、それに触れようとして。それは動く、生ける身体の分身として。カメラに残されているのは、物質へと変質した、彼の生ける身体と私の生ける身体の絆の痕跡なのだ。そして、絵画や小説のように、そこにあったものに対して同意する者だけが、その痕跡から絆を取り戻すことができる。つまり、ダンスの手触りがそこで生まれ直すのだ。

映像は何も残さない。何も記録しない。かつて触れた感覚を思い出し、そこに手を伸ばすために、届かない目の前に現れるにすぎないので。

「現場力」ノオト(2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

15 おもしろい会議

西川 勝

「おもしろい会議」もあるもんだと唸った経験を紹介する。平成23年3月16日の夜、東舞鶴の商店街で開かれた「種は船in舞鶴」のミーティングである。アーティスト日比野克彦さんが、舞鶴の市民たちと一緒にやっているプロジェクトの一環である。朝顔の種の形をした船をつくって、それで海に出ようというのだ。数年前から各地で同様の活動をしている日比野さんは、舞鶴での活動は2年目、いよいよ来年には本当の船として、種を海に走らせるつもりなのだ。シャッターを閉めた店が目立つ商店街に、がらんとしたアートスペースが改装されて会場になった。会議が始まる時刻になっても、人はすぐには集まってこない。でも、ほちほちと来た人が椅子を並べたりして会場を用意する。奥の部屋からはカレーの匂いがしてくる。たまたま参加することになったぼくを見ても訝しむ人はいない。誰が来てもいいのだ。木と段ボールでつくった種船の模型は完成して舞鶴高専の倉庫に移されてある。のべ5,000人以上の人人が関わった。

会議には種船を愛しはじめた人たちがやって来る。腕のいい大工さん、お母さんと一緒に小学生、介護施設の栄養士、造船工場の技術者、船の検査をする偉い人、海岸沿いのホテルの従業員、学生、職業不明のおじさん、お洒落なお姉さん、高専の先生、カレー屋さん・・・いろんな人が次第に集まって、狭いスペースは人でぎっしりと詰まった。

日比野さんが壁にポスターの裏紙を貼って会議が始まる。彼はほとんど具体的な提案はしない。「あの船で海に出たい」というだけである。海上に浮かぶための素材をみんなが考える。専門家の意見は尊重されるが、奇想天外な意見も飛び出す。動力は何にするか。手で漕ぐのかエンジン

をつけるのか、エンジンがあると船検（車検みたいなもの）を受けないといけない。それに合格するには、どうすればいいのか。できた種船を車で運ぶには、道路交通法の基準に合わなければ分解しないといけない。それは面倒だな、じゃあ、この形を変えてみようか。完成予定までのスケジュールはどうするの、船の設計士を見つけないとね。やってくれそうな人はどこにいるかな。予算は大丈夫か。いろんな意見が出ては、日比野さんのスケッチになって壁の紙に描かれていく。会場にカレーの匂いが強く漂い、議論も熱くなっていく。異なる人たちのコミュニケーションデザインが実際に目の前で繰り広げられていた。

「現場力」ノオト (2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

16 場を担う

上條美代子

電車を降りようとしたら突然一人の男性がホームで倒れた。傍の方がとっさに頭をカバーされた。意識がないようだ。痙攣もしている。「どなたか?」という鋭い声にも、私は早く通り過ぎたかった。約束の場所にとても急いでいた。しかし、「それでいいの?」と聞こえた気がした。ご先祖さまならぬ「故・患者さま群」「先輩群」からの声も聞こえてしまった。私だけに呼びかけられたわけではないが、いつでも応えるように育ったからか、身体が動いてしまう。約束は捨てた。「私はナースです!」と、人だかりに駆けより見知らぬ方と一緒に救急対応を行った。俄かチームだがお願いしたらスムーズに動いてくれ、事なきを得た。救急隊に引継ぎ、俄かチームは自然に解散した。私があわてて電話連絡をしていると、「凄いですね。ガードしながら応援してました。」と見物客かと思った方から声をかけられた。あれはガードだったのか、応援だったのかと、自分に言い聞かせ「おかげさまで、助かりました。有難うございました。」と目礼した。あの場がチームだったこと、いい仕事と第三者評価されたようで何だか嬉しくなった。

昨今の若者は誰でもよいという仕事には価値を置きにくいと聞く。難儀なことだ。「仕事に雑務はない。雑務にしてしまうかどうかはあなた次第」と上司や先輩に教えられた。誰でもよいが誰かがすることによって家庭も社会も成り立っている。どんな仕事もそれを支えている。そして、その支え手になれるかどうか、いつでも代われるかどうかで人としての真価が問われるようを感じる。思いがけない評価は後からも効いた。私は理不尽やジレンマを前に立ち尽くす時、神や仏が見てくれているから、見てくれているであろう神や仏を感じ、探し、振り返り、確かめて

いる時がある。あの方は「神さま」のお使いだったのかもしれない。救急のような例は一見派手に見えるけれど、黙って動いてくれた方々の弁えのある参加の仕方が心地よく信頼できた。それは共に仕事をすると力量が判るからだろうか。手を出すくらいだから大丈夫なレベルの人だろう。目標がひとつだから？しがらみが無いから？さまざまに考えた。今回、応援ウォッチングという参加の仕方があることも知った。病院の訓練された専門職集団でなくとも「救命」という共通目標を前にその場でチームが組めること、一瞬のためらいを越え、自ら、^{みずか}^{おの}自ずからの行動となつたことも収穫だった。

「現場力」ノオト(2011年・春)『Communication-Design 5』掲載

17 人それぞれ

樋本直樹

現場にかかる倫理的な問題、とりわけ答えの出にくい問題について学生に考えてもらおうと思いグループワーク等をさせると、必ず返ってくる返答に「何を正しいとするかは人それぞれ」という決まり文句がある。これは学校という場面だけではなく、何かしらの問題について考えようとする現場で話し合いをする際にも耳にする言葉なのではないだろうか。

確かに、事実、考え方や価値観は「人それぞれ」なのだが、その言葉をどういう意味で使っているのかを確かめようと思い、「考え方は人それぞれだから話し合っても無駄って話なの」それとも「考え方は人それぞれだから、私の意見を受け入れろって話なの」と聞くと、それには答えず怪訝な顔をしながらグループワークに入る。そしてグループワークが終わってコメントを書いてもらうと、また「考え方は人それだから」正しい答えはない、わからないとある。一体、この「人それぞれ」とは何なのだろうか。

まず、考え方は人それだから自分の意見がすべて正しく、だから他人は口を挟めないかというとそんなことはない。ある事柄において100%正しい意見などはなく、その人の意見には正しい部分とそうでない部分がある。そうした意見を他人とつきあわすことで、正しい部分はそのままに、そうでない部分を修正したり、新たな考えを付け足したりすることによって、新たな意見を形成していくことが、その場の合意や納得につながる。その意味で、話し合うことに意味がないことはない。

また、人それぞれという言葉は、そもそも自分の考えが定まっていないと、つまり何かしらの「軸」がないと使えないはずである。その言葉

は自分の考えと他人の考え方を、客観的に外から見比べてこそ意味をもつはずで、それ抜きに単に「人それぞれ」と言ってしまうことは、単なる無関心の表明にすぎない。

「人それぞれ」の考えがあり、本当はそこからが重要なのに、なぜかそこで止まってしまう。その先に行かない。行こうとしない。自己防衛なのか、考え方の「癖」のようなものなののかはわからないが、他人と何かを考えていくためには、この「人それぞれ」を超えていく必要がある。何かしらの現場においても、そこを超えていけるかどうかでその現場の「力」が試される。

私たちは意外とちゃんとした意見をもっていて、だから話し合うことに意味があるんですよ、ということが伝えたいのだが、どうもそこが伝わらない。「人それぞれだから」では済まないから問題になっているはずなのだが・・・。

「現場力」ノオト(2011年・秋)『Communication-Design 6』掲載

18 現場力はケータイの細部に宿る

池田光穂

都心から郊外の住宅地に向かう沿線電車、午後11時。車内はそこそこ混んでいる。私は乗降口とは反対の扉に立ち、窓の外の夜景をみることをやめ、車内の進行方向をむかって座席の列を一瞥した。「座席は譲り合って詰めてお座りください」の車掌のアナウンスも虚しく、10名はすわれる座席に8名の男女の乗客が（さも今風であるかの如く）ゆったりと座っている。私が驚いたのはそのような座席エゴイズムあるいは許容身体距離の閾値の拡大のことではなく、そのうち7名が携帯電話を操っていたことだった。座席の前に立つ若者も4、5名いたが、すべてが次の駅までの20分間に少なくとも一度はそのコミュニケーションツールを指先で忙しく操作し画面を注視していたのだ。さて、奇矯な設問だが、携帯電話（ケータイ）と人間のあいだに現場力が發揮される瞬間はあるだろうか？ 私はあると思う。

私のケータイは日本で最初期に販売されたスマートフォン（スマホ）である。使って3年になるのに、いまだ使っていないボタンがたくさんある。使うのは住所録に連動した通話機能、親しい人達とのSNS（ソーシャルネットワークサービス）、そしてイヤホンによる音楽聴取機能だけである。最近は、もっぱらこの最後の機能でCD20枚分の思想史の朗読を少しづつ通勤時間の間に聴くのが日課のようになっている。しかし、聴きたい部分をジャスト・イン・タイムで呼び出しストレスなく聞くまでには、何度イライラしたことだろうか。今は、操作の失敗に関する記憶がほとんど忘れられて「自然化」されているように思える。

しかし「現場力と実践知」の授業の中で、この身体操作に関する語りを院生たちに披瀝した時に、操作エラーの回数を最小化すること、機械

のプログラミングの都合で予測できる読み取りエラーの予兆、ボタン操作と確認音でわかるスイッチの状態が瞬時にわかり、気づく間もなく操作していることなど、実にさまざまなことが身体化され、また、それを客体化して、彼らに延々と語ることができた。これにこれまでの感情体験や時間記憶、歩いた場所の心象風景などを加えて、延々と説明できるのだ。これは私にとって驚くべきことであった。まさにケータイを操作する私の現場力の言語化と言うことができないだろうか？「自然化」した操作する身体は相変わらず沈黙しているが、外からキー（暗号・記号・言語）を与えてやれば人間は驚くべき情報を発露する存在なのだ。

「現場力」ノオト(2011年・秋)『Communication-Design 6』掲載

19 尊厳する

上條美代子

「先生、この前の実習では、バスタオル使ってちゃんと尊厳してきました」と嬉しそうに看護学生が話す。「尊厳」を動詞形にして話す学生に戸惑いつつ私は深く頷けるものを感じた。専門職の倫理観には不可欠で、人間としての尊厳を保つように教えよと声高に言われる。「尊厳」は日本国憲法にも医療法にも介護保険にもうたわれ、各種報告書にも盛り込まれるキーワードである。おかげで耳にすることが増えたものの抽象的な感覚は拭えず学生は不消化だった。

私は前の授業で高齢者施設（以下施設）でのターミナルケアのエピソードを語った。エルメスの豹柄、大判1枚のスカーフにくるまり丸まっているAさんの様子を見て「裸でオムツ剥き出しなんて尊厳がありません。あんまりです。」とあるスタッフが泣きながら私に訴えてきたことがあった。Aさんは肝ガンの終末期の70代の女性。治療効果が得られず、最期を病院でなく施設で過ごすことを選び退院してきた。介護室に落ち着いたAさんは描きためた仏画を前に「楽に逝きたいからよ」とウインクをした。最期の日々、110×200cmのベッドに145cm35kgに満たない小柄な身体が丸まり、何かをつかむと手は空をつかみ、腹水による腹部の緊満感のためにあえぎ輻転反側していた。腹部の緊満はAさんを苦しめパジャマも毛布も薄い羽根布団も受け付けなかった。私たちケアする者の課題は周囲にどう見えるかではなくAさんが望んでいる事に応えることだった。私たちはAさんがパジャマを着ていようが裸でいようがAさんがAさんであることには違いがないと思っていて、いつもと同じく傍に寄り添いAさんの気持ちややり方を丁寧に確かめ、推測しながら事を進めた。腰や背をさすり安らかさを見いだし宥めていった。

人生の幕引きに携わる者として命を助けることはできないけれども「痛み」を和らげて「死ななければならない無念さ」にうなづき、心残り（又は「心の凝り」）に対応する。Aさんへの思いを具体的な見える形（行為）に表わそうとする、だから動詞なのだ。動詞であるべきと学生から教えられた気がする。一場面を切り取って見ると尊厳が「ある時」「ない時」と二分化しがちである。Aさんに続く方々の念いに応えるためにも「自分や大切な人が『されたくないこと』を決してしない」過程で「尊厳する」行為が増えて欲しいものだ。

Aさんをふわりと包んだスカーフは親友からのプレゼントだった、と没後に知った。

「現場力」ノオト(2011年・秋)『Communication-Design 6』掲載

20 月のもとにいる

西村ユミ

“満月”的日に、月のもとに何人かが集った。この満月には、不思議な“ちから”があるらしい。その“ちから”に、あまり出会ったことがないと思っていた。しかし、皆で満月について語り合うと、いくつも思い当たることが出てきた。そういうえば、調査先の病院で、満月の日にたくさん出産があったと聞いた。犯罪も多いらしい。ある人は、川の水位が「(腕を縦に大きく広げて)こんなに」上がってきて驚いたという。出会ったことがないと思っていたのは、その日が満月であることを意識して暮らしてこなかったからだろう。

しかし今月（2011年10月）は違う。仕事の帰り道に、ふと空を仰ぐと、橙色の真丸な月が夜空を照らしていた。「満月」であることは、その日、何かで聞いた、あるいは読んだ。が、月が目に入るまでは忘れていた。月を見て、それを知っていたことに気がついた。その次の日に月のもとに集った。皆で月を見ていたら、誰かが月に手をかざした。それに釣られるように、皆が月に向かって手をかざした。誰かが「温かい」と言った。「ほんとだ」と応じた。そうだろうか。「反対に向けると、ひやひやするよ」と誰かが言った。試してみた。「反対に池があるからだよ」。ついつい、ひやひやの根拠を求めたくなる。月が暖かいだけでなく、池の方が冷たいから相対的に暖かく感じる、と。——知らぬ間に、因果関係の罠にかかりそうになった。

そんなことより、月の右下に小さな光を見つけたこと、さらにその下で、木の葉が揺れていたこと、空が私たちを包んでいたこと、何よりも、皆が手をかざしたその影が、月夜の景色を作っていたこと、それに浸っていることが心地よかった。もはや私たちは、空を見ているのではない。

月に照らされ、月からまなざされて月影となり、月とともにあった。

視線を足元におとすと、私の体が、うっすらと足元から向こうの方へ伸びていった。足元でつながれたもう一人の私を知ったとき、空を見上げることを忘れていただけではなく、月が映し出しているもう一人の私とともにいたこと、それを見ていながらも見えていなかつたことを知った。月影を伸ばしながら、それとともに歩いていたにもかかわらず。月夜は、私の存在が世界とともにあることを控え目に、ずっと前から教えてくれていたのだ。ひやひやする池のまわりの「ムーンウォーク」で、そんなことを思った。

「現場力」ノオト(2011年・秋)『Communication-Design 6』掲載

21 常に新たに現れる場

野島那津子

今年度は「現場力と実践知」をはじめ、いくつかの授業に関わらせていただいた。それまで「現場力」というものに全く無知であったが、授業を通して少しずつその外形が見えてきたように思う。ここでは、「現場力」なるものの一端を拙論の事例から照射し、「現場」ならびに「現場力」の遍在性を指摘したい。

筆者は過去に、女子校の生徒が、ヒエラルキーに基づいた日常生活をいかにサバイバルしながら楽しく過ごしているかについて考察した。女子校には、教室内のプレゼンスに関わるヒエラルキーが存在する。それは暗黙の不文律であり、生徒たちは常に自分の位置を確認しながら、適切な行動を選択し実行している。「ハブ（仲間外れ。「村八分」「省く」が語源）にされたら終わり」の切迫した日常は、グループになって相互に「存在論的安心」を手に入れたり、「みんな」と同じモノを持つことで中間層以上の成員資格を得たりするなど、他者との共同（というよりも共犯）によって乗り越えられる。しかし、このような日常も卒業すれば「終わり」である。この有限性ゆえに、生徒たちは他者との共同を一層加速させ、日常は戯れの様相を呈する。苛烈でありながらも終わりの見えるサバイバルは、最早日常（ケ）ではなく、人生のハレの時間として大局的に生きられる。独特の「女子校ノリ」や、モノによる差異化と同一化的ゲームなど、生徒たちは戯れることで己に与えられた時間と空間を「適切に」生き抜く。

以上で重要なのは、生徒たちは上記のことを意識的には行っていないということである。もちろん、「ハブにされない」ために、各局面に応じて戦略的なテクニックを用いることもあるだろう。しかし、それらは

あくまでも状況に応じた瞬間的な対応であって、彼女たちは教室内の全ての関係を把握しているわけでも、卒業まで安寧に過ごすための絶対的な方法を身に着けているわけでもない。なぜなら教室は、確実に毎日を過ごすという意味では常に同じであるものの、何が起こるかは分からぬいという意味で不確定性を免れ得ない、常に新しく現れる場だからである。このように、常に新しく立ち現れる場において、自らの経験と他者との共同を駆使して生き抜かんとする女子校の生徒たちの日常に、「現場力」なるものの一端が垣間見られると考えられる。そしてそのような日常は、「常に新たに現れる場」という「現場」である限り、何人にも訪れるという意味で、私たちは、常に既に「現場力」を生きていると言えるのである。

「現場力」ノオト(2012年・秋)『Communication-Design 7』掲載

22 ダイアローグ1 相槌の音

ほんまなほ

誰かと話しあうための、ほとんど唯一と言ってよい約束事は、同時に話さないことだろう。当然のことながら、相手と自分が同時に話すと自分の声も相手の声も聴くことができなくなる。話すということは、話している自分の声を聴くことだから、相手の声と自分の声とが重なって不明瞭な音響が生ずると、私たちの思考は混濁してしまい、何が言いたいか分からなくなる。互いに指で耳に栓をして自分の声だけに集中しようとするのは、あまりに不幸な状況といえる。じっさい、それは相手の話を聴きたくないときの最終手段でもある。アッバス・キアロスタミの『TEN』の第一話で、車を運転する母親の話を聴きたくない助手席の子どもがするのは、まさにそれだ。

二人以上の者が同じ場所で同時に話しているところに居合わせ、どちらかの話を選択的に聴くことは、耳が慣れればさほど難しいことではない。それはむしろ日常的ななされており、文字通り、何かを聞き分けるということにはかならないだろう。興味深いのは、誰が話していようと聽こうとすると自分が黙ってしまう、という事実だ。この、黙る、とはどういうことなのか。

もちろんそれは、聴いているあいだ、まったく声を出さないということではない。相槌を打つ、という表現が示すように、ふんふん、あー、いやーと、相手の声に合わせ、必ずといってよいほど表情と身振りをともないながら、声が漏れるだろう。このような声は、話すことを促したり、遮ったり、盛り上げたりする伴奏のパートを演じている。このような伴奏する声は、反響や反発、協和と不協和、先取りと反復という、音楽的な機能を果たしている。しかも、その声は伴奏に終始するのではなく

く、いつでも主旋律に変容する可能性のある、潜在的な話者なのだ。

そう考えてみると、話し合うという舞台では、単純に、聴くと話すの二つの役割が交代で演じられる、というのではなさそうだ。それは抽象化の産物といわなければならない。正確には、役割の交代が生じているのではなく、顕在的な声と潜在的な声のあいだでの音楽的な移行や変容が問題となっているというべきだろう。聴くということは、声を出さないのではなく、むしろ黙って話していることであり、話すということは聴くという音空間を創造することなのだ。

「現場力」ノオト(2012年・秋)『Communication-Design 7』掲載

23 ダイアローグ2 表現

ほんまなほ

私たちをとりまくすべてのもの、世界は、豊かな表現で満ち溢れている。光や重力はそれだけですでに表現であり、ときに優しく、ときに厳しく、私たちに直接に語りかけてくる。私たちの肉体も、つねに表現の内側に属している。表現に促されて運動し、その運動によってあらたに表現に加わっていく。私たちの意志が肉体に命ずるずっと手前で、肉体は震え、動き、表現を先取りしている。私たちの意志は、そうした肉体の表現に運ばれるだけだ。

表現の背後にそれを表現するものを探そうとすると、私たちはかえって表現を見失ってしまう。表現されたものは、直に、そこに、そのように、現れている。それに触れるためには、ただ折り返し表現してみるほかない。見る、聴く、感じることは、それ自体で表現の始まりであり、表現の内側に身を滑らせることなのだ。表現するものと表現されたものは、感じるという一回の出来事のなかで、切り離すことのできない表裏の関係を結んでいる。目や耳は受容の器官ではなく表現の器官なのだ。

感じことのなかで始まる表現は、その変形や発展へと自らを押し開いていく。私たちはなぜ目にしたことを描き、耳にしたことを書き、夢中になって世界にカメラを向けるのか。なぜ熱心に話したいと思うのか。なぜ怒りや悲しみは単なる心の動きや感情ではなく、それ自体で表現へと向かうのか。なぜ私たちは歌うのか。さらに、なぜ私たちは表現された声、顔、文章、映像にときに魅了され、ときに反発するのか。つまり、表現はなぜ表現を釀成し、繁殖させるのか。

こうした表現の連なりを支えているのは特定の能力でも物質でもない。どれほど複雑で高度な精神性に昇華されたものであれ、表現は肉体

をもつことの呻きや喜びに根をもち、新たな土壤へと移植される。文章であれ、ダンスであれ、絵画であれ、音楽であれ、表現は肉体と肉体のあいだに成立する一つの出来事であり、逆に、肉体は表現が表現へと折り返される結節点となる。表現から身を逸らし、沈黙することもまた、新たに到来するべき表現の核になるだろう。沿ったり、離れたり、飛び込んだり、抜け出したり、有でもなく無でもなく、遊戯のように。

「現場力」ノオト (2012年・秋)『Communication-Design 7』掲載

24 ホッキスは左45度？

岡野彩子

会社員をしていたころ、「ホッキスは左45度よ」と先輩に教わった。つまり一ヵ所でホッキスをとめるとき、用紙の左肩に右上がり斜め45度の角度で針を綴じるということである。それ以来、私はこの教えをなかなか普遍的法則のように思い込み、ひたすら疑いを抱くことなく「左45度」にとめていた。またそれで特に問題も起こらなかったのである。

しかし後に学問の世界（文系）に来てみると、しばしば右肩で綴じた文書と出会った。縦書き文書である。書道という伝統文化を持つ国に育ちながら、いつの間にか無意識に横書きを標準としていたのか、ちょっとしたカルチャーショックのようなものを感じた。先輩に伝授された「左45度」の教えは、ある一定の条件——左から右方向に流れる横書き文書を右利きの人が読む——を「想定」した世界内でのみ通用するものだったのである。このような想定の枠をはずして世の中を見回してみると、ホッキスの位置はたいてい製本に準じ、日本語なら縦書きでは文頭が右上に来るため綴じるのは右肩、横書きでは文頭が左上に来るため左肩、となっていることに気づく。それゆえに横書きでもアラビア語ならば右肩で綴じることになる。いずれにせよ、右利きの読み手が想定されているようである。

したがって常にこの法則の通りだとはかぎらない。左利きや両手が使えない場合や、さらにはメモを取りつつ他方の手で頁をめくるといった読み手の個性やその都度の身体の動きに即してホッキスのとめ方が決定されたりする。またファイリングまで考慮して、一ヵ所で綴じた文書を重ねるとそこだけ厚く盛り上がるのを避けるため、綴じる辺の上下から等位置で二ヵ所をとめるルールが設けられた職場もある。さらに「45

度」の神話も崩れ、今や自動ステープル機能がついたコピー機が登場し、針の向きさえ選択可能である。45度の斜め綴じを見慣れた私は水平や垂直にとどまる針の凜とした姿に思わずはっとしたが、意外とめくり難く破れやすいことに気づき、あらためて斜め綴じを見直したのだった。

今では、文書との新たな出会いの度ごとにどのようにホッキスをとめるべきか自分で考えてみるようになった。私の書棚に並ぶテーマ別のファイルには、外国語の文書も含めて不揃いなサイズと様式の文書が混在し、会社のそれのように整然としていない。少数派の右綴じ文書などは裏向きにファイルされている。統一性のなさとそれゆえの非効率さは確かにあるけれど、さまざまな個性が一つ屋根の下にいると思って見れば、何だか楽しい。

「現場力」ノオト（2012年・秋）『Communication-Design 7』掲載

25 ごはん

安田伸行

ぼくは今日もいつものようにごはんを食べる。箸で白米を一つまみし口へ運ぶ。早喰いのぼくは奥歯で少し噛み碎いたらすぐに飲み込んでしまう。そのせいかよくお腹をこわすが、でも自分ではよく味わって食べていると思っており、何の問題もない。一方、「ごはん」という概念が仮に「口から食べる」という前提によって規定されるものであるならば、それが叶わない人がいる。つまり、「口から食べることのできない人」だ。

ぼくはその日、職場で夕食の準備をしていた。食堂に運ばれてきた料理を用意された器に盛り付け、利用者さんに「ごはんをお持ちしました。」と配膳をする。9名の方に食事を配り終えたあと、一人の寝たきり女性の利用者さんの部屋へ向かった。目的は胃ろうを流すためだ。ノックをすると「はい。」という男性の声が聞こえる。「失礼します。」と言つて部屋に入ると女性の息子さんとその子どもであろう小さな男の子が面会にみえていた。「こんばんは。」とあいさつをすると、男の子が恥ずかしそうに「こんばんは。」と返してくれた。「お食事のお時間なので、流してもよろしいですか？」と息子さんに伺う。すると、お父さんの足にしがみついていた男の子が、ぼくが持っていた胃ろうの用意を見て、「あっ、パパ、ごはんだ。」と少し嬉しそうな声で言った。

そう、「ごはん」なのだ。口から食べる／食べないとは関係なく、その男の子とその女性にとって、口から食べられなくともそこにあるのは「ごはん」なのだ。「口から食べられる人」からみた価値基準ではない。それを超えている。ごはんが生きることと切り離せないものであるならば、そのどれもがきっと「ごはん」であり、かたちは問われないはずだ。「そうでなかつたかもしれないのに、そうでしかなかつた」ということを

受け止める男の子のまぶしさは、女性の生きるすがたをやさしく照らしているようだった。

男の子の帰り際、ぼくは冷蔵庫にあったチョコレートを数個あげた。「溶けないうちに食べてね。」と言って渡すと、さっきと同じように恥ずかしがりながら「ありがとう。」と返してくれた。その言葉にはぼくも思わず「ありがとう。」と口からこぼれた。会話としておかしなやりとりのはずなのに、何故ぼくはそのとき「ありがとう。」と言ってしまったのか。振り返って考えても理由が見つからない。

「現場力」ノオト(2012年・秋)『Communication-Design 7』掲載

26 ひとつずくい

上條美代子

「看護師さんは（人に触れるのに）ためらいがないですね」と言われる。ないわけではないが、「触れてなんぼ」と育った。「今のひとはどうだろう」と首を傾げる。口では大事と言うが手が出でていない現実が見える。患者に電子体温計を渡し「脈は（とらないんですか）？」と訊ねられると経皮酸素飽和度計の画面を示し、プラスチック手袋のままで検脈したそうだ。マスクをつけ手袋をつけ、機械や専門用語で防御する。私の職場でも顔まで覆うようなマスク姿が横行する。それは患者や家族から見ると拒絶の姿勢に感じる。医師も看護師も患者に距離をおくのが普通になったのだろうか。CTも撮った。胃カメラも施行した。問診も受けた。丁寧な説明もしてくれた。しかし、主治医が触ってくれたと感じたのは入院して抗がん剤治療のルート確保（静脈注射）の時が初めてだった、といった話も聞く。

病室を巡り、「充電！」とか「お手当て！」とか言いながらこすり合わせた両手を患者さんの背中に当たり掌を包み込むと、温もり以上のものが伝わる。手は黙して雄弁だ。手指や足趾をゆっくり経絡に沿ってマッサージしていると、部分から全体へ柔らかくほどけ次第に弾性を帶びてくる。相互交流を身体全体がきっと喜んでいるのだ。身体に触ることは気もちにふれることになる。医療や介護の「障（生）老病死」の場ではふとこぼれ落ちてしまう「ことは」や「おもい」に出会う。息をのむ、小さくため息をつく。長い夜、近づく終わりの日が明日なのか、明後日なのか、将来はあるのか。「不」や「無」のつく思いがうごめく。そんな時、「ひとつずくいでんなあ」と76歳の男性。私には「一掬い」と聞こえたが「人救い」だったらしい。ひとは大切に思うものを大切にした

くて下から上へとすくう。温かい確かな手でひとすくいしたいものだ。

まど・みちおの『臨終』の詩をふわりと思い出した。 神さま／私と
いう耳かきに／海を／一どだけ掬（すく）わせてくださいまして／あり
がとうございました／海／きれいでした／この一滴の／夕焼を／だいじ
にだいじに／お届けにまいります

また研究会での小林恭先生は多くを語らず「鶴の一声」ならぬ「恭のひ
とすくい」をくださる。私は未熟さゆえ気づかぬこともあったが光をあ
て色をつけ、生かそうと返してくださる中で私も救われた一人だった。

引用文献

まど・みちお・集英社編集部(2005)「いわづにおれない」集英社be文庫：183.

「現場力」ノオト(2012年・秋)『Communication-Design 7』掲載

27 ためらいの現場力

西川 勝

「認知症の患者は…」「糖尿病の患者は…」などと、病名で患者のすべてを語ってしまう過ちに気づいていない医療者がいる。医療者の分を越えた人間評価だ。診断は診断でしかなく、その病名で呼ばれる人と医療者と呼ばれる自分という人間の関係の一部を担うに過ぎない。「初心忘るべからず」と言うが、初心は忘れてしまう。思い出すのではなく、もう一度、考え方直さなければならない。病み傷ついた人と、自分が出会う意味を再発見しなければならない。臨床の現場で身につける力は、とんとん拍子に登り詰めていくものではなく、何度も何度も新しく始め直す努力の内に芽ばえてくるのだ。反省を自覚的に継続していくこと、常に自分の足下を確かめ直す慎重さが、臨床現場における誠実さにつながる。現在の社会で主流となりつつある計画性や効率性を重視する短距離競争のような医療現場では、再考に再考をくり返す人は後戻りしながらのぐずぐず者と嘲られるだろう。が、急いで患者の横を通り過ぎる医療者が見落とした大切な問題に対処できるのは、遅れてやって来たぐずぐず者なのだ。

もう言葉を失った認知症患者だと、看護師のぼくが思い込んでいた寝たきりのおばあさんが「ありがとう」とつぶやくのを教えてくれたのは、高校を卒業したばかりのケアワーカーだった。自分の思い込みに眠りこけていたのだ。目を覚ましているために、必要なこと、それはドキドキするためらいの希望である。

最近も、一緒に勉強会をしている特別養護老人ホームのスタッフが、胃ろうの人に経口摂取の支援をした取り組みを知った。半年以上、訴えのなかった人から「なにか飲むものちょうどいい」と言わされたケアスタッ

フのためらいが、その後2年にわたる取り組みのきっかけになったのだ。自分たちの支援の分析をするうちに、当初は見えていなかった胃ろうの人自身の努力が明らかになっていく。新しい環境と新しい生き方になじむ努力を沈黙の内に続けていた認知症の人自身の生きる意欲が、「なにか飲むものちょうどいい」という訴えになって、周囲の人を動かしたのだという考察であった。ケアする側がためらってしまうような訴えこそ、相手が大きく変化する起点になる可能性を指摘していた。

現場は計画や計算が破綻する危険性と同時に、意図を越えた可能性を豊かに含みもつ。ためらう現場力による取り組みに、今後も注目していきたい。

「現場力」ノオト(2013年・春)『Communication-Design 9』掲載

28 伽藍の知・バザールの知

宮本友介

月に一度、釜ヶ崎で「哲学の会」が開催されているが、著者はそこに参加して、おっちゃん達との活き活きとした議論に驚き、楽しんでいる。毎回、一つのテーマについて2時間程度、語り合う。互いに自己紹介するわけでもなく、経歴や肩書きも気にしない。何か一つの答えに収束する気配もない。本線がないから脱線が通常運行となる。議論というよりも雑談なのだが、しかしそこでは明らかに知的興奮が惹き起こされているのだ。まるで広場のバザールの喧騒のように。

ソフトウェア開発者のエリック・レイモンドは、ソフトウェア開発コミュニティにおける2つの開発方式を対比して「伽藍とバザール」と呼んだ。すなわち、伽藍方式とは少数のコアチームによる意思決定を尊重する中央集権的な手法であり、バザール方式とは多数の参加者の独自性を尊重する分権組織的な手法である。(あるいは「会議室と現場」の喻えでもよいかもしれない。) この対比は、「専門知」と「生活知」にも成り立つのではないだろうか。大学を中心とする学術機関は、まさに専門知に対する伽藍（権威）として機能している。一方で、市井に生きる人々の生活知は、多様な価値観の中で持ち寄られたバザールの知である。

ただし、ここで重要なのは伽藍とバザールは対比されるものであっても対立するものではないという点だ。むしろ求められるものは「伽藍の知」と「バザールの知」の間にあるのではないだろうか。いかにして「伽藍とバザール」の融合を図るかが、われわれ（とりわけ「伽藍」の住民）にとっての大きな課題の一つである。そのための試みとして起ったのは、いわゆる哲学カフェ・サイエンスカフェ運動であった。だが、わが国でのサイエンスカフェは「伽藍の知」のアウトリーチ活動と

しての側面が強く、いわば「街角公開講座」となっているケースが多いという。「伽藍の知」は、必然的に伽藍の文脈（あるいは「スポンサーの御意向」）に縛られてしまうのだ。「坊主憎けりや袈裟までも」というが、袈裟を脱いでも坊主は坊主である。われわれにできることは伽藍の文脈を背負ったままバザールの文脈の中に飛び込むことであり、その可能性は釜ヶ崎のような小さな街にあるのかもしれない。

文献

Raymond, E. (1999) *The Cathedral and the Bazaar*. 山形 浩生(訳) (2000)『伽藍とバザール』(<http://www.catb.org/~esr/writings/cathedral-bazaar/cathedral-bazaar/>)

「現場力」ノオト (2013年・春)『Communication-Design 9』掲載

29 現場に臨む記号論

山森裕毅

ケアや看護の現象学の研究会に参加しているが、私自身は現象学者ではない。私がそこで考えていることは、記号論を現場に臨む仕方で練り上げていくことである。

記号論は評判のよくない学問である。現象学が生き生きとした生活画面を捉えるのに対して、記号論は人間性をそぎ落とした生硬な情報を扱うという印象を持たれている。「人々が生きている現場を記号や情報に変えてしまうなんて！」というように。

確かにそういった一面もあるだろう。だがそれがすべてではない。現場だからこそ意味があり、感じとることのできる記号がある。臨床に関わる症候や症候群がそうだが、他にも痕跡、予兆、シグナル、暗示、手がかり、嘘、言い淀み、表情などを挙げることができる。

例えば何か事件が起きたとする。残された荷物、残り香、何かしらの傷などは痕跡としてある人の不在を告げている。いったい何が起きたのか。残された物や証言からその出来事を再構成しようと手がかりを掴もうとする。痕跡に触発されて突然記憶が蘇るかもしれない。そういうえばあの時あの人は一瞬言い淀み、あんな表情をして何事かを言った。それは嘘だった。あるいは暗示めいたことを話した。なぜそんなことを言ったのか、なぜそのように話したのか…。もしかすると救援のシグナルを発していたのかもしれない。しかしそれに気づくことができなかつた…。

感傷的な例である。とはいって「いったい何が起きたのか」を捉えることは現場に臨む記号論の重要な働きではないだろうか。これを仮に痕跡論と呼んでおこう。しかしまだある。それは「これから何が起きるのか」

を捉える記号論である。これは予兆論と呼べる。最後に考えられるのは「いま何が起こっているのか」を捉える記号論である。これをどう呼ぶかは難しいが、とりあえず症候を広い意味でとて症候論と呼んでおこう。

以上のことにつ隨して、現場でこれらの記号を読み取れるかどうか、つまり解読者としての力量が問われる。それは記号を読み解く修練によって可能になるだろう。

ここで構想した記号論の利点は、ケアの現象学研究会の事例研究で見られる「記述」の方法論の曖昧さに視点を与える点にある。また会話分析への偏重を問い合わせし、分析を補助するアイデアも出せるだろう。さらに、記述を蓄積して構造を取り出すという現象学的営為に対して、現場での理解と動きに活かせるという利点があるとも考えている。

「現場力」ノオト(2013年・春)『Communication-Design 9』掲載

30 大学生が考える現場力

山本彩加・池田光穂

「現場力」とは何であろうか？ 今改めて現役の学部生の視点から考えてみる。思い浮かぶのは、現場にて良い人間関係を築く力、それを保つ力、臨機応変に対応できる力、問題を解決できる力などが思いつく。これでは抽象的すぎて具体性に欠ける。私（山本）の実体験から、この研究会で論じられている「現場力」と符合する例を抽出してみよう。

小学校に四校も転校したほどの転勤族だった少女時代、転校するたびに新しい友達をつくる力は現場力であった。ゼミのプレゼン後、想定外の質問をくらった際に交わす力も現場力だ。後輩にはお勧めできないが、ヒッチハイク中なかなか車をつかまえられず凍える夜に、（拉致というリスクを抱えつつ）1台の車に乗せてもらう力も現場力かも知れない。これらに共通するのは、現場力とは「人ととの関わりの中で発揮される」力だという点にある。

デザインセンターのホームページに紹介されている「現場力研究会」には、「現場力」とは、さまざまな対人コミュニケーションが生じる現場にて求められる知だとある。だから、現場力は、先に述べたように「発揮される」力であると同時に、「求められる」力なのである。対人コミュニケーションが生じる場とは、自分以外の誰かと空間を共有している場である。自室でインターネットに接続しているものの、ワープロソフトを使って1人パソコンをカタカタ鳴らしている時、対人コミュニケーションは生じていないと言える。対人コミュニケーションが生じている際に本能的に意識せざるを得ないのは、目の前の他者の存在である。そして、第六感を含む感覚を動員しながら他者と自己を同時に感じ、他者の判断を忖度しつつ、唯それだけでなく自分自身をも発信することだと

思う。私が他者に対して行っているように、他者もまた私に対して何らかの評価や価値判断を行っているのである。自分にできるのは、他者に対して「～しなければいけない、～できる、～したい」のバランスを考え、何かしらの行動に移すことである。

このように考えると「現場力」とは、池田（Online）が言うような難しい抽象的な概念ではなく、ふつうの大学生が常日頃行っている、ふつうの実践なのではないかという気がする。これまで、私（山本）はそれほど多く参加したことがなかった「現場力研究会」であるが、そこで議論されている内容もまた、非常に具体的な行動の紹介とその解釈をめぐる議論であったように思える。

私（山本）は「現場力」を求めて大学のキャンパスを彷徨して様々な授業を巡り研究会に辿りついた。そして、私が探している現場力はオンラインの書物ではなく、〈自分自身の実践そのもの〉の中にはいたことを発見した。ボンジュール！ 現場力！

文献

- CSCD「現場力研究会」(<http://www.cscl.osaka-u.ac.jp/ver2/research/genbaryoku.php>)
池田光穂「現場力」(<http://www.cscl.osaka-u.ac.jp/user/roaldo/060518genba.html>)

Column ポケットルーム探訪記・異聞譚

弁士：池宮輝哉（てるくん）

第166回現場力研究会（2015年11月18日）では、放課後子供教室「ポケットルーム」（西宮市・今津あいあい館）でスタッフとしてはたらく池宮輝哉さん（通称てるくん）を訪ねました。その際のてるくんの語り……

水曜日の午後、空は雨模様の中「いつものメンバー」がポケットルームに顔を出してくれた時は嬉しさに心も踊る気分でした。しかし以前にスーツを着た”黒服”的人たちが視察に来た時は、誰も中に入って来れなかった子ども達のことです。あの百戦錬磨の「西川軍団」が大挙して入って来ることで子ども達が「ワーッ！」と逃げだしたらどうしよう！とか、心のどこかに「今日は上手行くだろうか」という心配な気持ちも僕は抱えていました。

そんな不安はどこ吹く風と、早速左奥の机の隅っこで西川さんと2年生のまっ君が楽しく談笑しながらオセロをしていました。西川さんも何ごともなかったかのように「子どもの世界」にするっと溶け込んでいてびっくりしました。パッと端から見ても、今日初めて出会った大人と子供という感じがまるでしなくて、天王寺にある新世界の将棋クラブで長年来「おなじみ」の将棋仲間のように対戦を楽しんでいました。後から聞いた話によると、西川さんはまっ君が「オセロで角（カド）を全部取ったら面白くないやろ」と、わざと角を取らせて手を抜いてくれたことが衝撃的だったらしく。途中は「てるくんの先生なんやろ」とか「勝ったらてるくんに言うわ」と言う話などをしていたそうです。

その少し離れたところ、宮本さんと岡野さん達と、トランプの「大富豪」で遊んでいる中に、先ほどの「まっ君」より二つ年上のお兄さんの「かいと」がいます。3人兄弟の長男で、甘え上手で人懐っこい弟たちとは正反対の性格で、ポケットルームでも目立つ存在ではないのですが、とても優しい心を持っていて、たまに得意のピアノを上手に聞かせてくれることがあります。そんなどちらかと言うと引っ込み思案で人付き合いが得意なほうではないえいとが、僕が違う子とUNOをやっている最中に横目で見ると、宮本さんと岡野さんとトランプをやりながら何だか楽しそうに過ごしていました。

今日の参加者は15人くらいで、他にもバルーンアートをしたり将棋をしたりと時間はあっという間に過ぎました。入口のところで集まって「家が駅の近くやから一緒に帰ろう」と、それからはその兄弟と現場力研究会のメンバーで最寄り駅のほうへ歩いて向かいました。家の前まで送って行ったところ、かいとは何か名残り惜しそうにして、ポケットから「これしかないけど」と言って、足跡の形をした黄色のクリップを、一緒に大富豪のトランプをした岡野さんと宮本さんに渡しました。「雨が降っているから暖かくしてね」と、ここで一旦別れましたが、かいとは「お見送りする」と言ってまた付いて来ます。「雨に濡れるからいいよ」と僕が言っても付いてくるので、一緒にまた並んで駅まで行ってその下で別れました。その姿を横で見ていた上條さんが後に振り返って、かいとは「あの大人たちなら心を開けるんじゃないかな、だからこそどこまでも一緒に付いて行って見送りたかったんだ」というような感想を言っていたことが今でも印象に残っています。

第3章

「世直し」ノオト

「世直し」ノオトは大阪大学COデザインセンターにおいて2018年4月25日にスタートした世直し研究会に分野を越えて集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとにじっくり考えて綴ったエッセイ集です。この研究会では、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく〈世〉のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、〈世直し〉へと繋げていくことが目指されています。2022年3月までに月に1度のペースで45回の研究会が開催され、その間に7集の「世直し」ノオトを送り出してきました。第3章では、それらに収められた全68編のエッセイをお届けいたします。

第1集 「世直し」ノオト（2018年度・夏）

2018年4月25日にスタートした世直し研究会に集う大学内外の参加者が綴った「ノオト（notes）」の第1集です。今回は第1回から第4回の研究会（2018年4月から7月）における対話から編み出された10編のエッセイをご紹介します。

この間の研究会では次のようなテーマをとりあげました。

第1回（2018年4月25日） オープニング～あなたにとって〈世直し〉とは？～

第2回（2018年5月30日） こどもとする哲学対話から考える〈世直し〉
～高橋 綾・ほんまなほ著『こどものてつ
がく：ケアと幸せのための対話』（大阪大学
出版会、2018）を読む～

第3回（2018年6月27日） Baby Box（赤ちゃんポスト）の今

第4回（2018年7月25日） 「世直し」ノオト（2018年度・夏）合評会

初回の研究会で「あなたにとって〈世直し〉とは」という問い合わせが投げかけられました。そのため本ノオトでは、それぞれが考える〈世直し〉について書き現したエッセイが多く見られます。

1 世直し研究の「思想」について考える

池田光穂

僕は世直しという言葉を冠したら？と研究員の岡野彩子さんに提案したところ、彼女はそのまま研究会として組織してくださった。世の中の矛盾や理不尽について考える大学と市民の集いを続けてこられた岡野さんにはまず感謝したい。僕がここで言いたいのは「社会問題」や「革命」ではなく他ならぬ「世直し」という用語をなぜ提案したかということである。結論を先に言えば「世直し」にある徹底的にナイーブな純粹さと、あらゆる政治的プログラムに含まれるようなずる賢さ（狡知）の欠如という性格に僕は魅了されている、そのことである。世直しは良い意味でも悪い意味でも、つねに現在時（Jetztzeit）に係留されており、その顔は未来に向かっている。

さて岡野さんは、ルター派の牧師ディートリッヒ・ボンヘッファー（1906-1945）の研究家であると同時に、ナチスドイツの強制収容所の中でドイツ降伏の1ヶ月前に処刑された、この思想家の「現代的意義を問う」宗教研究者でもある。ボンヘッファーは牧師でありながら一方でガンジーの非暴力抵抗の思想に共鳴しながらも、ヒトラー暗殺計画に関わったのは、ナチスドイツに翻弄されたユダヤ人を含む名も無き政治的暴力の犠牲者への共感と義憤ゆえである。そして逮捕後の短い期間の深い思索と相まって「剣をもって抵抗する」ことの意味についても徹底的に考えた。ゆえに彼は世直しの思想家だ。ボンヘッファーを語る岡野さんは、彼を歴史の中に留めておく後ろ向きのタイプの研究家ではない。ボンヘッファーを見る彼女こそが、現在時から未来に向けて考える人である。

ところで大阪出身の人なら世直しと聞くと、やはり反射的に想起する

のが大塩中斎（平八郎、1793-1837）であろう。中斎は儒学者（陽明学）であると同時に奉行所の与力—今の刑事行政と司法と警察がミックスした執行官—であったが、義憤に燃える孤高の人であったのか、今でいう奉行所の内部告発を果敢におこなった人だ。他方で切支丹禁制後二百年以上経っているにもかかわらずその異端の探索と摘発を行った人もある。与力引退後に平八郎の乱の蜂起と失敗で自害するが、最初から反骨の抵抗家だったわけではなく、元与力として人脈を使って最後まで行政や豪商に助言をおこない、天保期の飢饉の回避のための努力を続けていた。彼が独学で修めた陽明学は幕府の朱子学からみれば異端であり、また蜂起の直前における軍事訓練の名目は、他の地方で発生した民衆叛乱への鎮圧目的であると周囲には説明していたらしい。周到な政治プログラムを立てるマルクス主義の革命家と大いに異なり、大塩は体制側の人間であり、最後の最後まで自分の武力を蜂起に使うのか、それとも民衆叛乱の鎮圧に使おうとしているのか不明な人物である。

僕が「世直し」という言葉に魅了されるのは、この宙づりの緊張感と、現在時に呪縛され何とかしなければと具体的に「ことおこし」する際に向かう顔が未来を向いているからなのである。

世直し研究会の設立経緯を記載したURLは <https://goo.gl/VNpNw9>（短縮URL）にあります。

2 よりみち日暮らしがいい

井上こう

ここ世直し研究会というささやかな場に参加して、世直しというのは大それた言葉かもしれないが、あらためて、自分の身の回りからの世の中への関わり方はどんなものだろうか、考えてみたい。

世間の何事かにつよい関心をもつこともあるが、あまり持続せず、深く考えないうちに別のものに関心が移りやすい。それに、無思慮や保身から人と人の大切な関係をそこなって後悔したことも多々ある。そういう自身のあり方を反省しながらというか、残念ながらそういうことをこれからも繰り返しそうな道の半ばで、考えを一歩進めることになればいいと思う。

そうなればいいという言い方をするのは、思い浮かべる、感じる、ああしようこうしようと考えることに、一貫した意志をもちつづけることを難しく感じるからだ。

けれども、思い浮かべ、感じ、考えるどんなことに親近感、もしくは疎遠な感じをいまもっているかは、肌感覚のようなものでいつもなんとなく自覺している。言い換えれば、身近なもの縁遠いものは絶対的な遠近をもっているわけではなく、ときどき、より多くのことが身近に感じられる。そういう時は、自分が宙ぶらりんでよくて、将来設計のないその日暮らしのなかで漂い流されていくリズムをいくらか楽しんでいる時だ。話が身勝手に飛躍しているが、これはけっこう大切なことに思える。

世直し研究会では、自身も苦しみや悩みをもち、さらに他者の苦しみも分かち合おうとする人のいとなみがしばしば話題にのぼる。圧倒的なつらさがあり、つよい意志でぎりぎりの努力をしている人たちがいる。その核心のことではないが、それを伝え聞いて苦しさにひるまないため

に、私はむしろ意志とは別の思いのあり方があると思う。

私は人生を設計しようと頑張ってしまうと、とかく周りを「因子」のように捉えてしまう。「因子」としての苦しみは遠ざけたいものでしかない。しかしこれはけっこうさびしい発想だ。私にはこれまでの人生を設計の態度で頑張った跡がいくらかあり、へたで身になじまなかっただけかもしれないが、その部分の跡はなんだか荒涼としている。

反対に、その日暮らしでもいいやという気分のなかでは、五感がよりみちに走り、周りの人、風景、ごちゃっとした物などの表情を味わっていることがある。そういう時、意志で頑張ったわけではないが、苦しみは、「因子」ではなく、言葉や身体の馴らし方でなんとかつきあえて、運効性の力になることがある。

やがて赤ん坊の首が据わるように、よりみち日暮らしの人の生き方が世の中に据わればうれしい。そっちに一歩いくには、えーと……。

3 「面倒くさい飼い主」、この言葉に心がざわつく

今井 泉

私は、動物病院を現場として仕事をしている。仕事をしている中で、職場で「面倒くさい飼い主」という言葉を耳にするとき、私は心がざわつく。『面倒くさい』といわれる理由は、話を聽かず一方的に要求をしてくる、獣医師やスタッフに不安や場合によっては怒りをぶつけてくる等、様々である。この言葉は、診察対象の動物ではなく、人である飼い主に対してその言葉は向けられている。

私は夜間動物病院で10数年間仕事をしていた。そこには、様々な事情で深夜の動物病院を受診する人（多くは飼い主）と動物の存在があった。飼っている動物が事故に遇い駆け込む飼い主は、何とかしてくれと一方的に要求をしてくる。その事故に関わる車を運転していた人は、リードも付けずに夜中に散歩することは飼い主の管理ミスではないのかと不満や場合によっては怒りをぶつけてくることもある。深夜の動物病院は、言ってみれば「面倒くさい飼い主」が多く来る場所なのかもしれない。夜間動物病院は多忙であり「面倒な現場」でもあった。年中無休深夜から早朝まで診療している病院は当時大阪府下でも数件、年末年始などは、野戦病院の様相に、急変した動物が1時間近くかけて来院した時には救えない……「今日は死亡来院（到着までに心肺停止状態）がなくてよかったです」などと終業時に会話をすることはあったが週に3日もあれば良い方、そのような現場だった。

「面倒な現場で仕事を続ける限り、面倒くさいことは失くし（直し）で行かないしんどいばかり」そんなおもいに駆られて、コミュニケーションに関する知を求めて、ここ数年大阪大学を含め様々な場での学びを進めてきた。そのなかで現場力研究会（世直し研究会の前身）へのお誘い

を受けて参加するようになった。2016年から獣医科大学でもコミュニケーションを意識した医療面接がコアカリキュラムになり、私の現場においても、獣医コミュニケーションとして関心が向けられる機会が増えつつある。医療面接の学びの中で『解釈モデル』という概念も知った。『面倒くさい』は飼い主と獣医師の『解釈モデル』に差があることも一つの理由であることも学んだ。

私は「面倒くさい飼い主」という言葉に、「先生は何についてそう思うのか？ 飼い主さんはどう思っているのか？」と自分の『解釈モデル』を通して心をざわつかせている。

4 世直し人——ルターの場合——

岡野彩子

マルティン・ルターに始まる宗教改革は昨年500周年の節目にあつた。「宗教改革」の原語はドイツ語の Reformation でラテン語の *re*（再び、元に）と *formatio*（形成すること）に由来する。つまり本来あるべき姿に立ち戻ることであるから、「原状回復」すなわち「直す」という意味を含み、「世直し」と通底する。一般にはルターに始まる16世紀前半の歴史的事件とされることが多いが、実際には17世紀半ばまで続く長期の闘いで三十年戦争の終結にまで至り、個人主義文化や近代国家の成立、資本主義の勃興に寄与した幅広い社会史的現象であったといわれている。

しかし若きルターが95か条の提題をもってプロテストした時、徹底した社会変革を意図していた訳ではない。過激な改革を指導したとされるトーマス・ミュンツァーのような人物とは異なり、ただ贖宥状などを巡る解釈を疑問に付し、神学的議論を望んだのである。だがルターの解釈は、聖域を越えて世俗権力の思惑や政治的・経済的抑圧に喘ぐ民衆の怒りとも結びつき、彼の予期せぬ展開を見せた。そしてドイツ農民戦争に際しては、世俗統治と靈的統治を明確に区分する「二王国論」に立って反乱農民に自制を求めるが受入れられず、急遽「盗み殺す農民暴徒に対して」を執筆して諸侯に鎮圧を訴えた。「哀れな領民達に慈悲を与えよ。可能ならば、刺し、打ち、絞め殺せ」（Luther [1525 : 361]）と。

ルターの対応が神意に添うものであったかどうかは人知を超えるが、これに関連して、ゲーテの『ファウスト』にててくる「人間は努力する限り迷うものだ」という有名な言葉が頭を擡げる。ただしここで「迷う」とされている *irren* という動詞は、むしろ「思い違いをする」といった意味のほうが近い。主人公ファウストは『ヨハネ福音書』冒頭の「はじめ

に言葉ありき」をギリシャ語からドイツ語に訳す場面で、確信して「はじめに行為ありき」に書き換える。確かに行動の人ファウストはたびたび踏み迷う。しかしそもそも行動を起こさなければ過ちを冒すこともない。少なくともルターは、人間は誤るものだと深く認識していた人だった。それゆえには行為義認ではなく「信仰のみ」によって罪を赦され正しい者と認められると說いたのである。

現代ドイツ人にとってもルターは特別な存在なようだ。ドイツZDFのテレビ番組『ウンゼレ・ベストン』で行われた「最も偉大なドイツ人」を選ぶ330万票を超える視聴者投票の結果（2003年11月28日）、旧西ドイツの初代連邦首相アデナウアーに続いて第2位であった。一修道士がヴォルムス帝国議会において——異端として火刑に処せられるかも知れぬのに——自らの良心に従って自説を撤回せず、伝説によれば「我ここに立つ」と言い放ったとされるその姿は、やはり多くのドイツ人を魅了してやまない。

引用文献

Luther, Martin (1525) *Wider die räuberischen und mörderischen Rotten der Bauern.*
In: D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe. Bd.18. (1908), Weimar:
Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger.

5 世直しのために —何者でもなくなってからも話をしよう—

上條美代子

高校の入学祝いに文春新書『僕たちが何者でもなかつた頃の話をしよう』を姪の息子に贈った。ノーベル賞の山中教授、カンヌ映画祭で最高賞受賞のは枝監督ほか各界のトップランナーの講演と永田和宏教授（歌人・細胞生物学者）との対談集である。「みんなキラキラして凄過ぎた。僕はきっと何者にもなれないままだと思う」とクールに語る15歳の彼に、「触発されてよ。なんて軟弱なの！」と呟く。研究会では活字だけでは臨場感が伝わり難く、人や本との出会いを願うが、ローモデルやメンターを求めない時代なのだろうか、と話した。

私は「看護部長100人プロジェクト」に関わり、退職後の元看護部長たちに、推奨の経緯、困難例、やりがい・貢献例、職位からの学び、次世代に伝えたい事等をインタビューしている。100人の知的財産である経験知を形式知として体系的に残すことにより、可視化、現在及び次世代看護部長の支援に資する事を目標にしている。皆イキイキ語りよく整理されている。トップは方向性を見定め、発信、統制・牽引する。退職してもオーラは半端なく、社会や続く人たちの役に立ちたいと願い行動する。職業病かもしれない。

ひとは朱夏から白秋期に入り、所属や基盤の喪失や変遷を経験し深みを増す。そして私である。公務員から民間へ、医療系から福祉・介護系への過程は路線からの脱落とか離脱とか言われた。施設長の職位から「普通のおばさんになります」と還暦退職したが、ハードルが高かった。実績も自分の力と自負していたが、多くの支援や支持をもらい厚生技官や役職のポジションパワーが効いていたようだ。超小柄な身の丈を知って

いたつもりが身の程知らずだった。「くだり坂には またくだり坂の風光がある」とつぶやいてみるが寂しい。竹原ピストルは、「あの頃は…あの頃は…」と、過去の栄光や業績を撫で続け、胡坐をかくことを止め、積み上げて来たものと勝負しようと歌い、私を励ます。つまり過去現在を踏まえ、未来への挑戦、自身への挑戦を促しているのだろう。

高校生の彼もお節介おばさんの私も持続可能な社会をめざす当事者同士だから、先ずは「何者でもなくなつてからの自身への挑戦（あがき）の話」を彼にしてみようと思う。聞いてくれたら特典（フライドチキンとお小遣い）があると釣ってみようか。

引用・参考文献

- 榎本栄一(1998)日めくり法語カレンダー『凡夫のつぶやき』真宗大谷派宗務所出版部.
- 山中伸弥ほか(2017)『僕たちが何者でもなかつた頃の話をしよう』文藝春秋.
- 竹原ピストル(2012)「オールドルーキー」『ROUTE to ROOTS』よしもとアール・アンド・シー.

6 オウム真理教事件で考える「いのちと宗教」 一世直し研究会レビューの「序」として—

北村敏泰

この7月、オウム真理教の一連の事件で、教祖の麻原彰晃死刑囚ら幹部7人が処刑された。「宗教」の名の下に行われ日本社会を揺るがせた凶悪事件は、だが真相が解明されないままだ。国家が人命を奪う「死刑」という形が実行されたことで、特に宗教界には更なる問い合わせが発せられたとも言える。

死刑を「重大な人権侵害」とする日本弁護士連合会が「再審請求中や心身喪失の疑いのあるものも含まれる」と抗議声明を出した。筆者が取材対象として来た宗教界にも死刑制度に反対しこれまで執行の折に批判声明を出した教団が多いが、それは刑事司法体系に関わる見解というよりも、多くの宗教が「いのち」を「絶対的」価値として「殺すなけれ」と唱える、信仰の根幹に基づくものだ。その立場からは今回の処刑をどう受け止めるのか。犯罪事実が確定し被告が極悪だからといって判断が異なるならば「絶対」とは言えないだろう。

一方、津久井やまゆり園事件もそうだが、その「いのち」が全て等しく重みに差はないという宗教的理念からすれば、無差別に多くの人を殺めた者への報いや罰をどう考えるか。ここで「正義」を持ち出すならば宗教的な問題はなお複雑になる。社会的な「正義」ほど相対的で曖昧なものではなく、ある正義や倫理を絶対化するには、その根拠に神や仏を据えるしかないからだ。

他方、松本サリン事件で妻を殺害されながら犯人扱いされた河野義行さんは実行犯たちへの“許し”を語った。「した事をどう反省し総括するかはその人の心の中の問題。恨むという無駄なエネルギーを使って限りあ

る自分の人生を無駄にしたくない」との言は感銘を広げもしたが、重い罪を犯した人間への宗教的な「赦し」はまた違う。一体、誰がどんな根拠で赦すのか。神か仏か。同じ人間である宗教者には、それを受け入れられるのかどうか姿勢が問われる。

事件よりはるか以前に今回処刑された新実智光を取材した際、教祖への信仰を輝く目で語るその態度、同様の信者が数多く集うことに強い違和感を抱いた。彼は控訴審でも地下鉄サリン事件を「救済の一環」と「尊師」への絶対的帰依を改めなかった。若者がなぜこのような宗教に駆り立てられたのか。オウムを殲滅すれば済むことではなく、「いのち」の格差が広がり生きにくい社会を世直しすることが大事だ。逮捕された信者の「(苦悩を抱えた時に) 寺は風景でしかなかった」との供述に危機感を募らせて、寺を地域に開き自死防止活動など様々な社会的取り組みを始めた僧侶もいる。筆者が「いのち」の報道のために宗教を取材する理由もそこにある。

7 音楽というきしみ

滝奈々子

筆者の専門分野は民族音楽学（中米地域）であるが、実生活ではピアノ講師も務める。世直し研究会では、日々の関心事を分かち合いながら、前進するという営みが行われている。本稿では、わたしと音楽の軌跡に触れながら、音楽と関わる際に生じるきしみがいかにして「世直し」と繋がる可能性があるのかを探りをしながら論を進めたい。

日本では、そろばん、英会話と並び、ピアノが定番の習い事として位置付けられ、わたしも習い事の先生としてピアノを教授している。しかしこれだけ、アカデミズムのなかに身をおくと、自分がピアノの先生であることを隠蔽したい気分になってしまうのである。学術界においては、音楽（音）の民族誌を語ることに焦点を当てる一方で、ピアノの先生としてときには音楽の文脈を排除しているというあり方が、アンバランスなような気がしてならない。何かきしみを感じる。

わたしは親の西洋文化中心思想教育の結果、中学校から大学院まで生粋の西洋音楽専門学校でピアノを専攻していた。小・中学校時は何の疑問も持たず、演奏の上達を目指し、1日に8時間ほどの練習を繰り返していた。しかし、高校の途中から西洋音楽のみを学習することの偏り、危うさを感じ始め、特に平均律など何も世界共通言語ではない様な音律を叩き込まれることの違和感はとてつもなく苦痛だった。

そして、その頃から音楽を、「民族音楽学」だとか「西洋ピアノ音楽」などと無意識的に分断してしまうわたしの思考は脆弱すぎると危惧はじめた。音楽を地域やジャンルで細分化することなく、世界の人間の活動として広い地平に置くという考え方方が民族音楽分野では共通する概念であることを知ったのもこの頃である。

大学へ入り、その思いをピアノ教授にぶつけると、一笑に付されてしまい、とにかく、地域やジャンルに音楽に左右されない音楽を学びたいと痛切に願いつつも、ピアノ科を修了した。その後、国内外の大学院でいわゆる民族音楽学を学ぶ機会を得て、博士論文を中米グアテマラのマヤの人びとの音楽事象についてまとめ、現在大学では民族音楽学領域の研究員を務めているが、しかしあたしの中に深く植え付けられたピアノ奏者の自己は、民族音楽学を学べば学ぶほどに強く際だたされる。

世直し研究会の多角的なコミュニケーションにおいては、音楽に対峙する際に少しづつ植え付けられたきしみを閉ざすのではなく、自問しつつも開いた問い合わせとして紐解いていきたい。

参考文献

徳丸吉彦（2016）『ミュージックスとの付き合い方：民族音楽学の拡がり』左右社.

8 いのちをぼうにふらせるな！ —反・生命の物象化—

林田雅至

この数年間外国人技能実習生問題を取り巻く労働環境・労務管理の点から、監理団体などへの批判がメディアを通じてなされているが、実は一的な衛生環境・健康管理については未だ大きく取り上げられることはない。

この数年間、首都圏などを中心に、全国規模で見られる、アジアの結核高度蔓延国諸国（ネパール、ミャンマー、ベトナムなど）からの技能実習生らに対する「監理団体」による健康・衛生管理、労働環境・労務管理の不徹底に起因する「感染症（結核）発症」という喫緊の課題について、今後大阪においてG20や万博誘致事業の展開に鑑みた施策を講じる必要性がある。

大阪市保健所によると、大阪府は府内の外国人技能実習生の世話をする「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」に対するアンケート調査を過去に実施しており（複数団体は回答せず）、今回、さらに大阪府が「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」に対する「健康教育資料」を作成中である。

「関西SDGs（持続可能な開発目標）プラットフォーム」感染症関連の取り組みとして、今後その「健康教育資料」の内容に沿って、「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」への資料送付後、健診・患者発生時の対応などについて、「努力義務化」—実施せずをよしとする悪慣行—せずに、実際に実行されているかどうか、公益財団法人「大阪公衆衛生協会」が行動主体として確認することになった。

この「努力義務化」については、これまで外国人労働について、雇用

現場で日本人と外国人の間でコミュニケーションを円滑に図るために就業時間内に、互いの言語を学び合うことが法的に努力義務化することが雇用者に求められたものの、それは企業間で原則実施しなくてよいという仲間内の約束事となっており、労働災害においても、外国人に不利にならないために通訳者の存在が不可欠であるはずなのに、それもやはり「努力義務化」する悪慣行が横行している。

すでに外国人技能実習生の結核発症問題で、通訳者の手配が後手に回っている事実が散見される。本来ならば、「監理団体」が労働者として受け入れる際に、通訳者の配置に大いに配慮すべきところである。現代の「山椒大夫」たちにどう立ち向かうか、今後適切な対応が待たれる。莊園領主が経済外的強制によって農民たちを厳格に処罰する封建社会にあって、説話の中に存在する「厨子王」によって、また応仁の乱世、「世直し」できぬ小さき民人、庶民たちは一寸法師や桃太郎などの登場する「御伽草子」の語り口を通して溜飲を下げるを得ない時代は今は昔である。非日常的な論理ではなく、外国人技能実習生問題は、現実世界の中で、グローバル・スタンダードな解決の糸口を見つけるものである。

参考文献

結核予防会疫学情報センター：結核発生動向概況・外国生まれ結核（結核年報2017）：<http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/toukei/nenpou/>（2018年7月18日閲覧）

9 「なおす」と「しまう」

宮本友介

「世直し」という言葉は、字義的には似た「社会改良」(social reform)といった言葉とは違い、堅苦しい漢語ではなく、どこか純朴さを感じさせる和語だ。これは常に翻弄される側から発せられるということに起因しているのではないだろうか。

「世直し」といえば、江戸幕府から明治政府への体制転換へとつながった、いわゆる「世直し一揆」が想起されるが、その矛先は新旧両体制すなわち翻弄する側へと向けられていた。「世直し」は支配階級が取って代わるということを含意しないのだ。また、近世以前においては、「世直し」は天災などの凶事を打ち払うための呪いのことを指しており、「^{まじな}驗直し・縁起直し」といった言葉と同義であったらしい（須藤〔2004〕）。天災のような「どうしようもない相手」を前にしては、飾り立てている閑はなかったのである。こうした「世直し」の元来もつ呪術的な響きも忘れてはならないだろう。

ところで、西日本の方言では「直す」という言葉を「しまう」と同じ意味で用いることがある。「直す」の語義は「元の（良好な=正しい）状態に戻す」であるが、たとえばある道具がその機能を果たしうる状態に戻すことであれば「修理する」という意味になり、また仕事を終え安置された状態に戻すことであれば「しまう」という意味になる。

「しまう」といえば、いがらしみきおさんの漫画作品「ぼのぼの」に登場する「しまっちゃうおじさん」だ。主人公ぼのぼのは、「ジリツできないとどうなるんだろう？」と考えているうちに、しまっちゃうおじさんに「どこかにしまわれてしまうんだろうか」と妄想する。ただし、しまっちゃうおじさんは決して「悪い子だからしまっちゃおう」とは言わ

ない。何が正しく何が悪いかは、ほのぼのの妄想の外側に置かれている。「世直し」を唱えるときにも、ほんの少しだけほのぼのと同じ気分になる。「どこかに直されてしまうんやろか」と。

参考文献

- 須藤隆仙(2004)『世界宗教用語大事典』新人物往来社.
いがらしみきお(1988)『ほのぼの3』竹書房：37.
池田光穂(2015)「しまっちゃんおじさんのこと：超自我(S. Freud, 1923)とのコミュニケーションデザイン」：<http://osku.jp/u0093>(2018年7月17日閲覧).

10 質問をデザインする

山森裕毅

授業やイベントなどで「何か質問ありますか」とたずねると居心地の悪い沈黙が流れ、ときにはそのまま授業やイベントが終わってしまう。自分も質問できないときがあるので、そのことで学生や参加者を責めるつもりはない。逆に「なぜ質問ができないのか」という疑問が湧いてきて楽しくなる。

学生に聞いてみたところ、質問しない・できない理由は次のようなものである。

- (1) 人が多いところだと恥ずかしい／遠慮してしまう／バカにされそうで怖い
- (2) 頭を整理するのに時間がかかる
- (3) 聞きたいことがない／疑問がわからない／好奇心がない
- (4) 質問しないと授業が早く終わるから

ここで掘り下げてみたいのは(1)である。確かに質問するというのは頭の良し悪しが露わになる場面であり、失笑・嘲笑される可能性もあってプレッシャーが高い。このプレッシャーを乗り越えるにはどうすればいいのだろうか。端的に答えるなら、バカにされない質問を作れるようになればいい。つまり良い質問ができるようになればいいのである。しかし良い質問が何かを私たちは知らない。それもそのはずで、そもそも私たちは質問に答えさせられるばかりで、質問をするトレーニングを受けたことがないのだから。私たちの質問力は大学教育に至ってもまだ未開発状態に留まっている。

では、良い質問とは何だろうか。私が使っている基準はこんな感じである。

・良い質問とは、

- (1) 答えが出せる質問である。私たちの質問が失敗するのは多くの場合、相手が答えられない質問をしてしまうときである（答えられない理由はさまざま）。
- (2) 良い答えが出せる質問である。質問はその答えを良くも悪くも限定する。質問を受ける人が良い答えを出せるような質問は良い質問である（答えに失敗することもありうるが）。
- (3) 自分の知識や認識が拡張（更新）されるかもしれない質問である。情報収集的な質問や確認のための質問も必要だが、その答えを聞いて肯定的な驚き（発見）があるような質問が良い質問である。
- (4) 自分だけでなく、質問された人も含めたその場全員の知識や認識が拡張（更新）されるかもしれない質問である。その質問を共有した人々に肯定的な驚きがあるような質問が良い質問である。

このように良い質問の基準を定めることができれば、バカにされるかもしれないという漠然とした不安に打ち勝つことができるようになる……かもしれない。

第2集 「世直し」ノオト（2018年度・冬）

第2集では、第5回から第9回までの研究会（2018年9月～2019年1月）における対話から編み出された10編のエッセイをご紹介します。

この期間は、以下のように読書会を中心に行いました。

第5回（2018年9月26日） 森重昭著『原爆で死んだ米兵秘史』（潮書房光人社、2016）を読む

第6・7回（2018年10月24日、11月28日） 永野三智著『みな、やっとの思いで坂をのぼる：水俣病患者相談のいま』（ころから株式会社、2018）を読む

第8回（2018年12月26日） 熊野以素著『九州大学生体解剖事件：七〇年目の真実』（岩波書店、2015）を読む

第9回（2019年1月23日）「世直し」ノオト（2018年度・冬）合評会

水俣病患者相談に関する図書を取り上げた第6回・第7回研究会に関連するエッセイとしては、No.6「支援の「立場性」と世直し」およびNo.9「永野三智『みな、やっとの思いで坂をのぼる』出版記念トークショーを企画して」を、また熊野以素さんに九州大学生体解剖事件をめぐる著書をご紹介いただいた第8回研究会についてはNo.4「仕方がなかったなどというてはいかんのです」をご覧ください。

1 欲待の共同体としての大学の〈理想〉と〈現実〉

池田光穂

「使徒ヨハネ」の福音書には、「初めに言葉ありき」という不思議な言挙げに始まり、他の3つの福音書一文言に共通点が多いのでマタイ、マルコ、ルカを共観福音書という一にはない、イエスの言葉をより多く伝え、「神は愛」というスローガンでイエスの教えを今日に端的に伝え、生前のイエスの奇跡の行状がヴィヴィッドに描かれるなど独特の雰囲気がある。ヨハネはイエスが処刑される時に唯一立会い、「最も愛された弟子」と言われた。福音書作家としてのヨハネは師の書き方において特異的であった。ヨハネの福音書が唯一伝える有名なシーンがある。最後の晩餐の前に、弟子たちが恐縮して遠慮することを諫めてイエスは積極的に彼らの足を洗う。足を洗った後に「私はお前たちの先生だ」と弟子に呼びかける。そして先生が弟子におこなったことを、今度は弟子同士で互いに足を洗う、つまり、お互いに愛し合い、欲待すべきだと垂範する。イエスは弟子たちを慈しむことを通して、今度は、その慈しみを君の弟子に分かち合うことの重要性を述べる。さて、イエスとその弟子たちは今でいう新興宗教の教祖とウルトラマイナーな数少ない弟子たちである。いつも腹をすかして布教の途に就いていた。しかし、どんな身分の人にも真摯に対話をしようとするイエスに魅入られた人は、貧しいなけなしの食料と酒を提供して、イエスの話に耳を傾ける。師匠と弟子たちは大食らいだとも記される。初期の布教の姿を描いた図像には、横になつてくつろいで会食する師匠と弟子たちの姿が描かれている（ルドルフスキイ『さあ横になって食べよう』鹿島出版会、1999）。イエスと使徒たちの情熱を支えていたのは、彼らを欲待した貧しく、清らかな生活を送っていた市井の人たちだ。当時の宗教界の長老や権力者は、このよ

うなアーナキーなカルト集団の活動を異端視し、監視し、そして捕縛、審問しようとする。その度に、パトロンに対して礼を言い、イエスと弟子たちはそそくさと出奔する。よい教えをより多くの人に伝えるためには、このような逃走は意味のある行動になっていた。

僕たちの大学では、学生に教室に居続け教員の話に耳を傾け、図書館で本を読み、フィールドデータをパソコンに入力し、研究論文を書いて、学友よりもよりよい成績を残して、キャンパスから旅立ち、立派な社会人になれと訓育する。しかし、これはイエスが弟子たちに言った、厄介な迫害者には逃げることが一番だという教えとは真逆である。矛盾や厄介なことに出会ったらとにかく辛抱して続けることが重要だというのがキャンパスの掟だとすると、イエスの教えは、困難なことに直面したらそこから一度退き、再挑戦のために戦力を温存せよということだ。逃げてこそはじめて、態勢を取り戻して復活することができる。今日の大学教授に、道行きで泥にまみれた弟子たちの足を洗い、歓待（=心温まる教育）した上で、同じことを後輩におこなうべきだ、と自ら垂範する者はいるだろうか？ 厄介だからここはひとまず一緒に逃げるとするか！という先生はいるか？ 僕が理想とする大学が、先生と弟子たちの眞の友愛の共同体になるためには、まだまだ幾多の課題があるようと思える。

2 『飼い主』ではなく『ご家族』と呼ぶこと

今井 泉

獣医師資格を得て20数年になる。獣医師になってから、私の現場は街の動物病院であり、治療や予防の対象は犬や猫、時には小鳥やハムスターといったいわゆるペットと言われる動物である。獣医師として街の動物病院を現場としている私の変化について述べる。

獣医学部に在学中、治療対象の動物は『患畜』と呼ばれていた。獣医師免許は動物の保健衛生、畜産業の発展と公衆衛生の向上を目的に農林水産省が認可しており、畜の文字は家畜、畜産動物を意味するものだと思っていた。とは言え、大学付属動物病院には馬や牛豚以外に犬や猫も来院する。それらが『患畜』と呼ばれていることに何も違和感はなかった。

卒業後、大阪市内のペットの診療を対象とした病院で働きだすと、『患畜』という表現はNGワードといった認識にかわっていった。畜の文字が畜生といった相手を卑しめる表現に使われることがあり、飼い主が気を悪くするのではと感じたからだ。在学中は飼い主のことを、『畜主』と呼ぶこともあり、これは多く来院する畜産農家のことを指した表現であった。働きだしてからは畜主さんではなく飼い主さん、来院する動物のことは名前で呼ぶようになり、飼い主さんに質問するときは『子』という表現を使うようになっていた。例えば「この子が下痢をしだしたのはいつ頃ですか……」などといった表現をする。飼い主のことも、連れてきた方が女性の場合は『おかあさん』などと表現している。それが日常の診療であり何の違和感もなかった。

ある医療者と話をしたときに「今井さんは動物病院に受診している動物のことを『子』って表現するのですね」と指摘された。その指摘は私

にとって不思議に感じるものであった。さらに、犬や猫をまるで人の子供のように表現していることに対して、その医療者はさらに言葉を続けた。「今井さんの話を聴いていると、受診される飼い主さんがまるで小児科に子供を連れくる親御さんのように思えてきた」とおっしゃった。『患畜』という表現に違和感をもち『子』という表現を抵抗なく使い、今ではその医療者に指摘されたこと自体も不思議に感じる。そういう変化が起きていることへの気づきがあった。動物だけでなく飼い主の気持ちに寄り添い、飼い主も動物と一緒に診るスタイルを目指す今の自分がいることを再認識させるものであった。

近頃は、ペットを「大切な家族である動物」と言われることもあり、『飼い主』から『ご家族』に表現を変えペットの診療をする獣医師の存在がある。私は診療するペット全ての飼い主を『ご家族』と呼ぶことに抵抗を感じる。私にとっての家族の意味するものは何か、「家族としての動物」とは、また診療の現場で関わる「家族としての動物」とは？ その問いを持ち続けて現場にいるからである。

3 「ネコの権利」と「ヒトの権利」

海野 隆

人類は人種差別（racism）、性差別（sexism）などを克服し、人権の樹立のために戦ってきた。この理念を動物に対しても適用し、動物差別（speciesism）に反対する潮流がある。これは「アニマルライツ」と呼ばれ、畜産や動物実験、毛皮、動物園、水族館、競馬、サーカスなど、動物の自由と生命を奪うヒトの行為に反対する。時として、動物飼育施設を襲撃し、動物たちを「解放」するなどのテロ行為を働く。このため、彼らは公安当局からマークされている。

世の中にはネコ好きの人とネコ嫌いの人があり、その対立は深刻なことがある。ネコ好きは、野良ネコたちが飢えて体調を崩し死んでいくことを見かねて、餌やりをする。ネコは出生後、1年弱で性成熟し、年に2～3回出産する。そして1回に数匹の子供を生む。出生した子ネコがすべて育てば、ネズミ算ならぬ「ネコ算」でどんどん増えてしまう。だから、ネコ嫌いの人は、発情期の鳴き声、糞尿の悪臭などのネコの呪縛に、気も狂わんばかりだ。賢明な自治会の役員は、ネコ好きとネコ嫌いとの対立を仲裁するために、不妊去勢手術を行うことを条件に、餌やりを認めるという「落としどころ」を見出す。これは、野良ネコを「地域ネコ」として認めるが、最終的に公園や地域からいなくなることを前提にしたものだ。この不妊去勢手術のプロセスはTNRと呼ばれ、「Trap／捕獲し、Neuter／不妊去勢手術を行い、Return／元の場所に戻す」を意味する。

ところで、旧優生保護法に基づき行われた心身障がい者への強制不妊手術が人権侵害であるとして、国の責任が問われているが、同様にアニマルライツの活動家の中には、上記のTNRはネコの「生殖の権利」の侵害だと非難する人がいる。一方で、動物福祉愛護にはアニマルライツに

対し、「人と動物との共生」をめざすという潮流もある。これは動物が人間と、時間・空間を共有して生きていくためには、その行動の制限もやむを得ないとする。現行の動物愛護管理法はこの考え方に基づいている。TNRは「人と動物との共生」の理念に基づくものだ。

動物が人間社会の中で生きていくには、アニマルライツのような動物中心の思想は、理想主義的で現実的ではないと私は考える。そして畜産や動物実験、動物園を認める「人と動物との共生」を支持する。アニマルライツセンターの勉強会（2018年10月大阪）で、私はTNRに対する是非を質問したが、驚いたことに肯定的な回答を得た。この団体は、畜産に関しても飼育条件の改善を求め、動物実験についても化粧品に関しては廃止を追求するものの、医薬品に対する反対運動は行っていない。

このように、アニマルライツの活動家も「原理主義」から、現実的な路線をめざしつつあることが示唆された。引き続き「人と動物との共生」の旗のもとに動物の福祉を追求していくことに期待したい。

4 「仕方がなかったなどというてはいかんのです」

岡野彩子

昨年2018年12月の第8回世直し研究会に『九州大学生体解剖事件：70年目の真実』（岩波書店、2015）の著者である熊野以素さんをお招きました。この戦争末期のショッキングな出来事—九州大学医学部による米軍捕虜の生体解剖事件（1945）—は遠藤周作の小説『海と毒薬』（1957）の題材ともなった。この生体実験に強く抗えずに関わった若い医師の事件当時の苦悩をテーマとした同作品は、1986年に熊井啓監督によって映画化され、ベルリン国際映画祭では銀熊賞に輝いた。しかし現代では忘れ去られた、いや熊野さんの言葉によれば、「忘れさせられた事件」である。

熊野さんの伯父で外科医の鳥巣太郎氏（1907–1993）はこの実験手術に不本意ながら関わることになった。たしかに可能なかぎり参加を避けるという消極的な形ではあったが、抵抗したにもかかわらず、戦後の〈横浜裁判〉で首謀者の一人として死刑判決を言い渡された。再審で懲役10年の減刑を勝ち取るが、満期出所後も心の奥に罪の意識をかかえつつ残りの人生を町医者として過ごした。命を救うはずの医者が、戦時下の〈非日常的状況〉においては何の疑問もなく捕虜の人体実験を行い、むしろ反対した人が〈異端〉とされ、真実が闇に葬られる。「記録は消され、語る人は退場してゆく。戦争による日本人の被害は伝えられても、加害行為を伝えることはむづかしい」と、熊野さんは語る。だからこそ、今真実を明らかにし、人の心を破壊してしまう戦争の恐ろしさを伝えることが大切だと。

フィクションの形をとった『海と毒薬』が読者に突きつけるのは、〈日本人とは何ものか〉という問いである。あのような生体実験は、ルース・

ベネディクトが指摘したように、〈恥〉の意識だけあり、神なく〈罪〉の意識のない日本人であるがゆえに可能なのか。他人に知られなければいかなる背徳行為もさほど痛みを感じず、また罪を繰り返してしまうのか。だが遠藤周作は20年後に続編とされる『悲しみの歌』（新潮社、1977）を書き、事件の30年後を舞台に、若き日に実験に関わったあの医師が出所後も世間から正義の名の下に糾弾され続け、自死する物語を描いた。そして裁く資格があるのは神だけだ、天国であの人の涙を誰かがふいでいる、と神の赦しを祈るかのように綴っている。人間の生存の不条理一生の〈現実〉は善悪二元論的には捉え難い—や人間の弱さを知り、人間の本質そのものに関わる悲しみを味わったことがある者なら誰でも、裁いている人たちも、裁かれた者と同じ状況に置かれたら、そう自分だって、同じ犯罪に手を染めたかも知れないと思うのではないか。

しかし鳥巣医師は後に、強く抗わず実験を阻止しなかったといいういわば〈非行為という罪〉に対して、事件から31年目に受けたインタビューできっぱりとこう述べた。「どんな事情があろうと、仕方がなかったなどというてはいかんのです」（上坂冬子『生体解剖：九州大学医学部事件』毎日新聞社、1979）。それは、裁判初期には自分の罪をはっきりと認識していなかった鳥巣氏が、苦しみを背負って生きた長い年月をかけ、それを自らの内で受け取り直し、自らの弱さと向き合うことによって、發せられた言葉だった。まるで私たちに思いを託すかのように。

5 責任

上條美代子

世の中には「責任」に関連した言葉が氾濫していてネガティブな印象も強い。責任を感じる、責任を負う、責任を取るとはどういう事なのかを考えた。ところで、自分はどうだったのか。

高齢者施設でケア統括責任者の任にあった時期に誤嚥事故があった。Aさん（アルツハイマー型認知症を患う高名な80代後半の女性）が介助で昼食中に、介助者が他の方に呼ばれて席を離れた間に手づかみで粥などを口にし、誤嚥した。救急処置で一命をとりとめ入院したが、レベルダウンを來した。家族（キーパーソン：50代の娘）の怒りは大きく、ケアの質保証に関する債務不履行の「責任」を激しく問い合わせ、訴訟も辞さないという姿勢であった。

過去の医療事故例では当事者の個人責任で收拾されることが多く、それだけは避けたいと考えてはいたが、私自身が矢面に立つのは想定外であった。開設して3年目、ケアの責任者として教育、管理・監督に注力していただけに「お前は何をしていたのか」「したと言えるのか」と、負い目はないものの自責の念は強かった。予見はしていた。そもそも離れてはいけないが、もしも離れるならば飲食物を届かぬようにする等安全配慮、危険回避行動をとるべきだった。認知症の人の思いがけない言動は想定すべき。マニュアルもあり教育研修も徹底していたが穴があった。通常は行われていても、たまたまあれ1回でも抜ければ「いのちの砂時計」は滑り落ちてしまう。

顧問弁護士の支援を受けながらカルテを開示し、状況説明を続けた。その過程を通して次第に理解が得られ、Aさんの経過が安定された事もあってか、訴訟は取り下げられ示談に至った。慰謝料の有無は不明。A

さんは他の施設へ移られた。私は折に触れ娘さんにお電話やお便りを差し上げ、時にAさんを見舞い続けた。

職場では事故内容を説明すると共に仕組みを見直した。職員の「知・情・意」の実力は様々で、濃淡、深浅があるから方法論を学ぶだけでは限界がある。自ら業務を通し学んでゆくために個々にどんなダメージが考えられるか、それを最小限にするために自分が取り得る予防行動はあるのか、などを研修に組み込んだ。持続可能な仕組みとまではいかないが、カンファレンス等の検討の場で発表した。合言葉は「とっさの時こそ安全配慮、危険回避行動を取れ」。

5周年の際、Aさんやご家族を来賓として招き、未熟な私たちの指南役の方と披露させて頂いた。個々のケア経験を丁寧に統合、構築している優良ホームという一定の評価を得られるようになっていた。これからも「失敗はありません、お任せください」とは言い切れない。ただ、失敗を含めた経験からの学びが滋養となり組織風土を醸成してゆくと考えるのでご支援を賜りたい、と挨拶した。

現場にあって共感や想像力を持って想定の枠を広げても不可抗力もあり得る。最善を尽くせる人財、家族を巻き込むチーム作りに努めたのは、法的責任は別として道義的責任からだった。

6 支援の「立場性」と世直し

北村敏泰

水俣病の原因がチッソの廃水であると、発生から遙かに遅れて政府が公式見解で認めたのは1968年。それから50年が経った2018年、いろんな論議や考察が進んだが、最も重大なのは今なお10万人を超える患者たちが苦しみの中にいる現実だ。現地で被害患者の相談を受ける永野三智さんの著書『みな、やっとの思いで坂をのぼる』を「世直し研究会」で取り上げ、著者のトーク会にも参加した。彼女は「水俣だけでなく理不尽な目に遭っている人たちに共通する、どんなところにもある苦悩」と話し、だからこそ水俣病をめぐる重い思索と論議はこの社会の様々な問題にも通底する深みを持つ。

全国にも広がる被害者の中には今なお認定されず何の補償もない人も多い。同様に有機水銀の中毒でも劇症患者に比べて手足のしびれなど慢性症状の患者が「詐病」と白眼視され、認定されれば「補償金で食べている」と非難される。福島第1原発事故の状況も同じで、故郷を破壊された人々は補償を受けたか受けないかで、あるいは避難するしないを巡って溝を生じた。このような被害者同士が対立させられる構図によって、加害企業であるチッソや東京電力、国が批判を免れることはあってはならないだろう。

記録映画『しえんしゃたちのみなまた』（2018、加藤宣子監督）では、地元産の魚を行商する支援者が「自分も食べて一蓮托生」と語る場面もあり、支える姿勢や同時代に生きる者としての「立場性」が問われている。永野さんは「水俣病を生んだ社会に自分も生きて来た」責任を口にした。認定運動指導者だった漁師の緒方正人さんは『チッソは私であった』との著書を出し、申請をただ一人取り下げた。魚や人間や生き物のいの

ちを犠牲にして経済的欲望を追及した挙句に水俣病を生んだ社会で、企業にも国、行政のどこにも責任主体としての「人間」がいないことを見抜き、それは自らの事でもあると悟ったのだ。

これらは、人間存在の意味やいのちの重みを見据え、それを抑圧する社会構造の根本を射る長年にわたる闘いの中であったからこそ、被害者や支援者たちによって獲得されたラディカルで根底的な視座であり、宗教にも通じる深みを持つ。原発問題でも、福井県で40年以上も反対運動を闘って来た地元の中嶋哲演住職は再稼働に際して関西電力本社前で断食活動をしたが、それは「抗議のハンスト」を超えて「原発を生み依存する社会を許している自身の修行」だった。

だが、このような「やられた側」の深い自己省察をもって加害企業や国・県が罪と責任から逃れることができない。水俣の地元で関わり続け『苦海浄土』を著した作家石牟礼道子さんは、悩みながらも支援に加わる、あるいはただ一緒に苦しむ「共苦」を「もだえ加勢する」と表現し、運動が目指すものを「じゃなかしゃば（もうひとつの世）」と語ったが、それは苦難に満ちた現世からの「浄土」や「天国」への逃避という意味ではなく、紛れもないこの現実の社会を「もうひとつの世」に改造することに違いない。永続的世直しが求められている。

7 真の男女共同参画のために必要なこと

熊野以素

2018年政治分野における男女共同参画の推進に関する法律が成立した。しかし、法律の制定だけで世界最下位グループにランキングされている日本女性の社会的地位は向上しない。自分史を振りかえってみて思うところである。

私の母は高等教育を受けていたが、活動範囲は台所を中心とした半径3.3メートルに限られていた。私は母親世代に反発をして「自立した女性」を目指した世代に属する。私達の最大の壁は就職であった。ほとんどすべての企業が事務補助以外の女性を採用しておらず、結婚退職が前提で、30歳定年制が当然とされていた。大正時代、与謝野晶子が女性に開かれたわずかな職業として「教師、看護師、タイピスト」を挙げているが、状況は50年間まったく変わっていなかった。多くの女性がこの壁の前に「家庭の主婦」になる道を選ばざるを得なかった。私はわずかな選択肢の中から教師を選び35年間働いた。仲間とともに「私たちが頑張れば、きっと本当に平等な日が来る」と信じて。

さらに半世紀がたった。状況は改善したであろうか？　この間男女雇用機会均等法の制定があり、働き続ける女性は「普通」になったように見える。しかし非正規雇用率は男性21.3%に対し女性55.8%。賃金は男性平均521万円に対し女性平均280万円。格差は私の現役時代とほとんど変わっていない。企業のトップは男性、大臣も女性はわずか2人、女性議員の割合は13.7%にすぎない。

なぜこのように女性の地位が低いのか？　大きな原因是社会全体に依然として根強い性別役割分業論である。内閣府の男女共同参画に関する世論調査では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方

方について4割の人が賛成と答えている。70年代「僕食べる人」で批判を浴びたマスコミも保守勢力の台頭とともに再び主婦礼賛コマーシャルを流している。

このような状況の中で家庭を持ち働く女性の多くは「仕事と家庭の両立」という課題を課せられる。私はかつて女性議員の座談会に出たことがあるが、そこで話題になったのは、「女性議員は選挙演説に立つ前にどれだけの家事をこなさなければならなかつたか」であった。

若い女性の中に専業主婦願望が強くなっているというが、ある意味無理もない。学校教育の中で男女平等を教えられて育っても社会に出たとたんにガラスの天井にぶつかってしまうのである。

さらに最近は憂慮すべき事態が起こっている。現政権を支えている日本会議系の道徳教科書はあからさまな性別役割分業論を展開している。3歳児神話を振りかざす「親学」の活動も活発である。

「日暮れて道遠し」の感が否めないが、気を取り直して、眞の男女共同参画実現のために必要なことを3点述べる。（1）家庭、学校、社会特にマスコミにおける性別役割分担意識解消、男女共同参画の取り組みの推進。（2）男女ともの長時間労働の解消。（3）すべての子どもに保育の権利を保障すること。

8 「世直し」は日常の細部から —日々の生活に潜む「生命」の危機—

林田雅至

天災の絶えない日々に見舞われる日本列島では、政府がいう「国土強靭化施策」が展開され、防災、減災対策、訓練が日常化されている。しかし現実は思い通りにはいかない。実際には、日常生活でちぐはぐな出来事が起こっている。2016年10月21日に鳥取県中部を襲った地震の余震で、私の職場のあるビルのエレベーターが停止したことがある。当時、そのビルの管理会社の担当者は不在であった。そこで私は、このビルには守衛さんが常駐する詰所があるので、そこに連絡した。守衛さんはエレベーター管理会社に連絡し、その管理会社が故障の対応に追われることになった。守衛さん曰く「あの程度の余震で停止しますかね?」といぶかしがったが、やはりその事実は曲げられない。

私は法律で定められている「建築物環境衛生管理技術者」はどう対応したのか興味をもった。そしていろいろと照会先をあたり、ついに「建築物環境衛生管理技術者」の所属する担当会社の幹部の方と面談することができた。その際に、その会社について興味深いことをお聞きした。この会社は、1960年代のはじめに先代の社長さんがトイレの清掃業務から起業したのが始まりだという。1970年に大阪で開催された万国博覧会で、テーマ館の一つである米国館の清掃を委託されたことが転機となり、一気に業務規模が拡大した。それ以後は、羽田および伊丹空港の清掃事業に加えて機内食の食器洗浄も請け負うことで、会社はとうとう全国展開が可能になったとのことであった。

ただし日本では、そのような清掃などの管理業務には、単なる「衛生的環境の確保」だけでなく、その法令を実施するための、建築物内で生

じる健康問題に関する基礎医学、生物学、化学等の自然科学全般の知見に基づいておこなわれることが規定されているという。そもそも「衛生」という言葉は、単に清潔にするというのではなく、本来「生命を衛る」ことであり、御案内の通り、洪庵門下で、明治時代に初代国家衛生局長を務めた長與専斎の Hygiene からの翻訳語であることはよく知られている。しかし現在「衛生」という言葉は、「美觀清潔」が強調されるあまり、本来の「人々の健康を守る」という意義が見失われているのではないか。経済的な収益をあげることも、この大切な衛生管理という実践の本来の意味を忘れ去ることにつながってはいないか。

私はこの数年間、国際交流センターなどの指定管理モニタリング審査に関わることが多いが、そこでは国家資格・衛生管理者を常駐させない事例があったりする。指定管理が継続される場合には、次期年度からは常駐を義務づけるよう規定している。私が関わったモニタリング調査審査で、行政にも指定管理会社にも「美觀清掃」への傾斜姿勢を改め、本来の「衛生」業務に戻るように、私は厳しく注意を呼びかけた。この経験を通して本来の「世直し」とは、私たちの働く職場における細部の衛生の点検から生まれることを、改めて感じた次第である。

9 永野三智『みな、やっとの思いで坂をのぼる』出版記念トークショーを企画して

牧口誠司

水俣に「水俣病センター相思社」という患者支援の団体があり、そこで働く永野三智さんは、10年にわたって患者相談を続けている。その永野さんが2018年9月に『みな、やっとの思いで坂をのぼる—水俣病患者相談のいま』（ころから株式会社）という本を出版され、それを記念して、京都・大阪で2018年12月21日から3日間にわたってトークショーを行っていただいた。

普段の永野さんは、陽気で気さくなお姉さんという雰囲気なのだが、水俣病について語る場面では、とにかく長い文章を綴り、語る。今回のトークショーでも、一つの質問に対し10分、20分という時間をかけて永野さんの思いが語られていったので、司会の私を大いに焦らせたものである。けれどそれは、冗長な一人語りというものではなく、患者さんの話に心震え、あるいは行政の冷酷な対応に憤りを感じ、やむにやまれぬ思いで紡ぎ出されるものなのだろうと感じた。真実は、切り貼りされた単なる事実の羅列の中にではなく、息の長い言葉が織りなす物語の中にあるのではなかろうか。

水俣は、教科書にも載っていて、おそらく日本で教育を受けた人なら誰でも知っている有名な場所である。けれど、その「知」は現実の社会とは切り離され、出来事は私たちの中で過去のものとなっているのではなかろうか。水俣でどんなことがあったのか、今どんなことが起こっているのかを詳しく知る人は少ない。この本を読んだ人や、永野さんにインタビューした人は、ほとんど例外なく「水俣病は、もう終わったものだと思っていました」と言う。

今回のトークショーで、水俣と福島、あるいは沖縄との共通点について取り上げようかとも考えた。この国で権力を握る人々は、水俣から学んだ「人を黙らせ、諦めさせるノウハウ」をあちこちで応用していると感じたからである。しかし、当日話を聞きしているうちに、永野さんにそうした大状況を尋ねることに意味があるとは思えなくなった。一人一人の患者さんの言葉を聞き、それを全身で受け止め、それを自分自身の言葉で語る永野さんの声を、その場に参加した一人一人が、自分の思いで受け止めればいいのではないかという思いが募ってきたのである。

水俣病に関しては、認定を求めていまだ何件もの裁判が行われている。未認定患者の方々は、「水俣病と認めてほしい」「認定されるのは怖い」という矛盾した思いの狭間で揺れ動きつつ、思いを聞いてもらうために、永野さんに会うために、相思社への坂をやっとの思いでのぼっていく。永野さんは、「ただ、話を聞くことしかできない」と言うが、そのことが多くの患者さんたちにとってどれだけ励ましになっていることか。

21日の同志社大学、22日のカライトモブックス、そして23日の大阪と、永野さんはそのたび違う切り口で語ってくれた。日々新しい発見があった。当事者とは誰か、自分が患者と関わるのはどういう意味があるのかを自らに問い合わせ続ける彼女の言葉は、私にも私自身の課題を突きつけてくれた。まさに濃厚な3日間であった。

10 マジョリティ・ブルー

山森裕毅

社会の作られ方によって不当に低い立場に置かれ、そのことによって差別などの生きづらさや苦しみを被る集団や人々は、数の多少にかかわらず「マイノリティ」と呼ばれる。私が接する機会が多いのは精神疾患のある人たちであるが、その他にもセクシャルマイノリティの人々や部落差別を被る人々など、多くの人々がこの立場に置かれて暮らしている。

マイノリティへの社会的対応の仕方はいくつもあるが、そこで取られる主要な戦略のひとつは〈社会的ネットワークから分断し、問題を周縁的なもののように扱い、社会的無関心へと追いやる〉というものである。この影響力は大きく、マイノリティの存在は目を向けられないものにされる。こうした戦略に抵抗するために用いる戦術のひとつが〈マイノリティの人々の語りを聴く〉ことであり、また〈語り合いを通して仲間になっていく〉ということである。素朴ではあるが基本的な実践だといえる。

しかしこの実践のなかで厄介なことが生じる。マイノリティ当事者の語りに耳を傾けているうちに、その問題の非当事者（その問題を自分事として引き受けていない人）の心のなかに〈自分がそのマイノリティでないことについてのうしろめたさ〉や〈問題の大きさや根深さに対して自分が無知／無力であることの情けなさ〉などの憂鬱な感情が芽生えてくるのである。このような現象を総じて「マジョリティ・ブルー」と呼びたい。

マジョリティ・ブルーは「マジョリティ・ギルト」や「マジョリティ・ペール」（臨床心理士の坂井新が提案）と呼ばれるサブカテゴリーを含んでいいると考えられる。前者は、マイノリティの語りを聴くなかで非当

事者が〈この人たちを苦しめているのはマジョリティの側にいる自分ではないか〉といった認識を持つときに生じている感情を指す。後者は、ペール（pale）が意味するように、非当事者が〈この人たちに対して自分は無力で何もできず、むしろ責められているようで辛い、関わらない方がよい〉といった認識を持つことで関心や関係が薄まっていく感情を指す。

以上のような現象が示しているのは、マジョリティが備えている〈ヴァルネラビリティ〉（脆弱性）である。私たちは語り合う実践のなかで、マイノリティではない人たちの弱さにも注意を払うべきではないだろうか。というのも、マジョリティ・ブルーやギルトの方は、それを感じる人々をマイノリティとの連帯へとつなげる力に変換しうるが、それに対してペールにまでいたるとむしろ分断や無関心へと進んでしまうだろうからである（最悪の場合、敵対関係へと反転すると考えられる）。

また別の観点から留意点を指摘すると、マジョリティ・ブルーのような現象はマイノリティ／マジョリティの境界を強化してしまうようにも見える。こうした現象を出発点としながら、どのようにこの境界を解消していくべきか。今後その戦術を考案していきたい。

第3集 「世直し」ノオト（2019年度・夏）

第3集では、第10回から第15回までの研究会（2019年2月～同年7月）における対話から編み出された10編のエッセイをお届けします。この期間には次のようなテーマを取り上げました。

第10回（2019年2月20日） 堀未果著『日本が売られる』（幻冬舎、2018）
を読む

第11回（2019年3月27日） カンボジア山地民クルンの音と共同体～
鳴って揺れて聴こえて知る共同体 同調する・しないのはさま～

第12回（2019年4月24日） 2019年度研究プロジェクト会議 みんな
で計画を立てましょう

第13回（2019年5月29日） 動物福祉愛護と動物実験

第14回（2019年6月26日） 外国人労働者の受け入れとその諸問題

第15回（2019年7月24日）「世直し」ノオト（2019年度・夏）合評会

2019年度始めの第12回研究会で「研究プロジェクト会議」と称して取り上げたい主題について話し合ったところ、〈いのち〉に最も多くの関心が集まり、繰り返しこのテーマに取り組むことになりました。そのためノオト第3集にも何らかのかたちで〈いのち〉に関わるものが多くみられます。

また、第11回研究会に関連するエッセイとしてはNo.2「カヨックを踊る、「いのち」の意味を想像する」を、第14回研究会についてはNo.4「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」をお読みいただけます。

1 乳児のいのちと「水の洗礼」

池田光穂

この話は 1980 年代中ごろに中米の先住民と征服スペイン人の混血の末裔であるメスティーソの農民の話でフィールド調査をしていた頃の話である。私は 2001 年にその経験を 1 冊の本（『実践の医療人類学』2001 年）にまとめたが、この話はそれに収載されていないものである。

ある日、村で子供が生まれた。カトリックの教えに従って、生まれた子供は洗礼を受けなければならない。しかし村には神父は住んでいない。神父はミサを執り行うために 2、3 カ月に一度くらいしかやってこない。洗礼は教義上カトリック信仰の始まりであるが、村の人たちに言わせれば「人間の仲間入り」そのものをも意味する。そのため神父抜きで、いわば非公式に教会における洗礼を待たずして自分達で赤ん坊に「洗礼」を挙行する。「水の洗礼」（バウティスモ・デ・アグア）と呼ばれるこの慣習とは、神父によって祝福された聖水を入手し、それを生後 8 日目の子供の頭に注ぐことで「取りあえずの洗礼」を施すことだ。

教会での洗礼と同様に「水の洗礼」においても実の親は、ゴッドペアレンツつまり代父と代母になってくれる成人を探し、それに立ち会ってもらう。どうして神父により正式の洗礼を待たずにこのような世俗的な慣習をおこなうのだろうか？ 二つの理由があった。

ひとつは、乳児の死亡率の高さだ。農村で生まれた赤ん坊が教会での洗礼を待たずに死んでしまうことがある。人は死んだ時には天国にも地獄にもいかない。辺獄（リンボ）というところで最後の審判まで待つのである。生前に洗礼を受けていることと、最後の審判によみがえるために魂の器となる「身体」がちゃんと埋葬されていることが不可欠なのだ。日本では火葬をおこなうという話を僕が村びとにしたら、彼らは眼の色

変えて次のように僕に訴えた。「おお神様！　肉体がなければ、キリストと共に天国に昇天できないではないか？　もし君が死んでも、頼むから君の死体は燃やさないでくれ」と。

もうひとつの理由は、民間信仰による。チョルカという邪悪な鳥が真夜中に洗礼を受けていない赤ん坊を襲い、吸血することによってこれを殺すというものである。チョルカは「水の洗礼」を受けた子供にはもう襲うようなことはない。また、チョルカは魔女（ブルハ）の変身したものもある。

生まれた時は元気でも、いつ起こり得るかも知れない赤ん坊の死亡。それに先立ち、いち早く赤ん坊に洗礼をさせて「人間の仲間入り」をさせてあげたい、という人びとの願望。また、生まれた赤ちゃんにもまた最後の審判に至るまでの時間的資格を与えるための努力。彼らの「いのち」の時間尺度は生まれた時から、死後の人生の事まで織り込み済みであるのだ。これはあくまでも僕の仮説的解釈である。メスティーソ農民たちの「いのちの誕生」についての考えを知るよですがとしては、これほどの好例もないと思うのである。

2 カヨックを踊る、「いのち」の意味を想像する

井上こう

カンボジア北東部、クルン人の村で60歳ぐらいのある男性が急死した通夜でのこと。彼の長女と次女が腰から上を大きく前後に揺らし、父の顔にかわるがわる覆いかぶさるばかりに、「私のお父さん！」と泣いて呼びかける。高い音で始まり、ぐっと音が下がって「家を新築するための材木を用意したところだったのに…」「もうあなたはいない…」と続く。歌のような音の上げ下げとともに喪失を嘆くのはきまった様式のもので、それは自覚されないぐらいに当たり前の、身だしなみならぬ声だしなみのようなものだ。

夜中になっても泣きは続く。一方で、死者の家の目の前の広場では冷蔵庫ほどもあるスピーカーから歌謡曲やダンスマジックが遠慮なく大音量で流され、多くの参会者が踊りに打ち興じる。これも当たり前の光景だ。家の中から鋭く裂くような悲嘆の声が、スピーカーが流すとぼけた調子の歌に重なるが、踊っている人たちは楽しさをふりまき踊っている。泣く人や泣く人に寄り添っている人たちがそれを咎めるようなそぶりはない。

楽しそうに踊る人も、その人なりに「いのち」を悼む気持ちを潜ませているのではないかとはじめは思った。でもそんなのは自分のものさしだろう。聞けば、葬式に参会する自分たちが楽しむために踊るのだそうで、真夜中に遺体のそばでみんなが静かにしていたら死靈が怖くてたまらないと言う。そうか楽しさで恐怖にふたをするのか、いや、楽しさの意味はもっと深いだろうか、と依然私は腑に落ちない。日ごろどんな言葉やどんな身体的反応に取り囲まれているかによって、物事の納得の土台は違うだろう。ひるがえって、「いのち」が「かけがえなさ」「重さ」

の意味にすぐ結びつくのも一方の側の納得の土台だ。これらの言葉があって、かしこまるという身体的抑制が見習われるような環境からくるものだ。自分側の言葉や身体的反応が教えてくれないことに惹かれてみよう。

クルン語ではカヨックという一つの言葉を死者、遺体、死靈、葬式の意味で使い分ける。とはいって一つの言葉なので、たとえば「死に柄」（にわか造語。柄は事柄、身柄などのそれ）のような包括する一つの意味があるかもしれない。葬式の踊りにはラム・カヨックという当たり前に定着した言葉があり、直訳で「カヨックを踊る」だ。「～を踊る」は「安来節を」など踊りの種類の言葉とふつう合わさるが、もっとつかみにくく何かを踊ることがあるだろうし、案外直訳で何か言い得ているかもしれない。死に柄は踊るものかもしれないな、などと思えてくる。が、まだわからない。身体でも試してはいる。彼の地の葬式で私も時々踊るようになった。はたして、踊ると気持ちいいという以上の納得には達していない。2年ほどの民族誌調査で想像してみる「いのち」の意味は、なおも神妙な大テーマにしてしまうからか、とにかくわからない。

3 被害者家族サイドに立った死刑制度の見直しを

海野 隆

知人が死刑反対運動に参画していたので、筆者も時々集会に参加した。

いわゆる「人権派」の活動家は「死刑は受刑者の人権を否定する残酷な制度だ。国連が1991年に死刑廃止条約を発効させ、EUをはじめ主要先進国が死刑制度を撤廃しているのに、わが国が批准しないのは恥ずかしい。即時廃止すべきだ」というような主張を繰り返していた。

しかし、愛する人を殺害された家族・親族の犯人に対する憤怒・怨念はいかばかりだろうか？　さらに被害者が味わった苦痛や無念さを犯人にも経験させてほしい、極刑を希望するといった言葉が出てくるのは当然である。

2014年度に実施した内閣府の調査では、「死刑は廃止すべきである」と答えた者の割合が9.7%、「死刑もやむを得ない」と答えた者の割合が80.3%と死刑存置派が圧倒的に多い。

当初、弁護士の岡村勲氏は死刑反対の立場を示していたが、夫人が殺害されたことを契機に全国犯罪被害者の会を組織し死刑賛成に転じた。そして裁判で被害者家族の心情を陳述し、被害者の遺影を持ち込むことがゆるされるようになり、犯罪被害者家族の心に寄り添う方向で裁判の改善に尽力された。

こうしてみると、死刑廃止派の主張は「犯罪者の人権」を追求するという方向のみに終始し、犯罪被害者家族の心の叫びを顧みていない。これに死刑廃止運動の行き詰まりの一因と考える。犯罪被害者家族の感情を踏まえたうえで死刑反対のあり方を考えなければ、我が国の死刑廃止は永久に実現しないであろう。

筆者は医学・生物系のバックグラウンドを持つものだが、電気椅子にせよ、ギロチンにせよ、絞首刑にせよ、それらは「安楽死」といえる。速やかに中枢神経系の機能は失われ、1分以内に確実に意識は消失する。死刑執行前の恐怖はあるだろうが、執行されてからの苦痛は一瞬で終わるものと推定される。したがって、犠牲者の未来が奪われる無念さ、恐怖、苦痛の重みに比べると、一瞬で終了する死刑執行の恐怖・苦痛はバランスされるのだろうかと思う。

最近では、死刑になりたくて大量殺人を起こす人がいるが、これは死刑が犯罪抑止力としての意味をなさないことを示している。

犯罪被害者家族は、犯人が死刑となることで、憤怒と怨念の標的を失い、虚脱状態に陥るということもあるという。永山則夫死刑囚のように判決を受けて反省と贖罪の日々を送り人格的にも鍛磨されていった人物もいるが、反省の色もないまま刑を受ける人もいるという。この観点からすると、犯人を生かし続け、反省と贖罪の念を持つまで服役させる方が、死刑反対と被害者家族の心情の双方に応える道ではないかと考える。

4 「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」

岡野彩子

今年2019年6月の第14回世直し研究会に弁護士の古川智祥さんをお招きし、「外国人労働者の受け入れとその諸問題」というテーマでお話し頂いた。途上国に日本の技能や知識を伝える〈国際貢献〉を掲げ、外国人の〈技能実習〉という制度が始まったのが1993年。だが事実上は安価な労働力確保のための制度と化していると批判が絶えない。今や日本で働く外国人は146万人。深刻な人手不足が続く中、国は4月に改正入管法を施行し、さらなる外国人労働者の受入れ拡大に踏み切った。〈特定技能〉という新制度は、単純労働に従事する外国人を正面から受け入れることを認めた点に大きな意義がある。しかし技能実習の問題を引き継ぐだけになりはしないかと、古川さんは危惧している。

法務省によれば、2018年12月末時点で技能実習生は32万8360人である。ベトナム人が最も多く全体の半数を占める。また今年3月29日の報告では、2012年から17年の6年間に技能実習生171人が亡くなった。死因は、病死59人、実習外の事故死53人、実習中の事故死28人、自殺17人、殺人又は傷害致死9人、その他5人。受入先企業などからの失踪者は昨年1年間で9052人に上り、過去最多という。ちなみに技能実習生には職場や職種を変わる自由がない。NHKスペシャル『夢をつかみにきたけれど ルポ・外国人労働者150万人時代』(2019年7月13日放送)は、ベトナム人技能実習生の死や逃走に纏わる過酷な現実を報じた。実体の把握と対応は、いのちにも関わる喫緊の問題だ。

かくいう私も外国人としてドイツで7年暮らした。渡航した1992年は、極右による暴力事件が2285件にも達した異常な年だった。8月にはネオナチの若者たちが、旧東独の都市ロストックの亡命申請者登録セン

タ——当時ベトナム人労働者ら百人余りが住んでいた一に放火した。火炎瓶が投げ込まれると、付近の住民が拍手喝采し、私は外国人であることに恐怖を感じた。この事件を題材とした2014年制作の独映画『ロストックの長い夜』（原題：*Wir sind jung. Wir sind stark.*〔我々は若い。我々は強い。〕）でも示されたように、彼らの外国人に対する憎悪は、〈ドイツの寄生虫〉や〈ドイツの規範を守らない者ども〉を退治するという排外主義に発するのみならず、現状に対する不満や未来への不安が混在する複雑なものだった。かつて歓迎された外国人労働者が、不況になれば格好のスケープゴートとなった。

「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」。外国人労働者問題に直面したスイスで作家のマックス・フリッシュがすでに1965年に述べた言葉だ。来るのは労働搾取の対象ではない。それぞれが自分の物語を持つ生身の人間なのだ。異国の言葉やルールの理解は容易ではなく、苛立たれ、疎んじられ、偏見の目で見られ、傷つき、孤独に沈み、病み、死すら考えることがある。我々が外国人労働者を〈受入れる〉とは、彼らと〈共に生きる〉ことを意味する。カルチャーショックを受けることがあるが、時間をかけ、彼らが困った時には隣人として手を貸し、地域コミュニティの輪に招き入れるといった地道な活動が大切だろう。ドイツで親切に接してくれた人々のことを私は決して忘れず、自分もそうありたいと願っている。こうしたささやかな連鎖が世直しに繋がってゆく信じたい。

5 居場所を得る

上條美代子

2018年春、私はオープンして間もないデイサービス（福祉施設）が看護師不足で運営に支障を来していると聞き、ワンポイント応援することにした。その後、確保はできたものの安定するまでと要請され、週に1回のペースで通勤に往復3時間かけ、非常勤看護師として働いている。40年ぶりに部下がない一看護師の立場に戸惑いもあったので「見ざる聞かざる言わざるの三猿主義」、確信犯のフリーライダーである。

オリエンテーションらしきものもなく、組織化されていない集団は野放しの感があった。それぞれがそれなりに一生懸命に業務をこなしているように映った。同僚である介護職たちはとりあえず取り急ぎ、「看護師さん。ちょっと」と呼ぶ。「ナースは時給が高いんやから使わな損」らしい。レベルは、教育はどうなっているのだろう、と査定や監査員の目で見てしまう。長居は無用と現場をやり過ごそうと考えていた。ただ、次々出てくる気になることや違和感を放置できない性分である。

ある時、脳出血後遺症の左半身麻痺に伴う痛みと痺れに苦しみ、3年以上も大量の鎮痛剤や安定剤を常用している元商社マンAさん（64歳、要介護2、週3回通所）と話した。眉間にいつも縦ジワが見られ、「一日の総てが痛みに支配されている」と仰る。嫁いだ娘は関東へ転居し独居である。彼のニーズは「薬が効かなくなるのが心配。現状を何とかしてほしい」。だが、膠着状態である。放ってもおけず施設長達に相談したが、担当のケアマネージャーに任せておけばよいとの事だった。

そこで、熊谷晋一郎らの当事者研究の有効性報告（臨床心理学 増刊第11号『みんなの当事者研究』金剛出版、2017）をヒントに来所時のレクレーションとして「当事者研究」をAさんに提案し、「PDCAやなあ」

と、了解された。痛みや関連事項を検討、モニタリングし傾向を分析、対策を共に見出すこととし、参考資料に手を加えオリジナル表（A4横長サイズ）を作成した。目標は苦労をしてくれているAさんの身体との良好なコミュニケーションだから、身体の云い分、体調や気分の凸凹を記録する。表題は「痛み日誌」ではなく「体話ノート」とした。一枚に一週間をまとめて表示、変化を追えるよう可視化を図った。エクセルの表を何度か修正してくれたのは事務のスタッフだった。症状があっても頓服を服用せずに済んだ時、意外と気にならなかった時、日常に支障のない時間帯もあった。幾つかの「例外」に緩和のヒントも見いだせた。まだまだだが、ほんの少し手応えを感じる。この表は「後始末から前始末へ、ケアを処理から予防へ未来志向にする」と、スタッフが関心を示すようになったのも嬉しい変化である。

いつからか私は名前で呼ばれている。人は人をケアすることで自分の居場所を得、その過程で心理的安全性を担保されてもいるようだ。そして私はまだデイサービスの看護師を続けている。

6 ゲゲゲの過ちーあるいはアトムなる憂鬱

北村敏泰

ハンセン病問題を取材していて、国家賠償訴訟原告団長、社会活動家で詩人の^{こだま}脇雄二さんが故水木しげる氏の漫画「ゲゲゲの鬼太郎」の大ファンだったと知った。しかし、死してから「目玉おやじ」となって鬼太郎を助けるその父親が、1969年刊行版の『水木しげる集』（筑摩書房）では「らい病」と表現されている。しかも以降かなりの期間の版の中で「不治の病」とされ、全身が溶ける恐ろしいものとして描かれた。原因菌が発見されて特効薬も輸入され、完治する病気となりつつある時期から言えば明らかな誤りだ。差別的な「癪病」呼称が変更されても、当時なお世間に広がる誤解と偏見から作者も自由ではなかったということになる。

だが脇さんは偏見は批判しつつも、水木氏の抑圧された者たちへの眼差し、鬼太郎たちの自由奔放な生き方に、「『妖怪』の世界を通しての、人間に対する共感と限りない愛を心底確認できる」と賛辞を送った（栗生樂泉園入所者自治会文芸誌『高原』2007.11月号）。間違いは犯した、だが後に人権や平和を訴えた漫画家を頭から否定することをしないのは、82歳で亡くなるまで元患者の人権擁護に闘い続けた脇さんの心の広さ、そして眞の人間性回復運動の懷の深さだろう。

「科学の子」とされた「鉄腕アトム」は小型原子炉を動力とした。その使用済み放射性廃棄物は処理方法が不明だし、現在なら「そんな危険なものが空を飛ぶなんて」と問題になるかも知れない。きょうだいが「ウラン」や「コバルト」であることからも、作者手塚治虫氏が制作当時の「夢の原子力」神話に影響されていたのではないかと考えられる。しかし、だからといってそれを「原発推進者」「反原発運動の敵」と決めつけ

退けるなら少し偏狭ではないか。

手塚氏はその後、原発PRにアトムを利用したいという電力業界の申し入れを一切断っていたし、死の前年の88年のインタビューに「僕は原発に反対です」と明言している（『毎日新聞』2011.8.12夕刊）。著書『ガラスの地球を救え』（光文社、1989）ではアトムが原発と結びつけられるなど「世界は技術革新によって繁栄し幸福を生む」というビジョンを掲げているように思われる」のを「たいへん迷惑」とし、「科学技術が暴走すればどんなことになるのか、幸せのための技術が人類滅亡の引き金ともなりかねない、いや現になりつつあることをテーマにしている…十万馬力の正義の味方も、科学至上主義で描いた作品では決してない…」と書いている。

このことは世直し活動のための「運動論」にもつながる。手近な人を理解が不十分という理由で叩くのは容易いが、闘うべきはもっと大きな敵だ。単純な排除は運動を狭くするだけでなく、人を「敵側」に追いやる、それによって「敵」を増やし有利にする危険さえある。誤りは誰にもある。だがそれに気付き、より良い方向に振る舞いを正すことに意識を向け、協力し合うことの方が大事だ。過去の間違いを反省しないまま、「元号」変更のどさくさに「新しい時代」を言いたて、過ちを拡大再生産しようとするような者たちは、指弾の対象であり論外だが。

7 自宅で最期を迎える

熊野以素

大阪のベッドタウン豊中市の高齢市民アンケート（2018）の中に「死期が迫っている場合、あなたはどこで療養生活を送りますか」という質問がある。在宅死を勧める厚労省の意向に沿って登場した設問である。これに対して一般高齢者の25.9%が病院を希望し23.6%が自宅を希望している。実状はどうか。1951年の日本では82.5%が自宅で死去したが、現在は75.8%が医療機関、9.2%が施設、自宅での死は13%にすぎないという。半世紀の変化は私も体験した。1969年、祖母が自宅で死去、88歳。家族・親族14人で看取った。2007年、65歳の私が入院し、認知症の母は特別養護老人ホームに入居し、96歳で死去した。2019年、一人暮らしで脳梗塞により半身麻痺となった70歳の義弟は老人保健施設に入所。在宅復帰への中間施設のはずの老健は特養待機者で溢れている。

超高齢化と認知症の増加、核家族化と家族介護者の高齢化、独居高齢者の劇的増加に伴い、『自宅で最期を迎える』のは夢物語となった。それでも厚労省は『最後まで在宅』の夢を宣伝する。なぜか？ 施設整備の抑制のためである。では、在宅介護給付を充実するのか？ ノーである。要介護5の居宅サービス支給限度額は36万650円。身体介護型訪問介護（1時間未満）4270円、一日2.8時間しか利用できない。単価の安い生活援助訪問介護を併用しても限度4時間。しかも厚労省は利用者の多い生活援助を給付から外そうとしている。給付削減の代わりに厚労省は医療と介護の連携「地域包括ケアシステム」を謳う。しかし地域医療を担う筈の在宅療養支援診療所はどこの町でも数えるほどしかなく、24時間訪問看護事業所に至っては、探すのが難しいほどである。更に介護と医療の分断の問題がある。介護職の通院介助は病院の玄関まで、付き添いは

家族の仕事。介護職はインシュリン自己注射の介助ができない。介助ができる訪問看護の単価は身体介護の倍近く、利用すれば限度額を超ってしまう等々。これでは重度要介護者や独居高齢者は在宅死どころか『老健たらいまわ死』か『孤独死』の他はない。特養に入れれば「ラッキー」というのが日本の現状である。在宅が長く続けられる国はないのか？

オランダでは各家庭が地域で開業する家庭医を選んで年間契約を結び、医療を受ける。家庭医は地域医療の核であり、日常の看護介護を担う訪問看護師とホームヘルパーの資格は一本化されて最後までの在宅生活が可能になっている。家族介護者へのレスパイトケアも進んでいるという（廣瀬真理子「オランダにおける最近の地域福祉改革の動向と課題」『海外社会保障研究』162号、2008）。安楽死が認められている国であり死生観も違うと思われるが、家庭医制・医療と介護の統合・レスパイトケアの充実は見習うべきである。『在宅重視』を唱える厚労省の急務は介護給付の充実と介護・医療の統合である。

8 ハープが奏でる「いのち」と靈

滝奈々子

グアテマラ北部高地コバン市周辺のマヤ系先住民であるケクチの人びとには、ムエル (*muhel*) と呼ばれる、事物に宿る靈と、ムシク (*musiq'*) と呼ばれる、人間が吐く息に宿る靈がある。ケクチの人びとの主食は、トウモロコシで作るパン（トルティーヤ）であるが、この2つの靈は、相補的な関係にあり、トウモロコシの大地を司る神であるツルタカ (*Tzuultaqa'*) と密接に関わりを持つ。

ムエルは、人びとの誕生とともにその人間に宿り、死後はツルタカの中に入りゆく靈である。ムシクは、楽器や口笛を演奏する人間の息を通して生まれる。ムシクの派生語のムシケフは、キリスト教の靈を含む一般的な靈をさす。トウモロコシの豊作を祈願するための祭礼マヤハクは、ハープとの合奏によってなされるが、演奏家である人間の息が、楽器の中に入り、音が発せられるとムシクが生まれると人びとは説明する。ハープによる合奏は通常ハープ、ヴァイオリン、ギター、トゥムトゥムと呼ばれるハープの共鳴箱を打ち鳴らす棒で構成される。演奏家は楽器へ息を吹き入れ、空間に音を発し、この音にはムシクが伴うといわれる。ヴァイオリンやギターについても同様であり、これらの楽器にはレレブシャブアアル（音のすき間）と呼ばれる楽器構造上に亀裂があり、この音のすき間からムシクが生まれるのである。演奏家は、これら音のすき間は、人間の靈の出口であるムシカアルであり、楽器をとおして、人間のムシクが放出されるという。ムシカアルとはムシクとアル（器具、装置）から成立し、ムシクの音が作り出される装置であり、各楽器の空気腔はムシクを放出する装置として解釈されている。このようにして、ムシクは楽器の空気腔をとおして奏者のちからとしてトウモロコシを発

育させる神であるツルタカへ捧げられる。

ツルタカは音楽演奏により、ムシクを得て、ムエルとともにムシクを大地に吹き出し、トウモロコシ畑は肥沃なものとなると言われている。ムエルやムシクといった靈により強化されたトウモロコシを食することにより、ケクチの人びとのいのちは継承されているのである。事物と人間（＝マヤ先住民の神話によると人間はトウモロコシからできている）と大地の三者の「いのち」の調和こそが、豊かな大地の実りを産み出すのである。日々何気なくケクチの人びとが口にする食生活の背景には、わたしたちが感じ得ない靈的なものが存在し、さまざまな形の息＝靈の循環を通して、生き生きとした彼らの生活を彩っている。私の専門は、民族音楽学という研究分野であり、日本人からは異国のエキゾチックな先住民音楽や楽器の研究であると思われてしまう。しかしながら、ムエルとムシクの解釈を通して、その背後には、さまざまな「いのち」をめぐる息＝靈の合奏がみられることが、お分かりになられたのではないか。そのように日本の皆さんに伝わったとしたら、身の回りの伝統音楽や楽器への見方もまた変わるかもしれない。

9 長期滞在外国人の生命を巡る 外国語双方向運用能力 (interactive competence) の不可欠性

林田雅至

大阪大学 CO デザインセンターは SDGs（国連が掲げた 17 の持続可能な開発目標）の実績を担う学内組織の一つである。私は、その目標の「3：すべての人に健康と福祉を、4：質の高い教育を、10：人や国の不平等をなくそう」の 3 項目の課題をベースに医療者とともに「結核対策」に取り組み、啓発研修及び人材育成ワークショップ活動を継続展開している。日本語学校に通う外国籍生徒に対して、まず健診などによって予防・早期発見に努める。結核患者が出た場合には次の支援者が学校と医療機関の間の媒介者となる。外国籍生徒の同一言語圏出身者・同僚の中からステークホルダー（文化的支援者）を選び、人材育成する。一方、日本人支援者も同様に育成し、「適正テスト」を以って「外国語双方向運用能力 (interactive competence)」を身に付けさせ、校内で内服を徹底させる DOTS（直視監視下短期化学療法）を習得させ、合わせて「コミュニティー通訳」資格の付与を目標としている。日本人支援者の目下の予備軍は林田が箕面キャンパスで行なう「多文化サポート概論」など 4 科目を受講する熱心な 40 名ほどの様々な言語を専攻とする学部生である。

この「外国語双方向運用能力」について、従来外国語学習は学習言語・文化に適応（同化）・統合するものと歴史的に位置付けられる。現在欧洲では、実施中の所謂「外国語検定試験」に対して、多文化・多言語主義を保証する「双方向運用能力」を問う新規試験の必要性が提唱されているものの、政治的な右傾化、自国中心主義の煽りを受けて、未実現のままである。そういう意味では 2018 年度大阪公衆衛生協会主催、本セン

ター共催、関西SDGsプラットホーム（JICA）後援による「適正テスト」（日本語・英語版）は先駆けで、今後多言語版化推進の契機として、今回の「結核対策」に導入を図る。媒介語＝学習者母語・文化の重要性を強調し、「文脈を汲み取る感受性（contextual sensitivity）」に基づく「外国語双方向運用能力」の涵養に力点を置いている。いくら学習外国語だけをマスターしても、互いの気持ちは一向に伝わらないのである。これが「質の高い教育」の保証となる。同言語圏日本語学習者と日本人支援者の関係は、合わせ貝殻のように、互いの媒介言語、母語及び外国語を通じた補完的な関係になる。

結核対策は喫緊の社会課題であり、社会的な差別構造を築かないためにも、また社会に包摂するためにも、多文化支援人材は不可欠な存在となるのである。

参考文献

「適正テスト」（2019.2.16）開催告知：

<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/seminar/> 2019/02/8032

平成30年度ストップ結核パートナーシップ関西 第6回ワークショップテーマ「長期滞在外国人の結核対策」報告書（2019.1.26）：

http://www.osaka-pha.or.jp/suisin/pdf/suisin_31.pdf <https://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/events/2019/8047>

10 「これでいいのだ」

山森裕毅

とあるアートNPOの方から「アートとフクシ」という大枠のなかで、「これでいいのだ」というお題でレクチャーの依頼をいただいた。もちろんこのフレーズは、赤塚不二夫の代表作『天才バカボン』に登場するバカボンのパパの決めゼリフである。ある出来事のキテレツでナンセンスな成り行きや結末に対して「締めの一言」として発せられるのである。

なぜこんなお題でレクチャーを依頼されたか。私は主に精神障害のために生きづらさを抱えている人たちとガヤガヤと対話する活動を行っているのだが、そこに依頼者が参加したときに、参加者のひとりが発したこのフレーズにグッときたからだそうだ。

このフレーズの何が心を打つのだろうか。分析をすると意外と多面的な言葉だということが見えてくる。まず「これでいいのだ」とは肯定的な評価・判断だといえる。次に、「これでいいのだ」は「これがいいのだ」ではない。言い換えれば、後者が唯一のものについての高い肯定を表しているとすれば、前者は無理のない中程度での肯定を表している。精神を病んでいるかどうかにかかわらず、成果を強く求められる社会に組み込まれているかぎり、私たちは評価に曝されざるをえない。しかもその多くは否定的な評価である。それによって病むということもあれば、病んだ後に病んでいるがゆえにさらに否定的な評価が続くことも稀ではない。このような厳しい環境をサバイブするうえで、自分（たち）を無理せず肯定できる言葉は非常に有用なものといえるだろう。

またこのフレーズは「(現時点では) これでいいのだ」というふうに過程の肯定を表すこともできる。成果を求められるということは結果を求められるということであり、またそこでは失敗できないことが多いのだ

が、そのことがひとを追い詰めることにもなる。それに対して「これでいいのだ」と発することで、結果を過程の一部としてとらえ直し、次へと繋ぐようなオープンな態度を取ることができるようになるという効能があるだろう。

さらにいえば「これでいいのだ」とは一種の〈ゆるし〉でもある。判断は英語で judgement であるが、これには〈裁き〉という意味もある。実際、否定的な判断や評価は罪悪感や有責感を生じさせ、ひとを自罰や他罰に向かわせやすい。この一連の流れを〈裁き〉と呼ぶことができるだろう。つまり、成果を重視する社会は裁きを重視する社会でもありうる。それに対して「これでいいのだ」は無理のない中程度での肯定という許容（ゆるし）を表すことができる。このようなゆるしは自分や他人を裁きから逃れさせ、気を楽にさせ、生きづらさをほぐす効能があると考えられる。

かつて病いが神罰や罪と見なされた時代があったが、こうした発想は現代においても死んではない。このことは病いと罪悪感が隣接していることを表しているが、逆にいえば癒しとゆるしが隣接していると見なすこともできる。精神障害の人々の対話において「これでいいのだ」がグッとくるのは、このフレーズが持つ肯定とゆるしの効能が癒しへと繋がっているからではないだろうか。

第4集 「世直し」ノオト（2019年度・冬）

第4集でご紹介するのは、第16回から第20回までの研究会（2019年9月～2020年1月）における対話から生まれた11編のエッセイです。この期間で取り上げたテーマは次のとおりです。

- 第16回（2019年09月25日） 上坂冬子著『奄美の原爆乙女』を読む
- 第17回（2019年10月30日） マザー・テレサに出会って
～私の歩んできた道 下る道は昇る道～
- 第18回（2019年11月27日） 私のヒーロー『世廻り猫』遠藤平蔵とケア
- 第19回（2019年12月25日） 音楽するわたしってなあに？
～世直しに携わることができるのか？～
- 第20回（2020年1月22日） 「世直し」ノオト（2019年度・冬）合評会

マザー・テレサとの出会いについて是枝律子さんにご講演いただいた第17回研究会に関してはエッセイNo.4「一隅を照らす人」を、漫画『夜廻り猫』をとりあげた第18回研究会については同じくNo.4に加えてNo.5の「私のヒーロー 夜廻り猫の遠藤平蔵と母」をご覧ください。

1 ピー・ビー・エル（PBL）としての世直し研究会

池田光穂

学習者自身が中心となり、反省的反復の作業をともないながら、実践される少人数グループの教育手法ことを、「問題にもとづく学習（ピー・ビー・エル）」とよぶ。PBLとは、Problem Based Learning のアクリニム（頭文字による略記法）である。PBL に対照的な（つまり正反対の）従来型の教育手法のことを「系統的学習」と呼ぶ。教育手法における正統的周辺参加論（LPP）では（アクティブな）状況的学習に反対としてとらえられる古典的学習がこの系統的学習に相当する。私たちが座学で先生から講義を聞き、生徒や学生たちがノートをとって勉強するものである。

世界の大学で標準化されたPBLは、1) シナリオが学習グループに提示される、2) グループはそこに含まれている問題をあぶり出す、3) ブレインストーミングをして、既知と未知を峻別して、できそうな課題を見つけ出す、4) 課題を構造化して、既知を整理し、未知の項目の探索を決定する、5) 全員で相談して分担を決める、6) 各人が図書館やインターネットで情報収集する個別学習を実践する、7) グループがスケジュールを組み再集合して、議論を熟議のレベルにまで高める、という7つの段取りから成る（そのためセブン・ステップスと呼ばれる）。つまり学期を通して、小グループ学習 + 自発学習 + 問題中心の学習という3つの要素から構成されるのである。

シナリオというのは、とてもシンプルなもので、マーストリヒト大学の学部生には次のようなものが提示されるだけである：「ドイツのアーヘン市の保健サービス局が、マーストリヒト市の保健サービス局に、ベルギー・リエージュ市的一般診療医師から開放性結核の症例 1 例の報告

があったと知らせてきました。患者は39歳の電気技師（男性）で、高度な技術設計、施行をする会社に雇われています。最近、アーヘンとマーストリヒトの病院に現場を持ち、公共交通機関を利用して行き来していましたのことです。この患者の報告から何日かのち、こんどは、マーストリヒト在住の電車通勤者に、開放性結核症例が報告されました。あなたは、つぎのような疑問について検討します。結核はどのように広がるのでしょうか？何がリスクファクターでしょうか？結核の広がりをふせぐために、国内で、また、国をまたがって、どのような手段が必要でしょうか？」

ここまで説明を聞くと、世直し研究会のメンバーはこう呟くはずである：「私たちがこれまで研究会で取り上げてきたような、世直し課題はすべて具体的なものであり、その解決にはさまざまな専門家の知恵を総合的にまとめる熟議が必要だ。PBLって『世直し研究会』での勉強法と同じではないだろうか？」

まったくその通りである。どのような社会問題の気づきも自分の足元から出てこないと、学生の熟議能力を軽視する先生（教授）が押し付けてくる系統的学習（古典的学習）の中の練習問題のひとつにされてしまう。つまり、世直し研究会の別名はピー・ピー・エルと言っても過言ではない。

2 「晒す」という贈与

井上こう

前回の「世直しノオト」で、カンボジア少数民族クルンの葬式にふれ、肉親のなきがらに寄り添って泣く人たちの周りで人々が楽しそうに踊る慣習のことを書いた。「家の中から鋭く裂くような悲嘆の声が、スピーカーが流すとほけた調子の歌に重なるが、踊っている人たちは楽しさをふりまき踊っている。泣く人や泣く人に寄り添っている人たちがそれを咎めるようなそぶりはない」。参会者が踊るのは「自分たちが楽しむため」だと聞き、考えてもなかなか腑に落ちないと述べた。

この「楽しさ」の腑に落ちなさに関連して、前回とはちがった方向のことを考えてみる。

詩人の井坂洋子は、夜中にハンバーガーを買いに行って見知らぬ中年女性に話しかけられた。「奥さま、お持ち帰り？　おうちで召しあがるの？　そう、すばらしいわね。楽しいですわね」。返答に窮したという。女性は最近夫を亡くして落ち込んで毎日カラオケで歌っていたが、お金がかかりすぎるのでハンバーガー店に6時間いたと言う。「曲がかかるでしょ。楽しいわよ。奥さまもがんばってね……」。井坂さんはたちどまる。「お尻に火がついて、そう言わざるを得ないのだ。人の身にはさまざまなことがふりかかり、少々おかしくなっても晒して生きる他ない」。それは自身を含む「はみだして、こぼれそうな者たち」の姿だと書く（井坂洋子『はじめの穴 終わりの口』幻戯書房、2010年）。

葬式の踊りと女性の心境は全く違う。はっとしたのは「晒す」という言葉だ。楽しい・悲しいは、どこかが緩むとへんに漏れて晒してしまう。そういうえば最近、私たちは自分のやわらかい部分をずいぶん晒しにくくなったりと思う。重たい、おかしい、イタイと他人に思われるのを恐れる。

ますます空気のようになっていく通貨をやりとりして、ノイズなしに必要なものだけを手に入れているからか。世界中にみられた贈与と返礼で多くが回る文化がかなり衰退し、戴き物でも「別に今はしくない」とノイズを感じることさえある今時だ。ええと、どうやら私は「晒す」と贈与は近いものだと思い始めている。やけになって暴れる、ばか笑いする、大泣きする、放歌する（もはや死語？）、などの身体的に晒してしまうものは、贈与ではないか。自分を緩めて大放出するものだもの。植物だったら、養分を体に必要だからためこむだけじゃなく果実を外に晒す。私たちはその植物の生に直接関係ないけれど、果物もぶしゅっと弾ける音もありがたく受け取る（広い意味の「贈与」の参考として、中沢新一『愛と経済のロゴス』講談社選書メチエ、2003年）。

果物が木からこぼれ落ちてしまえば、自己から一部が切り離されていいよどうしようもなく晒されてしまうのだから、これは決定的な贈与だ。死ぬ、つまり身体をなきがらとしてどうしようもなく晒してしまうのも同じ側面がある。死が晒されている場面に大泣きという晒す行為がつりあうと感じるのは、「晒す」を贈与し返礼する感性の残り火かもしれない。「楽しく踊りまくる」のも晒す贈与ではないか。私も、すでに晒してきた何かをだいじにして、少々のおかしさこそ晒して生きる贈与者になろう。

3 食品添加物や農薬は本当に怖いのか？

海野 隆

数年前、動物福祉愛護の活動家の集会に参加した。終了後、何人かの参加者と喫茶店に入ったが、一人の方が飲み物の注文をせず、しかも出された水も飲まれなかった。一般的の食品は農薬や食品添加物などに汚染され、健康に有害であると信じていて、自分の目で確かめたオーガニック食材を購入するか、信用できるとする業者から取り寄せていた。そして水道水も、塩素をはじめいろいろ身体に悪いものが入っているので、特定のブランドの水しか飲まないとの信念を持っているのだった。

ところで、わが国の食品添加物は、820品目（香料を含む）が認められている。これらは食品添加物公定書により、また規格や製造の基準、品質確保の方法が定められている。食品添加物の安全性は、動物実験により安全性が確認され、これに基づきADI（Acceptable Daily Intake：一日許容摂取量）が定められている。これは、一生涯その添加物を摂取しても健康上悪影響のない量である。

このように、食品添加物は「野放し状態」にあるわけではない。少なくとも食品添加物による中毒は報告されていず、わが国は世界でも有数の長寿国として知られている。しかも化学物質は生体に取り込まれても、肝臓などで解毒され、糞中や尿中から排泄される。生体は脆弱ではなく、健康であれば豊かな適応能力を持っている。また、食品の保存料に関しても、腐敗を起こす細菌には毒性が強くても、人体に対する毒性は極めて弱いという「選択毒性」を持つ。これにより、保存料が食品の腐敗を遅らせ、消費期限を延ばし、食品の廃棄量を抑えるという「地球上にやさしい」効果を示すのだ。

一般に、化学物質は毒性が強いと思われている。しかし地球最強の毒

物は、ボツリヌス菌が產生するボツリヌストキシンという天然物であり、その急性毒性の指標である LD50 値（半数致死量）は 0.0000011 mg / kg であるとされている。これは 1 グラムで 1000 万人殺すことが可能で、LD50 値が 5 ~ 10 mg / kg である青酸カリの 100 万倍の毒性を持つ。ボツリヌストキシンは加熱などでも無毒化できないが、保存料など細菌の活動を抑えることができれば、中毒を防ぐことが可能である。

農薬も農薬取締法により、農産物を病害虫から守り、成長を促進させることを目的に、農作物の収率を上げることに大きく貢献している。しかも農薬は自然界で容易に分解するものが選別され、収穫時・出荷時の農薬の残留量も人体に影響のないレベルになるよう規制されている。

このように、消費者は食品添加物や農薬から保護されている。食品添加物や農薬を極端に恐れ神経質になることこそが、むしろ有害ではないだろうか。

文献

第9版 食品添加物公定書（2018年）：

<https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000641285.pdf>

農薬取締法について：

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_kaisei/index.html

4 一隅を照らす人

岡野彩子

「一隅を照らす。これ則ち国宝なり」。日本天台宗の開祖、最澄の著『山家学生式』に登場するこの言葉は、昨年2019年12月にアフガニスタンで銃撃死した中村哲医師の座右の銘であった。誰も気づかないような片隅、自分の置かれたその場所で、自分に出来ることを精一杯に行う人が、国の宝だという。そのような生き方を選択していると思われる方と、世直し研究会ではたびたび出会う。

そのひとりが、第17回研究会（2019年10月30日）で「マザー・テレサに出会って—私の歩んで来た道 下る道は昇る道—」という題でご講演いただいた是枝律子さんだ。日雇い労働者の街、大阪・釜ヶ崎で野宿者の支援活動をしている時に沖守弘著『マザー・テレサ あふれる愛』を読んで感銘を受け、インドにマザーに会いに行ったことが転機となり、51歳で看護師を離職。駅のトイレ掃除など様々なアルバイトをしながら日本とコルカタを往復し、約10年間医療品や献金を届け続け、同行した仲間は500人にのぼるという。マザー昇天後も支援を続けていたが、2009年に交通事故に遭って片足を切断し、車椅子の生活に。83歳となつた今も、手づくり服を創作して資金を作り、「大きな事ではなく小さな事ですが、心をこめて献金を送り続けています」と語る。「大切なのはどれだけたくさんの事や偉大な事をしたかではなく、どれだけ心をこめたかです」というマザーの言葉通りである。

続く第18回研究会（2019年11月28日）で深谷かほる著の8コマ漫画『夜廻り猫』を題材にお話しくださった看護師の上條美代子さんも、そんな〈照らし人〉一もつともご本人は無自覚だが一である。気づくと、苦しみを抱える人のもとへ、人知れず駆けつけていらっしゃる。そんな

上條さんのヒーローは、福島弁で「泣く子はいねが～」と涙の匂いをたどって現れる〈夜廻り猫〉こと遠藤平蔵である。しかしこの野良猫、実は何の役にも立たない。「だからいいのかも」と、上條さん。「助けようと思うのはおこがましい」。「ただ寄り添うだけの応援団」なのだと。研究会のためにご用意くださったレジュメには、「一隅を照らす」のほかに「路傍の石」「大海の一滴」「貧女の一灯」という言葉が並んでいた。誰も目を留めない小さな存在たちが、上條さんに照らされて、私の目に飛び込んできた。

「わたしたちのすることは、大海のたった一滴の水にすぎないかもしれません。でも、その一滴の水があつまって、大海となるのです」。『マザー・テレサ 愛のことば』（女子パウロ会）に出てくる言葉だ。南米の先住民に伝わる話に登場する、森の火事にたった一羽、水の滴を落とし続ける鳥の姿とも重なる。世界最小の鳥と言われるハチドリのクリキンディは、他の動物たちに「そんなことをしていったい何になるんだ」と笑われて、こう答える。「私は、私にできることをしているだけ」（『ハチドリのひとしづく　いま、私にできること』、光文社）。地球の温暖化、戦争、飢餓、貧困……。あまりにも大きな問題が山積し、ともすれば無力感に心が折れそうになる。そんな時は、この世界の一隅で、ただ淡々と自分のできることを行う照らし人や照らし猫、そして黙々と一滴の水を運び続ける照らし鳥の姿を想い浮かべ、けっして希望だけは失うまい、と思うのである。

5 私のヒーロー 夜廻り猫の遠藤平蔵と母

上條美代子

看護師の常套句は「何か困ったことがあったら、遠慮なくいつでも呼んでください」だ。だから、呼ばれるのを前提とし、それに応えてきた。もちろん潜在ニーズを掘り起こすこともある。ところで、Twitter生まれの8コマ漫画、深谷かほる著『夜廻り猫』の主人公である遠藤平蔵は牡の強面ブサ野良猫だ。頭に鯖缶を乗せ半纏を着て東北弁で「泣く子はいねーが」と、勝手に涙のにおいを求めて歩き、本田哲郎の云う小さくされた者にただ寄り添い、見守り、記憶する。本田は大阪・釜ヶ崎で「ふるさとの家」を運営しながら日雇い労働者に学び活動している神父で、『釜ヶ崎と福音 神は貧しく小さくされた者たちと共に』（岩波書店、2006年）の著者だ。そのように猫は、寄り添う過程や結果において彼らの持てる力をゆるーく見出し促し、発掘、弱さでも連帶する優れもの。私にとってはヒーローである。

夜廻り猫の効用を熱心に説く私に、故郷の幼なじみは「なんじゃ、奥さまのようじゃなあ」と言った。そうだ、超えられなかつた「奥さま」つまり私の亡母と重なるのだ。寺の住職であった父は昭和10年代、本山の指示で千葉から四国へ配置替えとなり、妻である母はその山峡の貧乏寺で裏方役を全うした。寺は世間の傷情報が集まる所だ。正看護師の資格を有していた彼女はそれを天職と思っていたが継続が叶わず、村の老若男女の生老病死を一手に引き受けていた。町医者から託された薬を届け注射をし、薬草を植え、産みたての卵や山羊の乳を私に持たせ見舞いに行かせた。ただただ静かに頷き、聞き届けることが大事と、時に慰め、励まし、共に涙していた。村中の凸凹を見守り把握し、ご本尊のお薬師様が持てる力を引き出して下さると対応していた。私の母というより村

の母だと思っていた。彼女は居場所を得て、村のみんなにとっての居場所となった。

母にも似た夜廻り猫は現代社会の縮図のような苦難や受傷の現場に立つ。世直しは夜直しが似合う。生態系は副交感神経優位で夜間に整うからだろうか。第354話（『夜廻り猫』第4巻、講談社、2018年）では、夜、親に怒られ殴られ外に出された子どもを、隣のおじさんがいつも何も訊かずに「遊びに来る？」と招いていた。十何年も。孤独死したおじさんを、惨めな死と蔑む人たちの傍らで、大学生になった彼は「家族も友人も地位もなくても俺は知っている。おじさんは一等いい人だ」「俺が生きることを耐えやすくしてくれた。人間の価値は誰かに与えたものだ」と平蔵に語る。

マリー・ローランサンは忘れられた女が一番哀れだと記した（『鎮静剤』）。ひとは個として関心を持たれて初めて人としての血が通うと実感する。僅かなご縁からでも、ゆるーくゆるーく手をつなぎ合えば人や社会を是とできるようになる。指は十本もあるので何処かで誰かに引っかかるれそうだ。「猫の手」も借りて、「夜廻り猫ごっこ」や「平蔵ごっこ」を楽しみつつヒーローに続こう。ささやかな「恩送り」ができるかもしれない。

6 「普通」「フツー」って何？

北村敏泰

筆者が勤務した新聞社で同期の男性記者は、性同一性障がいから適合手術を受けて女性に、そして出家して僧侶になり、LGBTを支援する寺を運営している。性的少数者は身近な存在だ。

やはり男性から女性に転換した西田彩・精華大講師の講演を聞き、この問題が優れてラディカル、つまり先進的かつ根底的視点に到達する契機になることを再認識した。西田さんは自らの苦難の体験を話す中で、無知と根深い偏見から来るこの問題の本質が、「普通」と「普通でない特別な（LGBT）」とを対比させるという単純で歪んだステレオタイプの思考・発想にあることを明確に指摘した。

典型的な例として挙がったのが自民党の杉田水脈・衆院議員の一連の発言。浅薄な理解から「LGBTは子供を作らない、つまり生産性がない」（『新潮45』2018年8月号；以下引用同じ）と優生思想むき出しの暴言を吐いた同議員の「常識や普通であること」をことさら主張する姿勢だ。「生産性がない」つまり〈役に立たない〉人間を排除することの暴力性は津久井やまゆり園事件でも指摘された。そこには〈普通＝役立つ健常者〉と〈異様＝不要な障がい者〉という分断思考が通底している。

西田さんの主張には、差別される立場、被抑圧者の立場であるからこそ看破できるという根底的な視座が伺えた。さらに、彼女が「私はただ私であって、LGBTの代表では決してない」と強調したのは、徹底して個々人の差異や独自性、尊厳を重視するから。「LGBT」呼称自体もだが、十把一絡げのステレオタイプの陥穰は常に我々のそばに開いている。何らかの社会的抑圧問題を指摘する人を、その被抑圧者の“代表”あるいは“典型”と見なしてしまう傾向もやはりそうだ。

西田さんは差別の現況や関係する用語を「問題を理解するためであり用語で範疇化、レッテル貼りをしてはいけない」と強調しつつ解説した。LGBT以外にも、I（性未分化）やP（全性愛者）など多様な概念があり、例えば〈同性愛者〉に対して〈異性愛者〉などと少数対多数という図式を克服する考え方も提示された。杉田議員はこのような状況にも「（いろんな呼称があって）もうわけが分かりません」と自ら思考停止をさらけ出している。理解の浅い者に“分かろう”が分かるまいが、そのように〈区別〉され「普通でない」と特殊視されて苦しむ人がいることは見えていないのだ。

講演で聴衆から「普通の私たちがそういう人たちをどう受け入れるか」という“善意”的質問が出たことに問題の困難性が象徴された。「受け入れる」という高みの立場ではなく、「いろんな人がいる」という当たり前の事実を知ることが重要だ。「フツーの人」などいない、そのことは「普通でない」とされた低みの立場からこそ見えて来る。我々が何気なく使いがちな〈普通〉という表現には、安直な評価に逃げ込むことの陥穰がある。〈普通〉はカレーの辛さやラーメンの麺の硬さだけでいい。いや、それさえも食べてみると何が〈普通〉なのか分からないのだ。単純な尺度ではなく物事を細かく観察・理解する、他者の痛みを他人事ではなく互いに自分事として感じることのできる感性を持つ、それが誰もが生きやすい社会を作る世直しに通じる。

7 介護保険の改悪を許さない！

熊野以素

厚労省は要介護1、2の生活援助の介護保険給付外し、ケアプラン有料化の方針を打ち出している。要介護1、2は在宅介護が建前なので、命綱の生活援助を削られるのかと介護者は悲鳴を上げている。

高齢社会をよくする女性の会理事長・樋口恵子さんとWAN理事長・上野千鶴子さんの呼び掛けで開かれた「介護保険の後退を絶対に許さない!1.14衆議院院内集会」に参加し、現場関係者の声を聞いた。会場の議員会館大会議室は各地からの参加者で満員。介護従事者、家族介護者、事業者、医師らのリレートークが行われ、野党の国会議員・秘書らも出席していた。以下は発言の趣旨だ。

高齢社会をよくする女性の会・袖井孝子さん「そもそも介護保険制度自体が家族介護を前提としていた。少子高齢化で介護の実態はもはや人権侵害の域に達した。この3年間、給付の削減ばかり」。市民福祉情報オフィス・ハスカップ・小竹雅子さん「認定が増える給付は減る。老老介護の今、不安と不満ばかり。介護予防重視は非現実的政策」。作家の沖藤典子さん「今や保険あってサービスなし。お金がなければ介護は受けられない。20年も前の施設介護労働の統計による要介護状態判定基準の1分間タイムスタディも見直しが必要だ」。「介護の社会化」との謳い文句はどこへ行ったのか!と思う。

医師は「要介護1、2の認知症の介護が最も大変だと」。生活援助の担い手・ヘルパー事業所は「援助時間がたびたび切りつめられ、要支援1、2の給付が市町村総合事業に移されたためにヘルパーの離職が止まらず、極度の人手不足。派遣したくてもできない」と嘆く。「消費増税増収を社会保障にまわす約束はどうなった。16億円もする戦闘機L351を100

基も買うくせに」と怒りの発言も出た。

一方で、頑張る若い人の報告には勇気づけられた。ヘルパーの藤原瑠香さんは「訪問介護の現場で労働基準法が守られていない。事業所の責任ではなく、給付金・直接契約方式をとる現行制度の下では労基法による介護労働者の保護は不可能、介護保険制度自体が内包する問題だ」とし、介護労働者の労働環境と尊厳を守るために現職ヘルパー3人で国家賠償訴訟を起こしたという。認知症の人と家族の会は「介護保険改悪に反対、憲法25条に沿った介護保険に！」とアピールを出した。せたカフェ世話人、介護保険を考える会は「要支援切りをやめよ」と署名活動し、3人で4000筆も集まった。

会場から私も「特養費用は月15～16万円もして普通の年金生活者が入れない。入所も100人待ち。生活援助も切られる。私たちの未来は野垂れ死にか?! 国會議員の皆さん、この状況を放置するのか」と訴えた。もう今は嘆きではなく行動の時。初の院内集会で採択した次の宣言を、全国に広めたい。

要支援外しは許さない! 要介護1, 2外しは許さない! 生活援助外しは許さない! ケアプラン有料化を許さない! 現役なみ所得・一定以上所得の利用者負担率の上昇を許さない! 介護報酬の切り下げを許さない!

8 民族音楽学者としてのうしろめたさ

滝奈々子

民族音楽学者であるわたしの主たる調査国であるグアテマラは、エルサルバトル、およびホンジュラスと並び、西半球のなかでも最貧困に数えられる。経済理論学者高島均は、グアテマラの貧困は全国的な現象であり、特に先住民族マヤの人びとが多く住む北部・北西部・南西部の高原地帯の深刻な貧困は極めて目立っている。さらに、この地域は36年間に亘った内戦の犠牲者が集中した地域でもあり、被害を公表できない被害者が未だにいるなど、その傷が癒えていない、と示す（「グアテマラの貧困構造に関する一考察」経済研究第144号、明治学院大学、2011年）。

私の調査対象は、北部のアルタ・ベラパス県のマヤの人びとの音楽事象であり、辛苦の生活を目の当たりにしている。男性は朝4時から夕方5時ごろまでミルパと呼ばれるトウモロコシ畑で働き、その収入は日当にして2ドルにも満たないという。加えて、男性は収入を酒に注ぎ込むことも多く、女性の苦労は見るに忍びない。そのため、健康に関しては、地方・女子・先住民・貧困家計において劣悪な結果となっている（同著、90頁）とあり、とくに女性の健康状態は粗悪である。私が住み込んだ家庭でも女性は男性の食後に少量の食事を摂っていた。その上、仕事後の酩酊した夫に暴力を振るわれる事例も多々見られた。

マヤの人びとはほとんどがカトリック信者だが、森羅万象の神々への信仰、黒魔術の実施などシンクレティックな信仰形態をもち、参与観察者である私もそれら神々を奉る祭祀に参加し、共に祈りを深めた。

そのようななかで、現地で民族音楽学者として調査を進めるに従い、うしろめたさを感じ得なかった。一つ目は、住む家もなく生活必需品を買う資金もない状況に陥るほど困窮したマヤの人びとから音楽採取を行

うことであった。音楽採取をするよりも井戸を掘る、電気を引く、衛生状態の向上を図る、女性の権利を守る、といった彼らの逼迫した状況の改善に積極的に動くべきではないかと葛藤する日々を過ごした。わたしの調査結果から、彼らの弾き鳴らすハープの音が間接的にトウモロコシ畑を肥沃なものにしていることが明らかになった。その結果、主食であるトウモロコシの豊作を導き、マヤの人びとの生活を支えているという世界観は認識され、音楽が彼らの生活のなかで不可避であることを諒解した。しかし、彼らの生活の質の向上には直接的に無益なのかもしれない、といううしろめたさを感じた。二つめはカトリック信者であるわたしが、参与観察をする際に全身全霊を傾けてシンクレティズム的信仰に関わってきたことである。この点に関してはこれからもしこりの残る問題であろう。

以上のように、グアテマラにおける民族音楽の調査は純粋なものとは言えず、うしろめたさを抱えており、このような混沌とした精神的経験が日本のみならず世界と向き合うなかで世直しに寄与できることを願う。

9 「外国人労働力」ではなく 異国で働く普通の労働者の存在を認めよう

林田雅至

1991年9月公益財団法人の国際研修協力機構（JITCO）が法務省、外務省、通商産業省、労働省（当時）の四省により設立許可された。翌92年7月には建設省（当時）が加わりそれらの共同管理がなされることになった。この組織は、言うまでもなく国内で不足する外国人労働力を、外国人労働者として受け入れるのではなく、外国人技能実習・研修制度、いわゆる「技能実習制度」という枠組みをつくって導入しようとするものであった。JITCOが技能実習制度をはじめたのは建設省が加わった翌年の1993年のことである。2017年には「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律」にもとづいて外国人技能実習機構（OTIT）が、法務省ならびに厚生労働省の所管のもとで発足した。その法整備の結果、昨年2019年からは「特定技能」という名目で、実質的に単純労働への従事も可能になった。当初は「研修」目的だったので労働賃金は国内労働者の最低賃金の縛りがないために、過酷な労働搾取があったことは否めない。それらは国内外からの批判によりかなり改善されたが、「特定技能」という名目の導入が、研修生たちを労働者として認めない方針を JITCO や OTIT が変更していないことは明らかである（なお、以上は JITCO と OTIT などの HP を参照にした）。

さて、送出元である労働者たちの祖国での徵募、事前研修、「研修先」の紹介、斡旋、選考、そして派遣業務は、すべて民間の業者と「研修受入先」企業による自発的なネットワーク形成によるものである。JITCO や OTIT は、それらを管理監督する組織であり、また、実際に派遣事業に問題が起こっても、実際に対処するのは、国内に受け入れて以降のこ

とであり、それらも受け入れ企業が責任を負う「外国人技能実習生総合保険」への加入など必要かつ最低限の保障しか与えていないことは、多くのジャーナリストが指摘するとおりである。

しかしながら私が聞いたところでは、機構が認証を与える「監理団体・実習実施者」などはそうした保険のことを承知していないことがあると言う。そして、末端の受け入れ企業では、外国人労働者の生命に関心のある意欲的な雇用者を除くと、こうした保険のことを知らないという驚きの返答がもどってきたことがある。またそういった保険事務を扱う会社に問い合わせても、引き受け保険会社に直接問い合わせない限り、技能実習生や特定技能外国人の保険加入率は把握していないという。研修生を守る制度がいつのまにか形骸化されて、制度疲労を起こしていると言える。

今こそ、初心に立ち返って、監理団体や雇用企業などは生命を守る保険に加入すべきであると私は強く思う。今年2020年になり関西での「トップ結核パートナーシップ関西」のワークショップや研修会を通じて、私は、監理団体、雇用企業、日本語学校などに直接に訴えかけることにした。私は外国語教育に長く携わりその経験から、多言語多文化支援人材に今後とも傾注する決意を新たにした次第である。みなさんのご協力も是非ともおねがいしたい。

10 MINAMATA obscura

宮本友介

ユージン・スミスは、その代表的な作品である写真集「Minamata」に次のような序文を掲げている。「これは客観的な本ではない。ジャーナリストのしきたりからまず取りのぞきたい言葉は『客観的』という言葉だ。そうすれば、出版の『自由』は眞実に大きく近づくことになるだろう。そしてたぶん『自由』は取りのぞくべき二番目の言葉だ。このふたつの歪曲から解き放たれたジャーナリストと写真家が、そのほんものの責任に取りかかることができる」(『写真集 水俣』英語版序文)。

スミスは1948年から1954年の間、グラフ誌『LIFE』の写真家として活躍し、フォトエッセイという発表形態を切り拓いた。その表現技法は徹底して「フォトショップする」こと、すなわち暗室での現像作業に重点が置かれていたが、これは当時のLIFE誌のガイドラインに抵触するものだった。報道写真の客觀性という点で、スミスとLIFE編集者との間で衝突があった。結局、アルベルト・シュバイツァーの活動に取材した特集記事「A man of Mercy」において、彼が撮影・現像した写真の多くがボツになったことを機にLIFEを去ることになった。この時、(LIFE誌に対して)「無責任だ」という編集者の批判に対して、スミスが出した答えは以下のものだった:「ジャーナリズムにおける私の責任はふたつあるというのが私の信念だ。第一の責任は私の写す人たちにたいするもの。第二の責任は読者にたいするもの。このふたつの責任を果たせば自動的に雑誌への責任を果たすことになると私は信じている」。

水俣病の問題について、その原因が日本窒素肥料株式会社(現・チッソ株式会社)がおこなったメチル水銀の排出であることはもはや争う余地はない。だが、水俣市自体がチッソ社に財政的に依存していたことで、

〈被害者〉である住民の間でさえ分断を引き起こし、問題を単純な対立の構図として俯瞰することをさまたげている。そして、この分断という「複雑な構図」は私たちの社会の至るところに現れている。

スミスがとったアプローチは〈私〉不在の客観的な説明をではなく、水俣を故郷として生きることで、可能な限り「複雑な状況を正直に理解」することだった。そして、写真を〈真実〉らしきものの光学的な記録としてではなく、ジャーナリストが世界を変えるための「小さな声」として用いることだった。分断されつつある世界をつなぎとめるヒントがあるはずだ。

文献

- W. ユージン・スミス／アイリーン・M. スミス(著)中尾ハジメ(訳)(1980)『写真集 水俣』三一書房.
Smith, W. E. and Smith, A. M. (1975) *Minamata*. New York: Holt.

11 ことばの選択、あるいは洗濯

山森裕毅

精神を病んだ人々のうち少なくない数の人が自分の病名や症状、薬の名称や効果などを事典や書籍、ネットなどで徹底的に調べ上げたり、専門家から学んだりするなかで、自分が今置かれている状態を医学の専門用語で語ることができるようになる。それが自発的であるにせよ、追い込まれてのことにしては、自分の状態を探究することは己の身を守る行為として有用だといえる。しかし、この行為が行き過ぎると医学の用語でしか自分の状態を語ることができず、むしろ自分が医学の一対象でしかなくなってしまうという状況に陥る場合がある。つまり自分ですら自分を病人としか思えなくなってしまうのである。

こうした医療言説への隸従ともいえる状況をゆるゆるとすり抜ける活動として、北海道浦河町にある「べてるの家」で生まれた〈当事者研究〉はワイワガヤガヤ、ざっくばらんなミーティングを日々行っている。その活動のモットーのひとつは、ミーティングを通して「自分のことばをつかまえる」ことである。こうして医療の領域だけに囚われない自分の人生のさまざまな側面に光を当てる自分の言葉を発見していくのである。このことが病気とともに人生を豊かにすると当事者研究では考える。

こうした活動は「ことばの選択」あるいは「洗濯」と捉えることができるだろう。自分のことについて語るのにうまくフィットしたことばを選択することであり、またこれまでに染み付いてしまったあまりフィットしないことばを洗い流すことでもある。ことばの選択が一回でうまくいくことはないので選択しては洗濯し、洗濯しては選択し……を繰り返していく。そのプロセスが自分についての探究になり、それが自分を生

かす（≒活かす）ことにつながっていけば幸いだ。

ことばの選択－洗濯が効果を持つのは何も精神を病んだ人々だけに限らない。決して他人ごとではなく、私自身もまたそうである。私は20世紀のフランス哲学を専門に学んできた者であり、今現在も小さな研究コミュニティでしか通用しない専門用語に塗れている。ところが近年、哲学者の活動領域が広がりを見せたおかげで、私自身も小中学生などの若い人たち、あるいは何らかの社会的マイノリティの人たちとの対話の場づくりに参加する機会が増えた。もちろんそこでは哲学の専門用語など伝わらない。それだけでなく普段何気なく使っていることばがあまりに〈高等教育を受けた日本の成人男性健常者用〉であることに気づかされもある。私の普段着のことばもそろそろ周りから「ちょっと臭うよ～」といわれる時期に来たのだろう。とはいえ、ここでのことばの選択－洗濯は、私がこれから誰と・どこで・どう生きたいのかの選択でもあって、ちょっとビビってしまうな……。

～第4集 「世直し」ノオト（2019年度・冬）編集後記～

第17回研究会（2019年10月30日）で「マザー・テレサに出会って
～私の歩んで来た道 下る道は昇る道～」という演題でお話しください
た是枝律子さんが2021年9月に天に召されました。心より是枝さんのご
平安をお祈り申し上げます。

第5集 「世直し」ノオト（2020年度・夏）

第5集は、第21回から第25回までの研究会（2020年2月～同年7月）における対話から生まれた7編のエッセイをご紹介します。この期間には以下のテーマを通して〈世直し〉を考えました。

第21回（2020年2月26日） 変わりゆく街 釜ヶ崎

第22回（2020年3月25日） 東日本大震災・原発事故の今 9年目の極私的被災地報告—復興はなお遠く、原発事故は現在進行中

番外編（2020年4月22日） オンライン「世直し」研究会リハーサル【オンライン開催】

第23回（2020年5月27日） 今、コロナ禍で【オンライン開催】

第24回（2020年6月24日） 「人種優劣」と植民地主義につながった自然人類学と遺骨返還問題【オンライン開催】

第25回（2020年7月22日） 「世直し」ノオト（2020年度・夏）合評会【ハイブリッド（対面+オンライン）開催】

新型ウイルスの感染拡大を鑑みて、Web会議システムを用いて初のオンライン開催を試みた第23回研究会では「今、コロナ禍で」というテーマで話し合いました。そこでノオト第5集では、参加者それぞれが今この状況で考えることを書き表すことを試みました。

1 新型コロナ流行下のこども食堂への影響について

池田光穂

緊急事態宣言下におけるこども食堂の実態に関して大阪府と兵庫県の事業運営者に私たちは緊急アンケート調査をおこなった。その目的は、大阪、関西ならびに全国におけるこどもたちの生活状況を把握し、こどもたちのさまざまな諸権利が適切に守られることを願い、こどもたちが緊急事態宣言下においても、疾病流行から守られると同時に、諸権利が脅かされないように、その研究成果を、行政・大学・家族・大人に助言することにあった。本調査研究では移動や面談の制約がある中、情報収集方法を検討、郵便とインターネットアンケートを実施してこどもたちの置かれている状況について情報収集した。2020年5月21日までに大阪府と兵庫県で451団体に依頼をして65件（20%）の回答があった。

5月25日に第1回目の速報レポートをまとめて、回答者ならびに関係者に配布した。その結果、平常時はほぼすべての団体（98%）で食事を提供していたが、緊急事態宣言後は約6割の団体で食事の提供を取りやめていた。その理由には使っている場所が高齢者施設や市の施設であるため場所が封鎖されたり使えなくなったりしているからである。高齢者や地域の中での交流を促進するという目的を持ったこども食堂の存在が明らかになった。そして、平常時のことども食堂では、学習支援をおこなっておりそれができなくなったが、緊急事態宣言後は、課題を配布し添削指導をおこなっているところもあった。

論点をまとめよう。これまでの国や行政が果たすべき貧困世帯へのサービスの不足が根本的な問題としてあること。支援活動を行っているこども食堂そのものへの理解や認知も不足している。例えば、学校や教育委員会との連携を図ることができない、そのために支援が必要なこど

もたちを把握できていない、支援を届けることができない、といった問題を抱えている団体が多くあった。新型コロナ流行のような非常時においてその負の影響が顕著にでてしまっていると言える。アンケートの回答には、ネグレクトや虐待を受けている子どもたちもいるのに、安否確認ができない、子どもだけでなく、親たちが大きなストレスを抱えている、また孤立している、といった心配の声が多く挙げられていた。

これらのことから、貧困問題を包括的に取り組む必要性が明らかになった。「国や行政」への要望として、子ども食堂への運営費の補助・支援や、運営に関する対応策（特に責任の所在や指針）の明示に関しても意見があった。今回の調査結果を政府や行政にきちんと伝えることが、アンケートに答えてくださった運営者の想いであると同時に、それを正確に伝えることが私たち調査者の使命であることが認識できた。関係者に謝意を表したい。

文献

上須道徳・池田光穂・松本みなみ・中井知佳（2020）「新型コロナウイルス緊急事態宣言下の子ども食堂と子どもたちへの影響についてアンケート結果の経過報告」<https://bit.ly/3fFsqLk>（パスワード：yseYbYCX8aj3）

2 はじめてのオンライン授業

岡野彩子

コロナ禍で多くの学校がインターネットによる遠隔授業を導入し、異例の対応に追われた。毎日新聞が全国66大学の教員111人に実施したアンケート（同紙オンライン版、2020年5月9日）によれば、従来大教室でしていた講義は、教員が動画を作成して学生が自由に見る「オンデマンド型」が目立った。しかし教員も学生も経験の少ない授業に対して、「教員がユーチューバーになれるわけもない」「5倍は準備に時間がかかる」「過労死しかねない」「自宅に仕事部屋がなく、家族もいる中での講義は難しい」との声が上がった。一方で、演習などはZoomなどWeb会議システムを使った「リアルタイム型」が目立つ。ただし「(サーバーの容量上学生側の画像を映せず)彼らのまぶたが(寝ていて)閉じていてもまったくわかりません」「ほぼ自習と一緒に」と、教育効果に疑問も聞かれる。私も3カ月オンライン授業を続けてきたが、「過労死」という言葉は他人ごとと思えず、布団で眠った日が数えるほどしかない。自分なりに試行錯誤を重ねて作った動画も、視聴率は50%程度のことがある。

オンライン授業の導入から3カ月、その光と影が見え始めた。『ウェーカアップ！プラス』（読売テレビ、7月11日放送）で、2000人の教育関係者をオンラインでつなぎ「教育コロナ会議」を開く桐蔭学園理事の溝上慎一氏（教育学）はメリットとして、不登校などいろんな状況に置かれた子どもが学んでいけることや、学びの早い子どもが遅い子どもと同じ空間と時間で共に過ごす必要がなくなることを上げた。しかし成績が中位から上位の子どもは映像を見て学習している様子が試験や質問から見受けられる一方で、「オンラインは成績の中以下の子どもたちは拾っていない」という。彼らが対面授業の中でどうやって学びを続けていた

かというと、個別の先生が声をかけ、時には叱るといった、生身の関わりの中で展開してきたのである。また、自宅の学習環境の差が学力差に直結しうる懸念も示された。オンライン授業の導入によって、そうした対面授業が支えてきた部分が逆に浮き彫りにされた。

リアルタイム型授業でも、学生は様々な理由からカメラをオフにしており、反応を読み取ることが叶わず、私も並ぶ黒い画面に向かって話しかけている。学生は自分が話す時だけマイクをオンにする。すると、いろんな音が聞こえてくる。鳥や犬の鳴き声、料理する音、子どもを叱る母親の声、電車の音。耳を澄まし、「今日はノドが辛そうだね」などと聞く。学生が住む地域の天気予報も見るようになり、大雨が統けば雨音が気にかかり、「被害は出ていない？」と声をかける。彼らとつながることができる、私にとって大切な時間だ。

先日、授業について匿名アンケートを行った。すると学生のほうが大きなストレスを受けているだろうに、「オンライン授業になってしまい大変な中、毎回丁寧な講義動画とレジュメで対応して下さりありがとうございました」と思いやってくれたり、「とても楽しく興味深い講義で、リアルタイム配信も一度は受けてみたいという気持ちです」と、よりライブに近い授業を望んでくれたりした。ありがとう、これくらいのことしか出来なくてごめんねと、目頭が熱くなった。やはり近くで思いきり愛情を注げる生の授業があるがたいけれど、今はやるしかない。

3 平熱か三度確かめいざ出陣 ケア現場の「三密」越えて

上條美代子

今も地球規模で猛威を振るっている COVID-19 は新型ゆえ未知でエビデンスがないと聞く。しかし、医療は常に未知なるものとの闘いだった筈だ。一般的なインフルエンザや SARS（重症急性呼吸器症候群）MERS（中東呼吸器症候群）とこの COVID-19 は全く異なるか、似ているところはないのか。使えるものがある筈だ。見えないウイルスに医療者も怯えながらこの緊急・重要課題に対応すべく現場は奮闘している。私はせめて彼らの後方支援をしたかったが「高齢者は蟄居、じっとしているのが一番の社会貢献です」とたしなめられてしまった。そこで、私の流儀で奮戦中の後輩たちに陣中コロナ見舞いと称し、美しい写真やエールのことばを添えたハガキや手紙、メールを送った。そのやりとりから数例を紹介する。

小規模病院に勤務する 30 代の A さんは未知なるものへの不安を口にする。頑張るつもりだけど自信がない、何をどう勉強すればいいのか教えて欲しい。部長は私たちのポラリスだから、取り敢えず、「ナンクルナイサー！」の声を聞きたいと。ウイルスの特徴から SARS のガイドラインを参考に吟味し、感染委員会メンバーと活かせるものを考える。近隣病院にも声をかけて情報交換しよう。怖いと言ってもいいよ。正しく怖がろう、と話し参考資料を送った。

関東圏で働く 40 代の B さんから、聴いてくださいよ、から始まる 23 時台のメール。怒りや哀しみが伝わってくる。この 3 月に推されて主任にされたばかりだ。COVID-19 患者受け入れにあたり後方支援として病棟から応援を出し、何とか調整したが、夜勤数も増えオーバーワークが続

いている。PPE（感染症対策のための個人防護具の総称）の確保や作成のため4月度の休日はほとんどなかった。感染者対応のナースは自宅へ戻っていない。上司の看護師長に「この使命感を強要された〈過剰適応〉はスタッフの志気を保ちにくい」と相談したが、何のための主任なのかと厳しく叱責された。4月昇給はなかった。試行期間につき役職手当も未だない。おまけにボーナスも危ういとの噂に心底萎える。報われないのはいつもで仕方ないけれど「なんだかなあ」と。私はBさんへの言葉を見つけられずにいる。

400床以上を有する総合病院で指揮を執る副看護部長のCさんは50代半ば。COVID-19対応のため、急遽、空き病棟を感染対応病棟として開棟。一般病棟から応援を募り、可能な感染対策を講じてスタートした。スタッフは必要を理解していても十分な知識・経験がないこと、家族に対する院外からの声などに不安感と不信感で、通常時には何でもないことに過敏となり、関係性がギクシャクするといったことも起こった。管理者は学んだ通り、日常的に憂慮と焦慮を遮断して「有事」を想定して行動計画を立て指示をするのが仕事だ。病院理念や自分の「軸（是）」として判断したものはこの状況下において倫理的と言えるかと、問い合わせ立てるCさんに深く頷く。

4 「コロナで新時代」だってえ？！

北村敏泰

コロナ禍に対して、人々が社会・芸術活動に知恵を絞っているのは素晴らしいことだが、一方で世の中が「根本的に変わった」とか「ニューノーマル」などと素朴に浮かれているだけではいけないだろう。情報通信技術で人的交流が広がり多くの人がそれを受け入れたからと言って「革命」などというものではなく、道具が新しく、より便利になっただけという過不足ない認識が必要だ。「世の中変わった」という物言いが主に経済・消費活動を基盤にした社会活動を念頭に置いていることを考えれば、根本は何も変わっていない。社会の底辺で生活する人々は相変わらず貧困のままに置かれているし、コロナ禍で失業にさえ追いやられた。ホームレスなら10万円の特別給付金受給も危うい。

医療崩壊で人工呼吸器が不足すれば、持病のある高齢者が「若い人に譲る」といったことが「美談」にされ、これは「役に立たないもの」を振るい落とすというこの社会全体に流れる優生思想の考え方につながるようにも見える。現に「コロナ・トリアージ」として助けるいのちの選別が行われている。このような効率重視の資本主義社会の根幹は揺るがない。コロナ禍で目先の「変化」に右往左往する人々を消費に追い込んで儲けた企業だって、その資本主義経済の盤石な基盤の上で安泰なのだが、「変わった」が主要にオンラインとか情報技術の文脈で言われることにも陥穿がある。

政権が「テレワークによる働き方改革」などとふざけたことを言っても、それは働く人々に広く利益になってはいないし、テレワークで膨大に仕事が増え苦しむ人も多い。ITの便利さと危うさをきちんと認識することが必要で、健康や感染の有無などという究極の個人情報が国家レベ

ルで管理・監視される恐れもあり、そんな情報によって差別や排除が広がる危険は現実のものとなっている。

「便利」と言えば、「濃厚接触」が記録され感染情報が相手方に自動送信されるスマホのアプリ。注目すべきはこのシステムが厳密には人間同士の触れ合いではなく、その人が持っているはずのスマホ同士の接触を認識するという点。つまりITのシステムでは、人間そのものではなくその人に関するデジタル情報とそれを収納するスマホなどの装置が「人格」の代理をするということが興味深い。

突き詰めれば生身の人間が不在でもいいわけだが、“コロナ自粛”でレストランが導入したシステムでは、入店するとITが空席に案内し、客は電子メニューからスマホで注文と代金決済をする。そこで料理を店員が持つて来るのだが、今後はベルトコンベアが運ぶようになるかも知れない。店に入る意味は単純に「料理を食べる」ということだけになる。こんな店に行きたいと思うか。これは本来複雑な人間の目的的行為を単純化し単一の目的にしか対応しない発想だが、機械化とは概ねそうだ。銀行のATMも産業ロボットも自動販売機も。あの忌々しい「ナビダイヤル」もその最たるものだ。

付き合うのが鬱陶しい他者は不要だが、頭が1と0とで出来たこの単純発想ですべて満足か？ 技術はあくまで手段・道具であり、事の本質まで変化したかのようには諸手を挙げて拝跪しない方がいい。社会の格差を拡大あるいは隠蔽し、矛盾を増大させる面もあることに注視したい。

5 命の価値（後期高齢者のつぶやき）

熊野以素

コロナ禍の最中、目を疑うようなニュースを読んだ。

一つはれいわ新選組の公認候補が「高齢者を長生きさせなくてはいけない」という政策をとっていると若者たちの時間の使い方の問題になるなどと主張。「命、選別しないと駄目だと思う。その選択が政治。選択するんであればもちろん高齢の方から逝ってもらうしかない」（朝日新聞DIGITAL、2020年7月9日）などと述べた。これについてトリアージを引き合いにして容認する意見もある。多くの負傷者重症者がいる中で、救命できる数は限られている。誰を救うか選ばざるを得ない。これがトリアージで大災害時などに突き付けられ問題である。救命側の人間は苦渋の選択をする。涙を流して「お父さんの命は諦めてください」と医師が言う。コロナ禍のイタリアなどで実際にあったという。

しかし、トリアージと命の選別を政治がするというのは全く違う次元である。人の命をあらかじめ年令でわけ、救われるべき命とそうでない命を分けるというのは、人の命に価値をつける論理である。これが肯定されれば障害を持つ人と持たないとの命の選別も、自国民と他国民の命の選別も当然ということになる。「ナチス」の論理の採用である。「政治が行う」というのはそういうことなのである。

今一つは命を譲るカードのニュースである。大阪大学招へい教授で医師の石藏文信氏が「『高齢者が万が一の時、高度医療を若者に譲るという意志』を示すことができる『譲カード』を作成しました」（Yahoo!ニュース、2020年5月11日）と発表した。このカードの普及を図ろうという動きも起きているという。これは「善意」から出たものだそうだ。確かに、もし自分がコロナに感染し、若い人に高度医療を譲るかどうか聞かれた

ら「譲ります」というかもしれない。しかし、それをカードにして普及させていこうということは高齢者に「自死」を勧める運動と同じである。日本のように同調圧力の強い世界ではこのようなカードが流行れば、多くの高齢者は心ならずもサインし「コロナにかかったら死ぬしかない」ということになる。かつて若者が特攻隊に志願せざるを得なかつたように。

二つのニュースの背景にあるのは、経済的価値を生み出さない高齢者＝多くの診察券を持ち、数種の薬を飲み、働きもせず、食べてばかりの私自身＝社会のお荷物は、「若者に席を譲れ」という声である。高齢者施設は河川敷近くに作られることが多いという。万一の場合真っ先に犠牲になる場所に…。

今は、政権が推進してきた保健所の縮小や病院の再編・統廃合が医療不足を生んでいるという事実に目を向け、「公衆衛生・医療の充実こそが政治の役割」だという声を大きく上げるべき時である。経済最優先の政権にとって都合の良い「命の選択」論議などをしている場合ではない。

6 柔らかく耐えること ～コロナウィルスと祈りと音楽～

滝奈々子

2020年々頭から世界中の人びとは新型コロナウィルス（以下、コロナ）に玩弄され、生活の様相がすっかり変化してしまった。

コロナのニュースを初めて知った日には、レッスン室でベートーヴェンの『悲愴』を弾き、涙を流した。その後、しばらく対面レッスンをしていたが、その際も『悲愴』Grave部分を弾き聞かせていた。武漢で亡くなった方、苦しむ方を思い、パンデミックになることを想像した。Graveの序奏部分の激しいハ短調の主和音を叩きつけるように弾き始め、左手のトレモロに合わせて右手でメロディーをのせていく。どこにぶつけたら良いのかわからない、悲しみをピアノで表現したかったのかもしれない。

しかし、やがてコロナが世界中に広まり、春先に我が身にも緊密な状態となって来ると、なぜだか柔らかな気持ちになってきた。カトリック信者である私にとって大きな支えとなったのは、日本カトリック司教協議会が、「新型コロナウィルス感染症に苦しむ世界のための祈り」を提示したことであった。それによって、教会へ行かなくとも、日々この祈りを聖母マリア様へ繰り返すことで、世俗世界の私たちは不自由で恐怖の毎日を耐えることを受け入れができるようになったのである。

もう一つの理由に、音楽教室の生徒たちの多くがZOOMなどを使い、レッスンを継続してくれたことにある。レッスンも休講になると思っていたが、このように辛苦の世の中にあり、音楽を希求していたことを共有できる生徒や演奏者たちから励みをもらった。その頃には、もう『悲愴』を弾くことはなく、ルイ15世の宮廷作曲家に任命されたJ-Ph. ラモー

の「やさしい嘆き」を弾くようになっていた。

「やさしい嘆き」は、『悲愴』よりもおよそ100年前にフランスにて作曲され、ニ短調の二つの副主題をもち、美しい装飾音に彩られた、題名のとおり、平穏で心に響く作品であり、小鳥のさえずりや遠くにある馬車の音などが聞こえてくるような、自然の優美さを表現した音楽である。ベートーヴェンが聴覚を喪失する苦しみに苛まれているとき書かれた『悲愴』を弾くことが、コロナ禍にある私たちの支えになるとは思えなくなっていた。コロナは恐怖だが、「やさしい嘆き」のように柔らかく、日々耐えることで、世界中の人がとつながりながら、リモートでありますながらも祈りを深め、音楽を享受し、演奏することで世直しに関わっていきたい。

7 アマビエは笑う

日高悠登

「アマビエ」とは疫病の流行を予言すると共に、自身の姿の写しを人々に見せるよう告げて海中へ去った、江戸時代に出現した妖怪である（京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪（アマビエの図）』（翻刻））。新型コロナウイルス感染拡大がこのアマビエに注目を集める機会となり、加えて情報化社会を生きる中で、日々得られる膨大な情報が感染拡大を意識する導火線となったと言える。ウェブ情報には感染者数の増加、行政による感染防止への取り組み、マスクの品薄と高騰などが含まれ、さらにこれらの情報を基にした個人意見の増加は事態の緊迫さを形成するに至った。

一方では、感染拡大に便乗した虚偽情報の流布という迷惑行為も例外ではなかった。「緊急事態宣言」発令による自粛生活以降、小売店へ行けば虚偽情報の影響により大量のトイレットペーパーが買い占められており、単に購入したかっただけの私は驚いたが、対応に苦慮している店員の姿を見て同情を覚えずにはいられなかった。私は学生時代にメディア・リテラシーとクリティカル・シンキングを学んだこと、そして情報環境に身を置いていたことから、自然と情報を吟味する習慣が身に付いていたことが幸いしたのか、この虚偽情報に左右されて行動することはなかった。

今回の状況を踏まえて、誰しもが情報を容易に入手する環境にいると言える。しかし、その環境に身を置きながらも情報を吟味する行為を怠っていることが目立った。情報化社会は私たちに虚偽情報と対峙する義務を課したように見えるが、不特定多数の人々が情報を容易に入手して際限なく発信できる限り、現状改善には至らず、守られない標語とそ

う変わりないと言えよう。人間を介して跳梁跋扈した虚偽情報は増殖するウイルスと同等の存在となり、嫌悪感と不快感を抱かせるに十分であった。

新型コロナウイルスは、おびただしい感染者と死者を増やし続けている背後に、人間の浅ましい心理と歪んだ部分を炙り出す機会をも同時に与えた皮肉な存在と言える。後世の人々は疫病が流行る度に、令和時代の人々の行動へ注目するはずである。後世の社会が現在と何も変わっていなければ、アマビエは再び話題に上るであろう。もしかすると、アマビエは実際に姿を現す可能性も考えられる。その時、アマビエは一体何を思い、何を伝えるのでだろうか。時代が変わっても進歩していない人間の愚かさを嘆きながらも笑い、懐の深さを示してくれることを望みたい。

最後に、世界中で新型コロナウイルス感染症とその後遺症に苦しむ患者の方々、闘病の末に亡くなられた患者とその死を悲しむ方々、そして医療現場の最前線で戦い続けている方々に最大の敬意と哀悼の意を表したい。

百鬼夜行から水木しげる『ゲゲゲの鬼太郎』まで、日本人の歴史は妖怪と共にあった。今回紹介する「アマビエ」もコロナ禍と共に注目されている妖怪である。その姿を写した図が京都大学附属図書館に所蔵・公開されている。本図を基に「アマビエの全体像」を作成して次頁に添えた。

アマビエの全体像

- ・全体的に人魚に近い姿
- ・尖ったくちばし
- ・上半身を覆う鱗
- ・腕部に相当する部位はない
- ・体全体を覆う頭髪
- ・三又に分かれた脚部（ヒレ）
- ・特徴的な目
- ・三又に分かれた足部（ヒレ）



出典：京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪（アマビエの図）』

本図の右側部分では、アマビエを次のように説明している。
(同図翻刻を基に現代語訳)

肥後国（熊本県）の海中に毎晩、光る物が出る。その役人が行って見たところ、図のような者が現れた。「私は、海中に住むアマビエという者である。今年から6年間、諸国は豊作となる。しかし、病が流行るので早々に私の写しを人々に見せなさい。」と言って、海中へ入った。

アマビエが現れる前に現れていた光は、目撃していた人々に不可思議さと清浄な印象を与えていたのであろう。その光に加えて、アマビエ自身も豊作の具体的期間と疫病の予言という貴重な報せをもたらしたことから、ありがたい妖怪とみなされて、その姿と言葉は記録するだけの価値があったことをうかがわせる。

アマビエはその姿形から水に深く関わる妖怪のようであるが、陸地に関する予言のみを残して去ったことも興味深い。その姿を現すまでに海水を通して、あるいは海の生き物たちがもたらす報せから、人間では判らない陸地の変化をいち早く察知出来たのではないか、そのような物語を想像させられる。今後も、アマビエのような妖怪が社会状況の変化に応じて再発見されることに期待したい。

引用文献

京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪(アマビエの図)』および同図翻刻
京都大学貴重資料デジタルアーカイブ(「新聞文庫・絵」)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000122> (2020年7月22日閲覧)

第6集 「世直し」ノオト（2020年度・冬）

第6集でご紹介するのは、第26回から第31回までの研究会（2020年8月～2021年1月）における対話をもとにじっくり考えて綴った10編のエッセイです。この期間は以下のテーマを取り上げました。

第26回（2020年8月26日）「戦争と平和」【オンライン開催】

第27回（2020年9月30日）「世直し」うた会【オンライン開催】

第28回（2020年10月28日）観劇を通して世直しを考える ～くるみざわしん作『同郷同年』～

第29回（2020年11月25日）世直し研究会メンバーの新著紹介【オンライン開催】（1）熊野以素『“奇天烈”議会奮闘記—市民派女性市議の8年間—』（東銀座出版社、2020年9月）（2）北村敏泰『搖らぐいのち一生老病死の現場に寄り添う聖たちー』（晃洋書房、2020年11月）

第30回（2020年12月23日）「世直し」忘年会～1年の振り返りと新年に向けて思うこと～【オンライン開催】

第31回（2021年1月20日）「世直し」ノオト（2020年度・冬）合評会【オンライン開催】

コロナ禍にあって、上記の研究会のほとんどがオンライン開催となりました。「世直し」ノオト第5集では「今、コロナ禍で」というテーマで特集しましたが、第6集でもこの状況に鑑みたエッセイ——たとえば対面機会の減少が与える影響や、新たな人との接し方の可能性、今こそ求められる力ある言葉についてといった、コミュニケーションに関わる問い合わせを投げかけたものなど——が多く見られます。

1 前編：コレラの時代の愛

池田光穂

「苦いアーモンドを思わせる匂いがすると、ああ、この恋も報われなかつたのだなとつい思ってしまうが、こればかりはどうしようもなかつた」。これは、ノーベル文学賞作家ガブリエル・ガルシア＝マルケスの作品『コレラの時代の愛』（木村榮一訳）の冒頭の文章だ。匂いを感じたのは81歳になる医師フペナル・ウルビーノ博士であり、亡くなったのはチェスの友人ジェレミーア・ド・サン・タムールである。苦いアーモンドを思わせる匂いとは、失恋の自殺用でのシアン化合物の燻蒸した時のものである。だが、老練な医師のチェスの相手だからジェレミーアは、報われない恋で亡くなったのではない。高齢で戦傷による身障者でもあつた彼は高潔で、検視の助手であった若い医学生に故人が「無神論の聖人」に値すると彼の人格を褒めているからである。ウルビーノ博士が、生涯にわたり診てきた検視で苦いアーモンドの匂いがする自殺のケースで、失恋が原因以外なのは、彼の長い医師の経験のなかでも初めてのケースであったからだ。失恋が命を縮めることもあるが、執念深い片思いが半世紀もたつて成就することがある。それがこの『コレラの時代の愛』なのだが、ここからヒントをえた僕は『コロナの時代の愛』について考察しよう（後編を参照）。

さて『コレラの時代の愛』は、コレラが蔓延する20世紀初頭の南米コロンビアのカルタヘナを舞台とする奇妙な老人のラブストーリーが展開する。ジェレミーアの葬儀後に、逃げたペットのオウムを樹上に追いかけて梯子から落下しあっけなく亡くなったウルビーノ医師。その寡婦フェルミーナは、かつて彼女が13歳の時に4歳年上だった貧しい郵便局員フロレンティーノと駆け落ちしたが彼女の父親によってその仲を割か

れ、フランス留学帰りのコレラ治療の専門家ウルビーノ医師と結婚させられた経験をもつ。もちろん土地の名士で裕福な二人は幸せな老後の人人生を送りつつあった。その葬儀が終わってまもない頃に今は、河川運輸会社の経営をしているそのフロレンティーノが51年後に寡婦になったばかりのフェルミーナのところに登場し、永遠の愛を「再度」誓ってくれと迫る。

小説ではフェルミーナは当然のように激昂する。しかしこれまた異様なことにくだんのフロレンティーノはその純愛の成就を待つ51年の間になんと六百人の女性との恋愛つまり愛の情交一を楽しんできたのだった。はてさて物語の結末は?! それはみなさんのために取っておこう。

僕（筆者）はいったい何を世直し研究会の諸兄諸姉に伝えたいのか？

それは、このカルタヘナというカリブ海に面した熱帯—コレラは激しい下痢と発熱で命を奪う—における奇矯なラブストーリーが、この時代—コロナは重篤な呼吸器不全と発熱で命を奪う—にもまた新たな社会的想像力の可能性をもつ、と言わんがためであった……（後編に続く）

文献

ガブリエル・ガルシア=マルケス（1985）『コレラの時代の愛』木村榮一訳、新潮社。

2 後編：コロナの時代の愛

池田光穂

(承前) 人騒がせなことにコレラとコロナの地図(駄洒落)のタイトルは、ある金融系の財団の2025年の大阪・関西万博を見据えた健康問題を考えるセミナー講演のものとして僕が意図的に選んだものだった。ガルシア＝マルケスの小説のコレラの時代は老いらくの恋の奇矯さ—性愛表現もあるが高齢の寡婦がその恋人の入れ歯を洗ってあげたりボタンつけをする情景描写が秀逸に思える一を謳ったが、コロナの時代の愛もその奇矯さにおいてはひけをとらない。三密に代表されるように、一番大切な人と最も距離をとらなければならないからだ。

BBC 英国国営放送局が、コロナ流行期の性行為は後背位がいいとか、ベッドの中でもマスクは着用したほうがいいと真面目に報道する始末だ。つまり最愛の人を感染リスクに曝してはならないということだ。妊娠や去勢という難局を乗り越えて聖職の道に復帰してエロスなのかアガペーなのか分からぬ歴史に残る恋愛を成し遂げたアベラール(1079-1142)とエロイーズ(1100?-1164)の至上の愛よろしく相手を思う気持ちこそが何よりも大切になったのである。使徒パウロのコリント信徒への第一の手紙(13:13)「最も大いなるものは愛である」こそ、コロナの時代にふさわしい文言である。

講演では海外のノーベル賞の向こうを張って日本で歴代3番目の受賞者である川端康成の短編小説『眠れる美女』に登場する江口老人を取りあげる。解説をした三島由紀夫は「形式的完成美を保ちつつ熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品」とまで絶賛する。三島も言うように、これは若い女性とただ添い寝をするだけという江口老人が、その刺激を受けて自分の過去の性愛経験(ヰタ・セクスアリス)

を夢に見るという経験を描写する屈折した純文学である。

コロンビアの老人たちの恋愛と、日本の社会的地位のある老人の妄想愛（イメクラ）にそれぞれあるものとないものがある。前者には性交を含めた情交があり、後者にはそれがない。また前者は男女の具体的な恋愛だが、後者は無意識にまで分け入る抽象的な性愛の世界である。そこから、敷衍して会社の役員や経営者などが多い金融系の講演会で、日本のかつての経済的パワーとはこのような相手のいない観念による一人相撲のような中年～壮年男性の性愛だったのではと（猛省を促すつもりで）投げかけるつもりであった。ダイヴァーシティの時代、若年者も高齢者も男女が平等に社会参画する時代には、ガルシア＝マルケスが描いたコレラ時代の愛こそが我々に「ふさわしいもの」なのだ、と。だがこの講演内容を事前に察知した事務局は、内容が趣旨に「ふさわしくない」という理由で翻意を僕に求めてきた。事務所の趣旨を汲んで無難な内容（実際の映像プランBは<http://bit.ly/3sbru7x>）に差し替えた。

読者の皆さんよ、ご心配ありがとう。だが、ちゃんとHP（<http://bit.ly/3fxL092>）にその内容（プランA）を掲載し、YouTubeに動画（<https://bit.ly/3ngujBR>）を掲載してある。ご覧アレ!!

3 駐れとは面白きものなり

井上こう

「魔界転生」や忍法帖シリーズで有名な山田風太郎の『戦中派不戦日記』をパラパラ読んでいたら、コロナ禍のいまの日本と似ている部分があって面白かった。風太郎は1945年当時23歳の医学生で東京在住。微兵検査は肺浸潤で不合格になっていたと橋本治による同書解説文にある。同書は1945年の丸一年間に書かれた全く文字通りの日記を収めていて、肩がこらない文章なのと、現実認識が醒めているところが面白い。わたしが読んだのはほんのはじめのほうである。

1945年2月17日の記述：「九時過B29また一機、伊豆に入り山梨に入り東進、さらに南下して相模湾より退去。この両日それぞれ千機を超ゆる空爆を味わいしあとにては、B29の一機二機のごとき屁とも思われず。駻れとは面白きものなり」。

2021年の1月現在、新型コロナ検査陽性者が東京であつというまに2000人を超えたことには驚いた。けれども、驚いただけで怖いとか緊張を感じるとかはなかった。最近、数字がただごとでなくなればなくなるほどよそごとの感じ方になってしまうのはなぜだろう。

1945年2月10日の記述：「先日の都心爆撃に於て死者七百、負傷者一万五千なりと。中天に吹っ飛びし者あり、木ッ葉微塵となりし者あり、石に打たれて慘死せし者あり、顔半分打碎かれ、腸ひっちぎれし者あり、白けて石地蔵のごとく転がりて死せり者あり等種々噂しきりなり。語る者も聞く者も『生きて』あれば、ともに笑みつつ語り、また聞く。余もまた然り」。

2021年の1月現在に限らないが、自戒めいたことを言えば、やっぱり人は人のことをたいして想像しようとしないし、安全地帯からああだこ

うだ言いたいものなのだ。ただ、安楽な場所と大変な場所はまだになっている。安楽だと思っているうちにゆでガエルになっていることもある。

1945年1月4日、新聞論調に：「昨日までは、比島戦は日米戦の天王山なり、断じてルソン米に渡すべからず、との叫び全面を彩りしが、本日より俄然として比島一都邑の得失は二の次なり。否、比島そのものも問題外なり、ただ日本の欲するは米軍の出血、大出血なりとの調子に一変す」。

2021年の1月現在、この3週間が山場とか正念場とか天王山とか、これまで何度も聞かされてそのたびに結果ははかばかしくなく、なかった話のようにされて、言葉が軽い。

のぼせあがるような勇ましい言葉も困るし、迷走と見ないふりで力が入らない様子も困る。それらに馴れてしまったのだろうか、気づいたらわたしのなかに怒るという心のはたらきが見当たらなくなっていた。これはこわいことだとほんやりした頭で気づいた。筋道を丁寧に身体にためて、冬こそ「抵抗力」を養いたい。

文献

山田風太郎著『戦中派不戦日記』角川文庫、2010年刊。

4 誰も置き去りにしない授業

岡野彩子

コロナ禍で都市封鎖の措置を余儀なくされた時、ドイツのメルケル首相やイタリアのコンテ首相など欧州諸国のリーダーは明確な対処方針を説明し、国民にこう語りかけた。「誰も置き去りにしない」。これは国連の持続可能な開発目標（SDGs）の誓いすなわち約束の言葉でもあり、もっとも脆弱な立場の人びとに焦点をあて、「世直し」の目標を定めたものだ。前例のない都市封鎖下における魂の記録『武漢日記』（河出書房新社、2020年）の中で著者の方方は、「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」と綴っている。今、個人が、地域が、国家が、世界が、るべき姿を問われている。

未曾有の災厄と真摯に向き合ったこうした力ある言葉は、いわゆる「コロナ疲れ」が出来ていた私の心を揺さぶった。前回の「世直し」ノオト（2020年度・夏）では「はじめてのオンライン授業」（Co* Design 9、2021年1月）について書いたが、秋学期からは対面授業も部分的に再開し、対面、オンライン、両方を併用する「ハイブリッド」という三様の形式で授業を行うことになった。これにより、準備に加えてふたたび通勤時間が必要となり、慢性的な睡眠不足に陥ってしまった。

心待ちにしていた対面授業では、学生がそこに居てくれることの幸せを、しみじみと思い知った。私の言葉に頷いてくれたりすると、ご褒美をもらった子どものように嬉しくなり、活力が湧いてくるのを実感する。しかし、基礎疾患があるなどさまざまな事情で対面授業に出席できない学生もいる。そうした場合、授業の録画とレジュメ等の教材を配信して自由な時間に受講してもらうオンデマンド形式か、教室で対面授業を進行しつつオンラインで同時に授業を配信する「ハイブリッド」形式での

対応となる。私の場合は、100人規模の講義は対面とオンデマンドを組み合わせ、小規模の演習はWeb会議システムMicrosoft Teamsを用いたハイブリッドで授業を行った。

オンデマンド形式では双方向性を持たせるため、授業毎に課題を設けて学生にメールで連絡する。事情はわからないが、しかし返信がないこともある。そこで、せめてもっと魅力ある授業にできないかと、自分でも授業録画を視聴し、話し方やパワーポイントの活用方法など改善に努めている。ハイブリッドでは、PCや画面を投影するスクリーン、マイク内蔵の広角カメラといった設備をいかに上手く活用できるか摸索中である。カメラでホワイトボードを映すと反射して見づらい時は、Teamsのチャット機能を使用して板書を行う。教室での学生の発話をオンラインで聞き取りにくい場合は、そのつど私が復唱する。対面授業を進行しつつ遠隔の配慮を行うため、つねに並列思考が必要である。オンラインでは——とくに学生がカメラをオフにしていると——非言語コミュニケーションが成立しない。そのため指名して発言を促すといった時間も確保せねばならない。対面とオンラインを同時に使う新たな手法を見出していくことが求められる。離れていても一体感のある、そんな学びの場を学生と共に創っていきたいと願う。

「誰も置き去りにしない」——そう祈る思いで、心に誓いたい。

5 「新しい生活様式」

上條美代子

厚生労働省は新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を2020年5月に紹介した。一人ひとりの基本的感染対策、日常生活を営む上での基本的生活様式、買い物・娯楽、スポーツ等・公共交通機関の利用・食事・イベントなど各場面別の生活様式、働き方の新しいスタイルなどだ。だがどう新しいのだろう。一時的ではなく長期化を見据え、衛生や清潔の概念を集団そして個人の行動レベルに落とし込みたいのか。「三密」の回避ほか、厳しい行動規制を伴う。しかし「新しい」とまで言えるのか。非常時、人は混乱のまま行動するか、自ら考えず指示を待ち同調あるいは規範に従う。だが専門家の意見も分断しているので最終的には自己流に取捨選択するのが現状だろう。

看護職の後輩たちも同様だったので「正しく怖がろう！」と呼びかけつつ、東日本大震災の災害支援で避難所に呆然と立ち尽くした場面を思い出した。看護師は冷たい沢の水を汲み病院の床を拭き清め、清潔・不潔を分け環境を調えた。黙って被災者の肩を抱き脈をとり、お気持ちを調べていった。最新の機器はなくても素手の確かな看護があり、生命力を支える看護はできる。看護職はいつも看護の普遍性について考えているのだ。

ナイチンゲールによると看護は「自然が患者に働きかけるに最も良い状態に患者を置くこと」だ。病気は「毒されたり衰えたりする過程を癒そうとする自然の努力の現れでありそのときどきの結果」だ。健康とは「良い状態をさすだけでなく、われわれが持てる力を充分に活用できている状態」である。そして看護には「五つのものさし（指標）」がある。
(1) 生命の維持過程（回復過程）を促進する援助 (2) 生命体に害と

なる条件・状況をつくらない援助（3）生命力の消耗を最小にする援助（4）生命力の幅を広げていく援助（5）持てる力・健康な力を活用し高める援助だ。

例えば「風邪っぽい時の対処法」は「即受診」もあるが「眠る、安静にする」「温かいものや栄養をとる、体力をつける」「保温する」「嗽や歯磨き」「薬を飲む、生姜湯ほか薬湯を飲む」「便通を調える」など百人百様だ。体験からの傾向と対策を振り返り、体話（造語：心身のコミュニケーション）し、風邪の段階、条件下で各人が自由に何が有効か選択できる。結果は信頼に応えてくれる身体で、自分が主人公だと実感できる。だから3ヶ月毎に自分事として「生活様式」をチェックする。未病状態の今、これを「生活の様式」や「五つのものさし」の視点で見てゆく。「生活様式」ではものさし（1）（2）（3）が中心だが（4）（5）は免疫能を高め強化できる。看護を活かした日々の「生活様式」はひとの体力を維持、耐力を培い健やかに生き抜く力につながると考える。コロナ禍においても、このナイチンゲールの自然体の看護論が有効であることを日々私が確認していることは、言うまでもない。普遍的な原則はコロナ禍の「新しい生活様式」下においても有効である。

文献

金井一薰（1993）『ナイチンゲール看護論・入門』現代社.

6 コロナで揺らぐいのち —「命の選別」にどう向き合うか

北村敏泰

コロナウィルス感染症の拡大で重症患者向けの病床が逼迫し、高齢で基礎疾患のある患者への人工呼吸器など救命装置の使用を断念せざるを得ない、という医師の衝撃的な証言が報道された。感染が激化するヨーロッパなどでも既に、治療の期待効果によって患者を振り分けるトリアージが行われているという。いわば究極の「命の選別」のひとつだが、社会が疫病に揺らぐこのような状況で、私たち一人ひとりが「いのちの重み」を今一度考えてみる必要があるだろう。

トリアージは「助かる見込み」が大きいかどうかで選別するが、実際にはより長く生きられるなど「助ける値打ち」があるかどうかとほとんど区別はできない。それは「役に立つ」かどうかで命を選別し、例えば障がい者を抹殺するような優生思想と根本的にはどこかでつながる危険性がある。大事故や災害でもトリアージが実施されているが、社会的にあまり問題にされないのは、国民全体にとって「明日はわが身」の心配が濃厚なコロナ禍と違い、どこか「よそ事」に見られるからだ。

しかし国による医療支援が不十分な状況では、現場で数少ない治療資源よりも重症患者が多くなれば、実際に「選択」を迫られる。そこでどうするか。「緊急避難」概念が援用されるが、それはやはり侵害される法益と守られる法益の比較均衡の発想だ。ここで哲学倫理学の「トロッコ問題」が想起される。暴走するトロッコの進路上に分岐ポイントがあり、片方の先には5人もう一方には1人の作業員がいる。ポイント操作でどちらを救い、どちらを犠牲にするかという問いだ。「ポイントをニュートラル状態にしてトロッコを脱線させ両方を救う」との回答はあくまで

空想の世界だ。

現実のコロナ病床でいかなる選択があるのか。「命の価値」による選別ではなく、「その患者への思いの強さ」で選んでしまうかもという“究極の答え”が医師から吐露されることもある。選別の公的基準を示すべきだと意見もあるが、それは「安楽死」論議と同様、個々の本人の意思を離れて「生きる価値」が少ないと見なされる人を切り捨てる“客観的線引き”になる危険性が大きい。現に「安楽死」を合法とする国では対象を終末期患者から高齢者、障がい者へ拡大する動きがある。

京都でALSの重症女性患者の囑託殺人事件が明るみに出た後に、彼女をここまで追い込んだ状況を問題視するのではなく、「安楽死法制化」を言い立てるような言説が流布されたことでも分かる通り、個別の人の苦悩に向き合はずに制度一般を振りかざすことの陥穰がある。生命倫理研究者で重度心身障がいの長女がいる女性は「娘がもしコロナに感染したら『助けて』と意思表示さえできず、治療の価値がないと勝手に見なされて見捨てられるのではないか」と訴える。

元凶は“トロッコの暴走”を招いた日本の脆弱な医療体制、グローバル資本主義下で経済を優先し、巨額の軍事費を計上しながら医療福祉を削り続ける政策の犯罪的欠陥であり、まずこれを問題視すべきだ。その上で、選択に追い詰められる医療者、そして何よりも治療を受けられず諦めざるを得ない患者を出さないよう、その立場に思いを致すことが第一に求められているのではないか。

7 言葉の力

熊野以素

「歴史上永遠の昔からこの世界に最も偉大な変革をもたらしたのは語られる言葉の魔力である」。こう語ったヒトラーは演説の名手であった。その演説に感動し熱狂した普通の市民＝多数のドイツ国民が彼を独裁者の地位に押し上げた。それほど魅力的だった彼の演説の特徴は？

一つはワンフレーズである。「ドイツ人は偉大な民族だ」「支配民族だ」「ドイツは勝利する」。面倒な説明はない、単純な言葉を何度もくりかえす。常に敵を作りあげ、攻撃する。根拠などは不用、嘘も100回言えば真実になる。

その上、巧みなジェスチャーとともに叫ぶのは人が心の奥に押し込めている差別意識や傲慢さを解き放つ言葉である。「ユダヤ人は寄生動物である」「排除するしかない」。

ヒトラーに学んだとしか思えないのがトランプ前大統領である。ワンフレーズをくりかえし、デマを刷り込み、「議会に向かって行進を」「強くあれ」。その結果が暴徒によるアメリカ議会乱入。そのほとんどが白人であった。「不法移民が麻薬を持ち込む」「国境に壁を作る」。トランプの言葉がヘイト意識を解き放ったのだ。

扇情的な言葉は恐ろしいが、政治家にとって言葉は大切である。

2回目の緊急事態宣言の記者会見で菅首相は下を向いて原稿を読み上げた。言葉には感情がこもっていない。表情も終始硬い。そのうえ、言い間違える、質問にまともに答えない。

思えば首相の官房長時代の決まり文句は「指摘は当たらない」「お答する必要を感じない」だった。首相になっても学術会議問題などで同様な発言を繰り返した。政治家なのに演説が下手との定評があるそうで、

もともと彼は自分の「言葉」をもたない人なのだ。そのうえ、緊急事態宣言は首相自身の決断ではなく、知事たちや専門家に迫られてやむなく出したものらしい。「GOTO キャンペーンや五輪の邪魔になる宣言は出たくない」のが本心。内面が透けて見える空疎な言葉で語られた宣言が国民の心に響くはずがない……

対照的なのはドイツのメルケル首相である。昨年3月の国民向けスピーチでは「自由の制限」を強いることの心苦しさを滲ませつつ、丁寧な説明と共に、自粛を求めた。終始前を向き、口調はあくまで物静かであった。12月の議会演説では一転、目に涙をうかべ「今年のクリスマスを我慢すれば、来年はおじいちゃんやおばあちゃんと皆でクリスマスが祝えるかもしれない。でも我慢しなければ、最後のクリスマスになるでしょう」と訴えている。内面から発せられる言葉、心のこもった言葉、相手の状況を思いやって語られる言葉こそが人の心に届く。これが本当の言葉の力である。

この危機の時期、国民に語りかけることさえできないこの首相に政治を任せてよいのだろうか。

8 抱きしめる —コロナのなかで看取るということ

滝奈々子

父が帰天してから1ヶ月が経過した。6ヶ月ほどの闘病生活を共に過ごしてきたが、その間コロナという疫病は私と父のあいだに大きな障害となった。父がまだ動け、元気だった頃は、自宅療養をしていたので、好きなだけ会話をし、彼の体をさすり、家族や知人などを招いて比較的賑やかなひと時を持つことができた。そのころは、父の眼に力があり、まさか病魔がそこまで身体を蝕んでいるとは想像もできなかった。

自宅での闘病生活が無理だと診断され、入院を余儀無くされてからは、旧知の病院だったこともあり、特別に1週間に1度、10分ほど面会を許されるようになった。その際も父は、家族や仕事を心配し、逆に励ましを与えてくれた。しかし、私は彼に触ることは許されなかつた。手を握りたい、浮腫んだ足をマッサージしたい、と願ったが、コロナを理由に医師や看護師たちに見守られている状態の面会だったので、それはできなかつた。

病状が悪化し、谵妄状態となつても、この短い面会は許されていたが、彼の温もりを感じることができなかつた。私は少しでも父の大きな胸（その時にはもう、小さくなつたが）に頭を乗せていたかった。

年の暮れの真夜中に電話が鳴り、血圧が大分低いので急遽来院するよにとのこと。遠く離れた病院に入院していた父へ会いに始発で向かい、何とかまだ息のある、父に会うことができた。その際、医者、看護師さんには止められたが、父を抱きしめたい思いという勢いで抱きしめた。その際には、血圧が下がり続けるばかりであったが、医者たちもその意味について教えてくれず、親戚の医者へ電話をしても、無言であり、

切なさを感じた。思い余って夜中に友人の看護師の方に連絡したところ、「きっと、ゆっくりと息を引き取られるかもしれないでどうから、あなたがしてあげたいことを、して差し上げて下さいね」との心強いお言葉を頂き、父が好んで私が歌うのを聴いていた、プッチーニの1幕オペラ『ジャンニ・スキッキ』中の“*O mio babbino caro*”（私の大好きなお父さん）を大きな声で何度も歌い、抱きしめ、彼が天に召されるまで一緒に過ごすことができた。

コロナ禍の中での看病、看取りは想像以上に辛苦に包まれていたが、家族、友人、大学の上司、または見知らぬ方にまでお力を頂いた。私はできる限りの愛を父にそそぎ、本来触れてはならないのに、抱きしめて、帰天させたことに、悲哀のなかに少し温かいものを感じる。この私の経験が独りよがりの述懐にならず、全く同じではないにも関わらず類似の離別の経験をした多くの人たちにとって、自分自身のトラウマを再演するためではなく、受苦の共有を通して、反省的に、その苦悩からの克服のためになることを祈りつつ、この文書を閉じたい。

9 コロナ時代にコスタリカの「世直し人」を想う

額田有美

2021年を迎えて間もなくのある夜、ベッドサイドのスマートフォンが一通のメールを受信した。アメリカ合衆国に暮らす友人から届いたそのメールには、「電話番号を教えてくれる？ WhatsApp は使ってるよね？ あなたにメッセージを送りたいんだけど」と書いてあった。翌朝、同アプリに届いていたボイスメッセージで、わたしはコスタリカの恩師の突然の訃報を知った。

マルコス・ゲバラ（Marcos Guevara Berger）氏は、コスタリカのインディヘナ（先住民）研究で知られる人類学者だった。わたしがまだ学部生の頃、留学生として来日していた彼の教え子を介してその名を知り、その後メールでのやり取りをさせてもらうようになった。フィールドワークのためわたしがコスタリカを年に数回程度訪れるようになって以降は、たびたび対面で会う時間をつくり、またコスタリカ国内外の研究者や実務家と知り合う機会も与えてくれた。その彼が何十年にもわたって取り組んでいたのが、インディヘナの人びとの権利回復運動である。コスタリカ総人口の約 2.4 パーセントを占めるといわれるインディヘナの人びとは、コロンブスの「新大陸発見」から今日にいたるまでの 500 年以上もの間、さまざまなかたちであらわれる差別や抑圧のなかを生き抜いてきた集団／個人である。近年とくに先鋭化しているのは、コスタリカ国内 24 か所に存在する先住民居住区と呼ばれる土地をめぐる地域紛争や小競り合い（コンフリクト）である。1970 年代に施行された法律には、先住民居住区として境界線が引かれた土地の所有権は「先住民コミュニティ」へ返還されるべしという条項や、「インディヘナである」という条件を満たさない者が同法律施行以降に土地購入等を行うことを

禁止する条項が明記された。しかし、実際にはいずれも遵守されてこなかった。また、同法律の想定する「先住民コミュニティ」や「インディヘナである」ことの解釈をめぐっての論争も生じた。さらに、未返還の土地の権利回復を求めて運動していたインディヘナの活動家2名が2019年と2020年にそれぞれ何者かによって殺害されるという事件も発生した。ゲバラ氏は、あるときは専門家証人（expert witness）のような立場で各種裁判に関わり、人類学的な知見から土地所有等に関する証言を行ってきた。またあるときは一人の人権活動家として、インディヘナの人びとが直面してきた／いる諸問題についてメディアをとおしてより多くの人びとへ訴えかけてもいた。

マルコス先生とライブで対面し言葉を交わすことはもう叶わない。お別れの会にもリモートでしか参列できない。しかし、SNS上に残された、いつかの彼がそのときどきに投稿したコメントや画像、映像、そして彼自身の、また彼が聞いた／聞こうとした複数の声を非ライブ、リモートで受け取ることはできる。日本の「世直し」の先達が手書きで残した膨大な日記や書簡からの語りかけを受けるように、マルコス先生のアカウントのなかに溢れる断片的な、ときに落胆しときに奮起するヴォイスを受け取ることで、彼との画面越しの交流をこれからも続けていこう。

10 記憶を継ぐ者の責務

日高悠登

高齢であった祖父が亡くなり、半年が過ぎようとしている。私の記憶の中では、夏休みに訪ねるといつも温かく出迎えてくれた優しく穏やかな祖父であった。彼は19歳の頃、日本陸軍の一兵卒として徴兵されて南方戦線に出征し、何度も死線を搔い潜った話を私は幼い頃から聞いてきた。

中でも、台湾でマラリアに罹患して死の淵に立たされた話は印象的であった。高熱で朦朧とした意識の中で、上官が枕元で自分の名前を呼び掛ける声に加えて、軍医の「こいつはもうだめだ」と言う声を祖父は覚えていた。幸いにも軍から薬を支給されていたが、死が近いと悟り「死ぬ前に旨い物が食べたい」と現地民の家を訪ねて、半分残した薬と交換に、野菜とバナナを食べさせてもらえた。それが契機で体力が回復し、祖父は再び日本の土を踏めたのである。

思い返せば、少年時代は男女問わず祖父母の戦争経験を直接聞く機会があった。小学校で使用した社会科の教科書には、児童たちに囲まれて戦争を語る老夫婦の挿絵が掲載されていたと記憶するが、その光景は当時としては何も珍しくなかった。だが時が経つにつれ、現在の若い世代にとって戦争経験談は曾祖父母が語る話へと移り変わり、曾祖父母がいなければ、次は教科書などの書籍やウェブ情報等で知ることになり、過去にいた誰かの出来事に変わりつつある。こうした時の流れを私は身にしみて感じている。「NHK戦争証言アーカイブス」では、あらゆる人々の貴重な戦争証言が公開されており一見の価値があるが、当コンテンツに限らず、より多くの戦争証言を早期から収集して体系的に公開する事業が従来少なかったことは、一つの社会的損失ではないかと思わせる。

経験を経た者とは、経験を記憶した者でもある。祖父が語った記憶は、私たち子孫に引き継がれた記憶であり、私たちの中で生き続けていく記憶として、これからも大切にしてゆかなければならない。それは祖父が生きてきたからこそ、私たちはこうしてこの世に生を受けられたからである。そのことに最大限の感謝をするのみならず、記憶を継ぐ者としての責務が生じていると自覚する。

2021年とは、わが国において敗戦から76年を数える年である。それは敗戦以降、小規模な戦禍にさえ見舞われることなく平和を享受できた歳月を表す。だが、すでに東アジア情勢は米中対立、中国の南沙諸島への領土拡大および国境侵犯等、戦争の火種が燻っている状況下にある。私たちのように戦争を経験しない世代は、かつての戦争の記憶を継ぐ者であると同時に、将来起こり得る戦争の可能性と向き合いながら、国を守る意志を携えた者として現実に向き合う必要がある。それは戦死者たちと戦争犠牲者たちが必死で守り、生きようとしても叶わなかった望郷の先にある国土を、守り続ける責務が生じていることをも意味する。いつまでも彼らを偲ぶ世の中を維持できるよう、さらに新たな犠牲者が出ないよう、時にはそれぞれの立場を超えて、未来を守る声をこれからも次世代に届けなければならない。

第7集 「世直し」ノオト（2021年度・夏）

最後の第7集でご紹介するのは、第32回から第37回までの研究会（2021年2月～2021年7月）における対話から編み出された10編のエッセイです。

長引くコロナ禍にあって、すべての研究会がオンライン開催となり、読書会を中心に下記のテーマを通して〈世直し〉に向きました。

- | | |
|------------------|---|
| 第32回（2021年2月24日） | 読書会〔課題図書〕ガブリエル・ガルシア＝マルケス著『コレラの時代の愛』（木村榮一訳、新潮社、2006年）【オンライン開催】 |
| 第33回（2021年3月24日） | 環境でお金を受け取る仕組み—「生態系サービスへの支払い」と関わるコスタリカの先住民居住区とその住民についての一考察—【オンライン開催】 |
| 第34回（2021年4月28日） | 読書会〔課題図書〕ナディア・ムラド著『THE LAST GIRL—イスラム国に囚われ、闘いを続ける女性の物語—』（東洋館出版社、2018年）【オンライン開催】 |
| 第35回（2021年5月24日） | 読書会〔課題図書〕瀧谷智子著『ヤングケアラーわたしの語り：子どもや若者が経験した家族のケア・介護』（生活書院、2020年）【オンライン開催】 |
| 第36回（2020年6月23日） | 読書会〔課題図書1〕中井久夫著『災害がほんとうに襲った時—阪神淡路大震災 |

50日間の記録』(みすず書房、2011年)

[課題図書2] 中井久夫著『復興の道なれば—阪神淡路大震災一年の記録』(みすず書房、2011年)【オンライン開催】

第37回（2021年7月21日）「世直し」ノオト（2021年度・夏）合評会【オンライン開催】

この第7集には、うち続くコロナ禍にあって思索を深めたエッセイや、最後の「ノオト」ということもあり、世直し研究会の黎明期からのあゆみを振り返って記したエッセイNo.1「世直しのコミュニケーションデザイン」やNo.3「小さな共同体」も見られます。

1 世直しのコミュニケーションデザイン

池田光穂

2022年の春をもって大阪大学COデザインセンターの組織としての一区切りがつきます。世直し研究会の前身は、COデザインセンターの前身の組織のコミュニケーションデザイン・センターが運営していた現場力研究会です。この組織は世直し研究会のホームページよると2006年4月12日に発足しています。

当初は当時注目されていた「現場力」という言葉を手掛けりにして、各人の考える現場力を、課題図書を読むことを通して彫琢(ちょうたく)していこうとしたのです。そうこうしているうちに、みんなが考えている現場力は、えらい専門家が現場で披露する卓越した技術などではなく、一般のごく普通の人たちが、生活のいろいろなところで使っているあり合わせの道具や自分の身体を使って、自分の経験になじんだやり方で、自分流に「うまくやっていくこと」と深く関係することが、メンバーのあいだで共有されるようになりました。現場力研究会は2015年度に170回を数えて休止し、2016-2017年度は、大阪の釜ヶ崎での研究のメンバーである西川勝さんと宮本友介さんが主宰する「哲樂の会」に引き継がれました。

そして2018年度にCOデザインセンターに岡野彩子さんが研究員として赴任してきたときに研究会の再興の話があがりました。岡野さんは憲法9条をノーベル平和賞に推薦する市民活動に関わっておられ、わたしは現場力の精神を世のため人のためにつかうことはできないだろうかと考えており、すぐに浮かんだのは大坂の大塩平八郎です。わたしたちの大学では、適塾の緒方洪庵、大坂町人五同志による懐徳堂の末裔を尊称しますが、寡聞にして「大阪大学の世直し精神は大塩平八郎に遡れます

す」と誇る同僚はこれまでいませんでした。幕府に抵抗して最後は密告され鎮圧の中で45歳で自刀自爆死したということが瑕疵になっているのでしょうか？わたしなどはボリビアの農村で39歳で政府軍の鎮圧部隊に超法規的に処刑されたチェ・ゲバラとならんで、弱き者のために立った彼らの精神こそが大阪大学にもっとも必要とするものだと感じます。

これまでさまざまな世直し研究会のメンバーの発表をお聞きしたり、「世直し」ノオトの編集に携わるなかで、参加者の世直しの精神に対する熱い気持ちがひしひしと伝わってきました。『南総里見八犬伝』ではありませんが、この世には世直しの精神を持った血氣盛んな人たちがたくさんいますが、いまだネットワークされていない状態です。（どんな名前が将来つくかわかりませんが）未来の世直し研究会で新しい仲間と再び会える日を楽しみにしたいと思います。So long!!!

世直し研究会ホームページ

https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/roaldo/Yonaoshi_study_group2018.html

2 この「崩壊」は恐ろしい

井上こう

コロナ禍の日本では、2021年の年初から5月頃にかけて「医療崩壊」という言葉が躍った。思うところあって少し丁寧に新聞を読んだ。4月、大阪府の医療監が各保健所宛てに「年齢が高い方は入院の優先順位を下げるを得ない」とメールしたことが判明した（その後府は撤回・謝罪）。命の選別に踏み込もうとする行政の発想は水面下で根深いのではないかと気になった。

大阪府からのメールは、コロナにかかわらず、DNAR（蘇生措置拒否）の意思を示している高齢者施設入所者について「看取りも含めて対応をご検討いただきたい」とも記していた（朝日新聞2021年4月30日）。DNARは心肺停止等の急変時に蘇生・延命措置を求める意思表示のことで、重篤でも人工呼吸等すれば回復の見込みが十分あるのにそれをしないという選択を導くなら見過ごせない拡大解釈だ。だが、DNARを意思表示した入所者がコロナを発症したら病院を頼らず施設で看取ることも考え方正在する。DNARは尊厳死関連の概念で、命の選別への横滑りを警戒すべきものだが、まさに横滑りの姿勢が示されてしまったのだ。しかも拡大解釈的であり余計にたちが悪い。大阪府と同様の通達は昨年末から今年初頭に東京都八王子市や神奈川県川崎市からも出ていた。川崎市はさらに、高齢者施設や障がい者施設に対し入所者がDNARを希望しているかどうかがわかる一覧表作成を依頼していたという（論座2021年5月19日）。行政は優生思想的にしわ寄せ先を想定したと言わても反論できないのではないか。

問題は実際の対応に表れた。病院では必要な救命措置を施せない例が多発していた。高齢者施設では患者発生の際に当人に「延命」希望の有無

を聴取するも、希望なら病院に搬送できない。希望しないなら形だけの搬送先がすぐ決まるが、搬送先で必要な処置なく死亡しても何も言えないことの覚悟を迫られるという話があった（毎日新聞2021年2月1日）。自分の命を選別する踏み絵を迫られるのもむごいえ、踏むのを拒めば「待たせ殺し」、踏んだなら「延命」を希望しないゆえの「看取り」対象にされてしまう。本当にひどい話だ。

発熱した4月下旬から保健所に200回以上電話して5月初めにようやく入院なるも、気管挿管やエクモ装着は断られ、「限りある医療資源なので若い人を優先したい」と病院側に告げられ、5月下旬に亡くなってしまった大阪府の68歳男性の話も報じられている（毎日新聞2021年7月13日）。門真市の老人ホームでは、4月から5月にかけて、入所者と職員合わせて61人がコロナに感染、このうち入院先が決まらずに施設にとめおかれ、症状が悪化するなどして入所者13人が亡くなった（毎日新聞2021年5月7日）。

突然大地震が起きてトリアージというような事態ではない。人口当たりの病床数は日本は格段に多いのにこんなふうになってしまった。この執筆時点は21年7月中旬で、数か月前のことも忘れそうになるが、何がどんなふうに崩壊したのかを忘れてはいけない。

3 小さな共同体

岡野彩子

ナチス体制を拒否した市民的抵抗グループの一つ〈クライザウ・グループ〉の中心人物である法律家ヘルムート・ジェームズ・フォン・モルトケ（1907-1945）は、グループの結成以前に「小さな共同体」(*Die kleinen Gemeinschaften*, 1939) という覚書を著し、下からの自治形式によって各人の責任感を呼び覚ます共同体に、〈總統国家〉に代わる構成基盤を求めていた。それは個々人が孤立してひたすら大きな共同体、すなわち国家に拠り所を求める大衆のあり方を克服し、〈個〉の復権を目指す。この共同体の本質は、共通の目的をもってまとめられること、そして自分たちの目的の追求が大きな全体性の枠内におかれ、他のすべての人々に対する責任を理解していることにあるという。

反ナチ抵抗運動に关心を寄せ 30 年近く研究を続けている私は、世直し研究会を発足するという話を聞いた時、すぐにこの小さな共同体のことが頭に浮かんだ。もちろん時代背景も異なり、ヨーロッパ的秩序として思考されたものだから、そのまま現代日本に置き換えられるわけではない。しかし世直し研究会という小さな集いが、大きな全体性に対する責任を担う力を育てうる場となることを願う気持ちがあった。というのも、そもそも私が反ナチ抵抗者たちに心惹かれたのは、ドイツ国民の大半がヒトラーを支持した時でもナチズムに心酔せずその問題性を見出し、回復を求めて行動することがなぜ出来たのか、彼らの市民的勇気の礎となるものを知りたいと思ったからだが、学生時代の私はまだ責任について深く考えたこともなければ、政治にもほとんど無関心だったからである。

そんな私に転機が訪れたのは、1990年代に7年間ドイツで〈外国人〉と

して暮らした時だった。当時ドイツでは極右による暴力事件が多発し、とくにトルコ人やベトナム人などの出稼ぎ外国人労働者が標的となつた。しかし就労目的の滞在者にかぎらず襲撃を受けることがままあり、私自身も何度か怖い思いをした。それまで母国で微塵も身の危険を感じることなく生きていた私は、外国人として他国にいる恐怖というものを生まれて初めて味わったのだった。しかしこの経験によって、苦難を受ける者の視点をわずかなりとも授かったことに、今では心から感謝している。

そうしたドイツでの不穏な空気に怯えながら暮らす中で知ったのが反ナチ抵抗者たちの存在である。彼らの中にはユダヤ人など迫害される人々を顧みて行動を起こした者も少なくない。私はユダヤ人らが味わっただろう恐怖、孤独、嘆きを想像しようとするたび身がすくんだ。もしのような孤独の深淵で、たった一人でも本当に、〈よそ者〉である自分のことを本気で考えてくれる人がこの世に存在したなら……。そんなことを繰り返し考えた。苦難を受ける側の視線をわずかながらも授かつた今、以前のように他人事として目を背けていられなくなっていた。そして〈責任〉を担うこととはどういうことか、本気で考えるようになった。とはいえただ統治されることに慣れきっていた私にとって〈個〉の覚醒はまったく容易なことではない。しかし悲觀せず、小さな共同体の中で何らかの形で責任の一端を担うことを通して責任を担う力が少しでも培われていくことを願っている。

4 死なれっちまったく

上條美代子

2021年6月16日21時過ぎのこと。私はワクチン接種業務が終了し、スマホをONにすると同じ番号の「着信」が16:30から7件あった。慌ててリダイヤルすると「親父（Aさんは89歳、亡き従妹の夫）が逝ってしまった。死なれっちまいました」と息子のBさん。携帯に出ないので自宅を訪ねたところ浴室で倒れていた。私に連絡が取れず、警察の検死となつたが「冠動脈疾患による病死後二日」で落着となつた。

Aさんは7年前に妻に先立たれてからは都内の住宅地でひとり暮らしをしていた。息子Bさんの家族は車で1時間強に住んでおり、月に数回訪問していた。飯はおろかインスタントラーメンも作れず、加えて極度の偏食のツッパリ爺だ。外食と弁当の生活で先が危ぶまれた。息子のBさんに「他の人の云うことは聞かないけれど美代ちゃんは別。治療中のガンも心配なので親父をよろしく」と頼まれた。私は没イチ二年目だった。早速、相談の上、「初めてのひとり暮らし」を楽しめるようにケアプランを立てた。弁当の選び方、電子レンジの使い方ほか、ゴミ箱の中身から質量的にも食べているか確認した。血液検査、腫瘍マーカーや歩行数の推移を健康手帳につけ、手紙で知らせるように頼んだ。私が支えた、というより、頼られる事で自分の役割を自覚し、ケアの専門家としての立ち位置を保つ事ができたと思う。喪の作業を行った気がする。小旅行への付き添いを頼まれる事もあった。コロナ下では、訪問もできずもっぱら電話や手紙のやり取り。歩かずに済むのはいいが、外出自粛をぼやいていた。孫たちに会えないので致命的だった。次第に心身が老い衰えたのでBさんと相談し、ご近所さんへ朝夕の声かけのお願いを再度して、こちらからの頻度も増やす事にした。それから半月後に死なれつ

ちまった。葬儀にはご近所の方々や子どもたちも集まり「コドクシ」「フロバ」の単語も飛び交う賑やかさ。喪主のBさんは「故人は率直な物言いで周囲を不快にさせ軋轢を増やしました。本当にすみません。7年前に逝ったおふくろがクッション役でしたが、難聴のせいもあり、一方的な電報のようで話にはならなかった。なのに、こんなにもご近所の皆さんに集まって貰え親父は幸せ者です」と、挨拶した。私は「Aさんは立派でした。<孤独死>いえ<自立死>です。斎戒沐浴まで済ませるなんてちょっとやり過ぎ」と、ゆっくりはっきりと申し上げ、柩に写経や白衣観音像そして感謝の手紙を添えた。お骨はきれいで小柄な割に立派な骨片だったのでAさんは定命を全うしたと実感した。

鷺田清一先生は「死なれる」ことが<死>の経験の原型だと考えたら、とかつて主張したことを思い出した。Bさんにとって想定内ではあったが受け入れ難い事象をたった一人で担うことになった。香典返しはAさんの大嫌いな高級梅干しだった。あの「への字」の口許を思い出せということだろうか。死なれっちまったが、Aさんは「死者」として私たちの中に生きているのである。

「不在」という存在感にくるまれて 箐おき一つ百日を越ゆ

5 まず「聴く」ことから—寄り添うとは

北村敏泰

ジャーナリストとして、世間で苦にある人を支える人の取材を長く続ける中で、世直し研究会でも示唆的な話を伺い、人に寄り添うとはどういうことかを考えた。例えば「cure（治療）より care（お世話）」、問題解決型とは違う、「共にいる」「共苦」という支え方だ。

東日本大震災から10年の2021年3月、岩手県釜石市で長く地道な被災者救援を続ける寺院の住職が話した。震災体験が風化する中で、外部からなお支援や様々な催しに訪れてくれるボランティアには感謝するが、一方で彼らの一部が「被災者はこうに違いない」という先入観を持ち、「こうすれば喜ばれる」という勝手な思い込みで接してくる例を何度か見たという。「それでも私たち被災者は『ありがとう』と言うしかないのです。あなたは何に困っているのですか、何が辛いのですか、と尋ねることをなぜしないのでしょうか？」

筆者が数多く取材した宗教者たちは特に、この「共苦」つまり、まず相手の身になるという姿勢が顕著だった。もちろん問題が解決するに越したことはないが、人智ではどうしようもない苦難に直面した時、人は一緒に涙を流してくれる人に自分を支えられる気持ちになる。その一つの側面は“弱さの連帶”ということだ。人間は弱い。自らについても含めてそのことを知っている者は他者の痛みを理解することができる。だからとことん付き合うことができる。そこに強靭さが生まれる。

まともな宗教者はその手掛かりを持っている。浄土教の「凡夫」つまり「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。弱い人々の「罪」を引き受けて十字架に掛けられたイエスはいわば弱者の代表である。それらの「モデル」は生き難い現代社会でも訴求力を有する。病院のチャプ

レンとしてスピリチュアルケアに長年携わった僧侶は、暗黒の海で溺れている人に対して、一緒に溺れなければ何もできないということはないが、一緒に溺れた気に勝手になってしまっても、岸から浮き輪を投げるだけでもいけないのではないかと葛藤を続ける。

北九州で野宿者や生活困窮者らを支える牧師は、互いに傷付き躊躇をも含んで相手をそっくり受け入れるその活動を、伐り出した粗削りの原木を抱きしめるという意味の「抱樸」と名付けた。京都を中心に自死念慮者への電話や面談での相談活動を続ける団体の理念は、単純な「自死防止」ではなく、「死にたいほど苦しい」相手の心に共鳴することだ。だから、話を重ねてもどうしても死を選ぶ、他者にはどうしようもないそれほどの苦悩を抱えて孤立する人が最終的に命を絶つことを決めた時は、引き止めるよりも「あなたと話ができる良かった。ありがとうございました」と告げる。その人がせめて、最後まで孤独に絶望して亡くなることがないようにと願って。

よく言われる傾聴。「聴す」と書いて、「ゆるす」という読みがある。「一体どうしたの？」 そう聞くことは、まずは相手の気持ちを受け入れることだ。

6 「しかたなかつたと言うてはいかんのです」 ～九州大学生体解剖事件～

熊野以素

終戦直前、撃墜された米軍機搭乗員の捕虜8人が4回に分けて西部軍捕虜収容所から九大医学部に移送され、生体実験で殺され、遺体解剖された。この「生体解剖事件」の関係者はB級戦犯裁判にかけられた。主役である第一外科の石山教授は逮捕直後自殺し、軍との中継ぎ役の軍医も空襲で爆死していた。その為、「軍の命令か、医師側の発案か？」は明らかにされないままとなつた。参加した医師と軍の直接関係者は死刑を含む重刑を宣告されたが、のち減刑された。九大当局は事件発覚直後に「当事者が勝手に大学の設備を使ってやつたことで我々は全く預かりしらない」と宣言した。事件は九大のタブーとされ、真相を語る人はなく、急速に忘れられた。忘れさせられたというべきか。

筆者の伯父は第一外科の助教授であった。生体実験の1回目は知らずに参加し、2回目は手術に反対したが容れられず、後半の補助作業を行つただけであった。その後は参加しなかった。しかし、弁護団の作戦で教授の身代わりとされ、死刑判決を受けた。煩悶の末「止められなかった」責任を取り、死を受容する心境に達した。伯母の必死の再審査運動で減刑されたが、「満期服役」し、深い後悔を抱いて後半生を送った。

筆者は事件の真相を明らかにしたいと長年思っていたが、裁判資料が日本側になく、叶わなかつた。2009年、国会図書館が戦犯裁判の全記録をアメリカから入手し所蔵していることを知り、取り寄せ、読み解いた。この中に再審査資料が含まれていた。本裁判では大学を庇う為に、また弁護団の作戦にのせられ、沈黙や虚偽証言をした被告たちが重刑判決に驚き、再審査にむけ真実を語っている。「捕虜は西部軍から正式に移送さ

れ」「軍の高官が立ち会っていた」「実験は公開だった」「学外の見学者が何人もいた」「学部長は承知していたに違いない」一等々石山教授は早くから計画し、第一外科の組織を挙げ、解剖学第2教室の協力をえて「医学の進歩のため」生体実験を行った経緯も明らかになった。

「生体解剖」は西部軍と九大医学部の共同犯罪である。膨大な資料から得た筆者の結論である。

「研究結果を人体で試したい」— 石山教授は平時には許されない「悪魔の誘惑」に従った。関係医師達は医学部という組織に縛られ、積極的あるいは消極的に参加した。「教授の命令だったから」「軍人が見張っていたから」「しかたがなかった」— 参加した医師達の多くはそう語った。

「それをいうてはいかん、どんなことでも自分さえしっかりしつければ、阻止できる。仕方がなかったなどとゆうてはいかんのです」。後のインタビューでの伯父の言葉である。これが拙著をもとにしたNHK終戦ドラマ（2021年8月13日夜10時放送）の題になっている。極めて今日的な言葉ではないか。大きな力に屈して誤った道に引きずり込まれ、後に「しかたがなかった」などということがないように、今頑張らなければと筆者は思う。

参考文献

熊野以素（2015）『九州大学生体解剖事件—七〇年目の真実』岩波書店。

7 わたしと世直しと音楽と

滝奈々子

わたしの専門である民族音楽学とは、音を紡ぐ人びとの活動（＝「音楽」と定義）を文化的・社会的に研究する学問のことをさします。音楽（music）とは、わたしたちが楽曲をすぐに想像するように、ある時間経過の中で進行するメロディー、ハーモニー、リズム、そして音色の要素から構成されます。エリック・ドルフィーというサクソフォニストは、晩年のレコーディングアルバムのなかにある「ミス・アン」という曲が終わった瞬間に、“When you hear music, after it's over, it's gone in the air. You can never capture it again.”（君が音楽を聴き、それが終わったとき、虚空の彼方に消えてしまう。君はそれを二度とつかむことは決してできない）という声を残しています。

このような「儚い」音響的特性を研究するのが民族音楽学（ethnomusicology）です。でも虚空の彼方に消えてしまう音楽をどのようにして研究するのでしょうか？ その手がかりは、文化人類学の方法にあります。すなわち後者は、研究対象になる人びとの生活に訪問し、彼／女らと同じ食事をし、言語を学び、インタビューをおこない、観察し、彼／女らのおこなっていることを記録する一連の方法からなります。インタビューの会話もまた対話が終わった時に虚空の彼方に消えてしまいます。しかし記憶と記録は残ります。音楽も民族ごとにさまざまな様式の音楽が存在します。人びとの〈音的経験〉もまた、記譜やその他の形で記録し、また身体記憶として呼び戻す（＝それを演奏や再演といいます）ことが可能なのです。民族音楽学は、このように音楽を紡ぎ出す人びと（＝民族）の〈音的経験〉を、楽器の発展や変化の歴史や、そして語りや行動を記述することを通して明らかにします。この記録され

た書物や録音を「音楽経験のエスノグラフィー（ethnography of musical experience）」と呼びます。民族音楽学者は、このような音のエスノグラフィーを編む文化人類学者のことなのです。音楽を通して2つの学問は融合します。

では、世直しの経験と音楽はどのような関係があるのでしょうか？音楽をすること（musicking）には、ケアや癒しの効果があり、自己に内在する葛藤を緩和する作用があります。わたしはその様子をグアテマラ共和国のケクチ民族による祭礼において体感してきました。彼／女らは、差別や貧困のらせん状態のなかで生活しながらも、祭礼において司祭へ寄り添い、寄り添われ、ケアラーとも言える司祭に心のうちを吐露し、躊躇ながらも生を紡ぎつづけているのです。その意味で音楽と世直しはわたしのなかでは同一です。

世直しの運動においても音楽においてもまた鼓動が速まり涙が滲むような感動があります。さいわい研究会の池田光穂先生らと「中米・カリブにおける感覚のエスノグラフィーに関する実証研究」のテーマで科研費を今年になり獲得することができました。世直し研究会で得た世直しと癒しの関係を今後はグアテマラでの音楽経験を中心に明らかにしていくつもりです。

8 翻弄するケア

日高悠登

「虫ケア」—とある小売店の一角にて、偶然目にした文字である。私は少しの間、意味を考えた。既に虫が大量発生する季節に突入したのだから、「虫」を「ケア」するのではないだろう。そう、これはきっと殺虫剤用品関係だ。そう目星を付けて一角に近付くと、案の定、殺虫剤を主として蚊取り線香も並べられ、夏の到来をより強く実感させられた。これ以上の説明は不要であろう。「虫ケア」は、人間に利益をもたらす方での意味がある。この言葉は短くも的確な表現として、誰かが編み出したのである。ただ、この季節、一部の小売店ではカブトムシやクワガタムシが売られているので、昆虫の飼育用品と誰かが間違えなかった保障は無い。だから、この言葉を使うのは少し待って欲しいという気持ちもあった。誰も疑問に思わなかつたのであろうか、と。

この言葉が採用された理由は、単純に購買客の目を引くからである。また、こうしたケアの誤用を実際に目の当たりにしたのはまだ2回目である。ケア用品を購入したり、目にしたり、あるいは買わずとも手に取る機会がある為か、消耗品としてのケアは生活上、特に欠かせなくなつた。私にはケアという時代に巻き込まれたように思えてならず、だから、巻き込まれたなりに考えることが多い。例えばそれは、ケアの対義語とは何だろうかという問いである。傷付ける、攻撃する、責めるだろうか。だが、どれもしっくりこない。ヒントとなりそうなものは、日々の生活の中に隠れていそうである。

今年の初夏は、珍しく庭に大量発生した蛾を駆除する日々が続いた。それが終わると今度は、毎年大量発生している毛虫の駆除に専念する中、不注意で毛虫に手首を刺され、流水で患部を洗い流す処置を行ない

つつ、遂に殺虫剤を手にした。こうして若干の庭の手入れを行なった。そして、お気に入りの日本製黒ブーツの手入れへ、私は半年振りに取り掛かった。馬毛ブラシによる埃落とし、汚れ落としの液体を染み込ませた布で軽く拭き、ミンクオイルを薄く全体に塗り、仕上げは豚毛ブラシで馴染ませる。革紐にもミンクオイルを染み込ませ、清潔な中敷きに新調して、踵部分の補修はまだだと判断する。古くなくとも、大切にした物には魂が宿る。そんな事に思いを馳せる自分の姿が庭にあった。

振り返れば、手近なところで無意識の内に、自分で自分を支えていた。害虫駆除は庭のケアであり、手首を流水で処置するのは皮膚ケアであり、ブーツの手入れは、そのままブーツケアである。角張った表現ならば、何らかの利益を受ける為に、自らもケアという名の維持を行なう。これらを怠れば、その後に支障が出て、不利益が生まれる。ケアの対義語はケアしない、無視するという、否定語か他の言葉の借用により表現出来そうなものだが、実際は、わが家の庭の様に複雑であろう。庭の住民にはニホントカゲ、カナヘビ、ヤモリ、シマヘビがあり、最近では新たにセミとバッタが加わった。動き回る彼らの様に、ケアも人間を翻弄するのであろうか。まだ見極めが必要なようである。

9 「世」を問う — 世間とソーシャル

宮本友介

このところ「ソーシャル・ディスタンス」という言葉をさんざん耳にしてきたが、元になったsocial distancingという用語とは随分と意味合いが異なるように思う。とはいえ、すでに定着してきた用法でもあるので、いまさら糺すべしというものでもないだろう。だが、二つの用語の差異がどのようにして生じているのかという点は興味深い。

Hall（1966）が提唱したproxemics（近接空間学）では、文化的背景や相手との親密さによりコミュニケーションを取る時の物理的距離（physical distance）が変化することに注目する。そのうち、social distanceは他者との「私的ではないコミュニケーション」の際に取られる距離を指すものとして挙げられており、具体的な目安としては4～12フィートとされ、プライベートには立ち入らない間柄での物理的距離という意味となる。このときの「ソーシャル」には、自己と他者の界面を指すことになる。一方で、social distancingというときにはdistanceは動詞としての用法になり、他者との「距離を取る・接触を避ける」という意味を内包することになる。ここに係るsocialは個と群の間、集団全体での取り組みを指すことになる。ソーシャル・ディスタンスとsocial distancingでは「ソーシャル」の表すスコープが異なるのである。

阿部（1995）は、日本で古来より使われた「世間」という言葉は、自分と関わりのある世界という狭いものであって、西欧的な「自己から切り離して対象化した」社会（ソサイエティ）とは等置できるものではなかったと指摘している。確かにそうだ。しかし、「ソーシャル」については上記のように幅広いスコープを持つ。

「世間」とは、元来の仏教用語としては煩惱に溢れたこの世、淨土に対

する穢土の意を表した。われわれ衆生はそこに身を置きつつ「出世」にあこがれるのである。「世間慣れ」や「世間知らず」といった言い回しは、自己と他者の界面での個人の特性を表している。また、自らを取り囲む環境という意では「よもやま」という言葉もあるが、いずれもその対象は漠然としたものである。

一方で、「ソサイエティ」は「人の集まり」が原義であるが、その対象は具体的な特定の目的を持ったものであり、はっきりとした境界線を持ったものであり、共同体・自治体を指すこともある。「ソサイエティ」に「社会」という訛語が定着する以前の日本語では、「世間」よりも「ムラ（村・群）」といった方が近いのかもしれない。「ソーシャル」は「ソサイエティ」と同根であり、その形容詞としても用いられるが、個と個、個と群の界面での特性を含んでいるという点で「世間」と「ソーシャル」には共通する部分があるのではないだろうか。さて、「世直し」の世とは……。

参考文献

Hall, E. T. (1966) *The Hidden Dimension*, New York: Doubleday.

阿部謙也（1995）『「世間」とは何か』講談社.

10 「助かる文化」を考える

山森裕毅

2020年9月頃、NPO法人リベルテさんに声をかけていただいて、「ちくわがうらがえるpresentsのきした話：ソロソロ、コロナ（……）」というイベントにゲストスピーカーとして参加した。メインの話題は長野県上田市でコロナをきっかけに生まれた「のきした」というプロジェクトのことだった。それは劇場や銭湯や喫茶店、食堂、ゲストハウスなどが連携し合って、街のなかに「雨風をしのげる場=のき」（困難な状況に置かれた時に逃げ込める場所）を大なり小なり分散的に作ることで、「助かる文化」を形成するというものである。

私は精神科グループホームで非常勤スタッフをしていたこともあって、助ける・助けられるという非対称な関係性で支援の現場が回っていることを体感的に知っていた。この非対称な関係は、支援者側の「助けてやってる」感（優越感など）や支援される側の「助けてもらってる」感（恥や劣等感など）を感じさせたり、支配・従属関係を生み出したりする要因といえる。仕事や状況の性質上、非対称な関係は避けがたい（そのおかげでうまくいくこともある）が、行き過ぎてしまう可能性はどこにでも潜んでいる。「助かる」という言葉は、そんな非対称な関係をほぐす絶妙な観点を提供しているのではないだろうか。そんなささやかな手ごたえが私にはあった。

「助かる」とは能動的な行為者がいない（あるいはその能動性が薄い）状況での受動的な結果=出来事と言えるだろう。自分（たち）ではどうしようもない困難な状況に置かれているときに、「○○さんに助けてもらった」と思うより以上に「助かったあ～」と思えるような状況や環境とはどのようなものだろうか。それを文化的に形成していくことは可能

なのだろうか。

助かるためには何が必要だろうか。何よりもまずは出会いの機会だろう。たとえば、知らない土地で道に迷い、とうとう深夜になってしまったとして、そこで煌々と光るコンビニを見つけたとき「助かった……」と心底思うだろう。偶然にも自分を助けることになる何かや誰かに出会えることが、ほんの一時であったとしても不安や疲労を取りのぞく時空間への導きとなりうる。

そのような出会いの機会があるためには、つまり偶然の出会いの可能性を高めるためには、助けになる場所や誰かができるかぎりいつもそこにある／いることが望ましいし、そういう場所がいくつも分散してあることが望ましい。そしてその場所があることや、そこに誰かがいることが日常的であることが望ましい。たまたま日常の営みの一端で出会ったからこそ「誰かを助ける」ことの能動性が薄い状態で出会えるような、誰かが知らぬ間に助かってくれているような、そんな日常性。

非日常をサバイブする誰かを自分たちの日常の営みのなかで受け止めることに「助かる文化」のエッセンスがあるだろうか。とはいえ、そのためにはその営みに誰かを歓待する余裕がある必要がある。この社会のなかではその余裕こそが難しくなっている事柄でもあるのだが。

～第7集 「世直し」ノオト（2021年度・夏）編集後記～

エッセイ No.6 「『しかたなかったと言うてはいかんのです』～九州大学生体解剖事件～」で紹介されている熊野以素さんの著作を原案とする終戦ドラマの拡張版が令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞テレビ・ドラマ部門優秀賞に選ばれました。心よりお祝い申し上げます。

受賞理由は次の通りです。

自身の米軍捕虜の生体解剖の「加害」の罪から目を背けず、真摯に向かい合う主人公の誠実さに胸を打たれる。戦争は、人間を容易に「狂気」に掻き立てる。その意味では、このドラマは今を生きる私たちにも重いテーマを突きつける。「人間の命に対してしかたなかったと、決して言つてはならない」という主人公のセリフは、いつの時代にも通ずるものだ。

引用文献

文化庁ホームページ：令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞の決定について「令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞受賞一覧」

URL: https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/93627001.html

あとがき

世直し研究会の前身である現場力研究会に私がはじめて参加させていただいたのは、2010年5月19日に開催された第102回研究会でした。恩師である哲学の小林恭先生にこの会について伺い、一度のぞいてみたいぐらいの気持ちで出かけたのです。ですから、12年後の今日にいたるまで参加させていただくことになるとは、夢にも思いませんでした。どうやら続けて参加できた秘訣は、自分の日常ではなかなか出会う機会がない方たちと知り合い、語り合えることが、心から楽しいと感じていることにあります。

また、大学内外のいろんな分野の方が集う現場力研究会では、ひとつのことがらにも十人十色の見方があることが明らかになり、たびたび驚かされました。そして無自覚に色メガネを通して世界を見ていたことに気づき、自分のものの見方や考え方の癖のようなものを知ることになりました。そのような意味では、私にとっての世直しは、まず自分直しから、自分を知ることから始まったといえます。

そうした気づきを与えてくれる大切な場であった現場力研究会が170回を区切りに休止になった時は、とても寂しい気持ちになりました。だから、研究会創設以来のメンバーでいらっしゃる池田光穂先生が、いつか再開しましょうと仰っていた約束をほんとうに守ってください世直し研究会として再生が叶ったときは、大変嬉しく思いました。

それから事務局および司会進行役として4年に渡って45回の研究会を開催させていただき、世直しという共通の志のもとに集う多くの方との出会いに恵まれました。本書のひとつひとつのエッセイから、それぞれの世直しへの強い思いを読み取ることができるでしょう。この小さな集いで得た人と人との結びつきこそが、明日の世直しの力を育むものであるように、今感じています。

2022年3月、世直し研究会は大阪大学COデザインセンターの組織と

しての一区切りを迎えます。本書をお読みくださり世直しに関心を寄せてくださった皆様と、未来の世直し研究会でお会いできる日を、心待ちしております。

本エッセイ集は、池田先生をはじめ、現場力研究会から世直し研究会へといたる歩みの中でご尽力くださった皆様との出会いと導きによって、かたちにすることがきました。この場をお借りして、お世話になったすべての方々に、心からの感謝と御礼を申し上げたいと思います。

2022年3月 大阪にて

岡野彩子

現場力研究会と世直し研究会による著作物

◆現場力研究会

「現場力」研究術語集

Communication-Design Vol.0, 2007年3月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 215-229.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/4365>

「現場力」研究術語集（第2報）

Communication-Design Vol.1, 2008年3月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 203-216.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/4628>

「現場力」研究術語集（第3報）

Communication-Design Vol.2, 2009年3月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 189-201.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/5998>

「現場力」ノオト(2010年・秋)

Communication-Design Vol.4, 2011年3月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 4-87.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/9204>

「現場力」ノオト(2011年・春)

Communication-Design Vol.5, 2011年9月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 81-93.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/6537>

「現場力」ノオト(2011年・秋)

Communication-Design Vol.6, 2012年3月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 103-117.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/3744>

「現場力」ノオト(2012年・春)

Communication-Design Vol.7, 2012年7月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 85-103.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/11182>

「現場力」ノオト(2013年・春)

Communication-Design Vol.9, 2013年8月, 大阪大学コミュニケーション・センター, 59-71.

URL: <http://hdl.handle.net/11094/25967>

◆世直し研究会

「世直し」ノオト(2018年度・夏)

Co * Design no.4, 2019年2月, 大阪大学COデザインセンター, 21-31.

URL: <https://doi.org/10.18910/71352>

「世直し」ノオト(2018年度・冬)

Co * Design no.6, 2019年7月, 大阪大学COデザインセンター, 1-12.

URL: <https://doi.org/10.18910/73009>

「世直し」ノオト(2019年度・夏)

Co * Design no.7, 2020年2月, 大阪大学COデザインセンター, 17-29.

URL: <https://doi.org/10.18910/75575>

「世直し」ノオト（2019年度・冬）

Co * Design no.8, 2020年8月, 大阪大学COデザインセンター, 19-31.

URL: <https://doi.org/10.18910/77265>

「世直し」ノオト（2020年度・夏）

Co * Design no.9, 2021年1月, 大阪大学COデザインセンター, 47-56.

URL: <https://doi.org/10.18910/78965>

「世直し」ノオト（2020年度・冬）

Co * Design no.10, 2021年7月, 大阪大学COデザインセンター, 1-14.

URL: <https://doi.org/10.18910/83303>

「世直し」ノオト（2021年度・夏）

Co * Design no.11, 2022年2月, 大阪大学COデザインセンター, 1-14.

URL: <https://doi.org/10.18910/86412>

◆研究会ホームページ

現場力研究会：<https://goo.gl/cPYDEv>



世直し研究会：<https://goo.gl/hvkRBz>



著者紹介

- 【編著者】 岡野彩子（大阪大学COデザインセンター）
- 【著 者】 池田光穂（大阪大学COデザインセンター）
 池宮輝哉（通称てるくん）
 井上こう（国立民族学博物館）
 今井 泉（大阪府立大学獣医臨床センター）
 海野 隆（医薬品非臨床安全性コンサルタント 獣医師）
 横本直樹（産業医科大学医学部・医学概論教室）
 上條美代子（看護師）
 北村敏泰（ジャーナリスト）
 熊野以素（日本社会保障法学会）
 小林 恭（大阪大学名誉教授）
 高橋 紗（大阪大学COデザインセンター）
 滝奈々子（京都市立芸術大学芸術資源センター）
 西川 勝（臨床哲学プレイヤー）
 西村ユミ（東京都立大学健康福祉学部）
 額田有美（国立民族学博物館）
 野島那津子（石巻専修大学人間学部）
 林田雅至（大阪大学名誉教授）
 日高悠登（龍谷大学世界仏教文化研究センター）
 ほんまなほ（大阪大学COデザインセンター）
 牧口誠司（高校教員）
 宮本友介（大阪大学人間科学研究科）
 安田伸行（通所介護事業所きやのあ）
 山本彩加（キュリオシティーチューター）
 山森裕毅（大阪大学COデザインセンター）

[50音順]